

【研究ノート 15】

サンユッタ・ニカーヤ「有偈篇」の神たち

森 章司

目次

はじめに……………	181
【1】 SN.001 <i>Devatā-saṃyutta</i> (天相応) に収録される経とその対応漢訳経……………	184
【2】 SN.002 <i>Devaputta-saṃyutta</i> (天子相応) に収録される経とその対応漢訳経……………	225
【3】 SN.009 <i>Vana-saṃyutta</i> (森相応) に収録される経とその対応漢訳経……………	244
【4】 有偈篇の神たちの統計……………	256
【5】 有偈篇の経に関する基礎的統計の分析……………	264
【6】 有偈篇に登場する神たちの呼称……………	266
【7】 仏教における神のパンテオンと有偈篇の神たちの位置づけ……………	271
【8】 神に対する統計の分析……………	274
【9】 「天相応」「天子相応」「森相応」に収録されている経の説時……………	288
【10】 サンユッタニカーヤと『雑阿含経』『別訳雑阿含経』の形成について……………	296
おわりに……………	300

はじめに

[1] 本稿は原始聖典に含まれる1つ1つの経の説示年代(説時)を推定する【研究ノート】の一環としてある。そしてその第1稿が【研究ノート13】「*Dīgha-nikāya*と対応漢訳経の説示年代の推定」であり、第2稿が【研究ノート14】「*Dīghanikāya*と対応しない『長阿含経』の説示年代の推定」である。

したがってこれに続くものは「*Majjhima-nikāya*と対応漢訳経の説示年代の推定」であるはずであるが、紙幅の関係でこれは「モノグラフ」の次の号に譲り、本稿が先になってしまった。構成としては整合性がとれていないが、ごく単純にこのような理由があることをご了解いただきたい。

[2] ところで本稿の標題は「サンユッタ・ニカーヤ「有偈篇」の神たち」となっている。そもそもは *Saṃyutta-nikāya* (SN.) に収録される経とその対応漢訳経である『雑阿含経』『別訳雑阿含経』に収録されるすべての経の説時推定を行おうと着手したものであり、必然的にその最初が有偈篇の「天相応」となった。

説時推定作業というのは、その経の仏在処やそこに登場する人物、そして経の内容、さらには釈尊教団形成史上のさまざまな事項を手がかりにして、その経のいわば「如是我聞。一時仏在……」の「一時」が何時のことであるかを特定しようとするものである。DN.やMN.に含まれる経は長い経で、仏がどこにおられて何をされており、そのとき誰が登場し、これ

に対して釈尊がどのような説法をされ、その後この誰それがどうしたというようなストーリーが記述されているから、その説時を推定する手がかりとなる。

しかしながらサンユッタ・ニカーヤの最初の有偈篇「第1・天相應 (Devatā-saṃyutta)」に含まれる経は、「神」が登場してこの神が釈尊と偈による対話(問答)をするという単純な構造をもつ経がほとんどであり(数個の例外はある)、ここにはそれなりに履歴がある人物がほとんど登場しない。したがって説時を推定する材料がほとんど含まれていない。後に詳しく紹介するが、これに対応する漢訳の『雑阿含』や『別訳雑阿含』にはそれでも仏在処を含む導入部と、そのとき「神」がどうしたという結部が付け加えられているが、パーリはこれさえも省略されているので取りつく島もないといってよい。要するにサンユッタ・ニカーヤについてはその最初からして完全に行き詰まってしまったわけである。

しかし詳細に読み進んでいくうちに、ここに登場する「神」とはいったい何物で、この編集目的は奈辺にあったのであろうかという問題や、これまでわれわれは原始仏教聖典に記されている記事は釈尊の言行録であり、史実が記されているものという前提に立って研究を進めてきたのであるが、神は現代のわれわれから見ると現実には存在するとは思えない非人であり、これらが主人公の経ははたして史実が記されていると考えてよいのかという疑問も生じてきた。

そこでいつの間にかテーマは経の説時から離れて「神」そのものとなり、範囲も「第2・天子相應 (Devaputta-saṃyutta)」「第9・森相應 (Vana-saṃyutta)」に登場する神に広がることになった。とはいっても本稿製作のもともとの動機はSNに収録されている1つ1つの経の説時推定にあるのであるから、叙述の合間にはこのような関心がついつい顔を見せることもあるであろう。

また説時推定作業を行うのは、われわれ研究グループの研究の最終目的として釈尊の生涯を明らかにしてこれを簡潔な「釈尊および釈尊教団形成史年表」としてまとめ、この「年表」に記述した事績を記す原始仏教聖典のすべてを配列した「釈尊の生涯にそって配列した事績別原始仏教聖典総覧」を編集せんがためである。そしてこの「総覧」には経典名とその所在だけでなく1つ1つの経の概要をも掲載したいと考えている。そうすれば自ずからこの「総覧」自身が壮大な「釈尊伝」になると考えるからである。先述したような本稿執筆の目的のためなら1つ1つの経の概要まで記す必要はないが、わざわざ多大な労力を使ってこれを記すのはこのような副次的な目的があるからである。

[3] ところでパーリ聖典の相應部 (Saṃyutta-nikāya) は大きく次の5篇に分かれている。

- I : 有偈篇 (Sagātha-vagga)
- II : 因縁篇 (Nidāna-vagga)
- III : 鞞度篇 (Kandha-vagga)
- IV : 六処篇 (Saḷāyatana-vagga)
- V : 大篇 (Mahā-vagga)

第1の「有偈篇」を除く他の4篇は、短い経を主題を中心として編集されたものであるが、この有偈篇のみは篇名の示すように偈 (gāthā) を有する経を集めたものであって、いわば

経の形態的な特徴によって編集されたものである。

この有偈篇は主題によって11の相応 (*saṃyutta*) に細分されているが、このなかには神 (*devatā*, *devaputta*) ⁽¹⁾ と釈尊もしくは仏弟子との偈による対話という形式をもつものが3つ含まれている。第1「天相応 (*Devatā-saṃyutta*) 」と、第2「天子相応 (*Devaputta-saṃyutta*) 」と、第9「森相応 (*Vana-saṃyutta*) 」である。

このほかに第6「梵天相応 (*Brahma-saṃyutta*) 」と第11「帝釈相応 (*Sakka-saṃyutta*) 」も神が主人公であるが、梵天・帝釈は仏教の神のパンテオンにきちんと位置づけられた、それぞれ固有の神格をもつよく知られた神である。しかし上記3つの相応に登場する神たちは、一目では仏教の神のパンテオンのどこに位置するのかわからない、個性が曖昧ないわば身元不詳の神たちである。

この論稿ではこのような身元不詳の神たちが登場する「天相応」「天子相応」「森相応」に登場する神を調査の対象とし、身元がはっきりした「梵天相応」「帝釈相応」は対象外とする。

なおこの有偈篇には、他に第4「悪魔相応 (*Māra-saṃyutta*) 」、第10「夜叉相応 (*Yakkha-saṃyutta*) 」が含まれ、第5「比丘尼相応 (*Bhikkhuni-saṃyutta*) 」に含まれる全経も悪魔波旬と比丘尼との偈による対話であるから、11相応中の8つが天神や悪魔、夜叉など非人との偈による対話を内容とする経ということになる。残された他の3つの相応は、第3「コーサラ相応 (*Kosala-saṃyutta*) 」、第7「婆羅門相応 (*Brāhmaṇa-saṃyutta*) 」、第8「ヴァンギーサ長老相応 (*Vaṅgisathera-saṃyutta*) 」であり、これらはコーサラ国の波斯匿王、バラモンたち、ヴァンギーサ長老が主人公である。

このようにこの有偈篇は偈を有する経を集めたものという形式的な特徴とともに、非人との対話という内容的な特徴をも指摘することができそうであるが、ここではとりあえず、「天相応」「天子相応」「森相応」に含まれる経とそこに登場する神たちををさまざまな視点から考察してみたい。

[4] 本稿の構想としてはとりあえず最初にパーリの「天相応」「天子相応」「森相応」と、主に偈の内容がこれに対応する漢訳の『雑阿含』『別訳雑阿含』に収録される経を紹介し、先述した本稿が関心を有している主題についての考察は節を改めて行う。

なおここで扱う3つの相応については後に詳しく考察するが、神の用語については各文献において次のように表わされ、その用語は区々である。

	天相応	天子相応	森相応
パーリ	<i>devatā</i>	<i>devaputta</i>	<i>devatā</i> ⁽¹⁾
雑阿含	天子	天子 ⁽²⁾	天神
別訳雑阿含	天	天子	天神

したがってそれぞれの文献の内容を紹介する時には元の文献に用いられている用語を用いるが、地の文章中でこの3つの相応に登場する神を総称する場合は「神」という用語を用いることにする。標題の「有偈篇の神たち」はこのような用語法に基づいたものである。

また細部にわたれば議論も必要であるが、3つの相応に登場する神には次のような特性があると考えておきたい。

- (1) 「天相応」と「天子相応」に登場する「神」は天上世界に住み、夜に辺り一面を煌々と照らしながら現れる神々しい神であり、この神の特性には2つの相応において特段の相違はない。
- (2) ただし「天相応」の神には固有名詞がないけれども「天子相応」の神には固有名詞がある。
- (3) 「森相応」の神は原則としてわれわれと同じ地上世界に住んでおり、昼間に現れて神々しくない。いわばわれわれ人間の延長線上にあるような神である。

なお現存の『雑阿含』『別訳雑阿含』に収められている経はパーリのように部類（相応）分けされていない。しかしここでは偈の内容が対応していることを基準にして、パーリの「天相応」に収載されている経に対応する経は「天相応」に、「天子相応」に収載されている経に対応する経は「天子相応」に、「森相応」に収載されている経に対応する経は「森相応」に分類した。また『雑阿含』や『別訳雑阿含』の偈の内容がパーリに対応しない、『雑阿含』『別訳雑阿含』にしかない経もあるが、これはとりあえず上記の3つのおおまかな神の特性を基準として分類した。これはあくまでもとりあえずの処置であって、神たちの精細な調査をした後で、不都合があれば修正する。

なおパーリと漢訳の対応経の探査は今までの緒論稿と同様、主に赤沼智善『漢巴四部四阿含互照録』（破塵閣書房 昭和33年5月）を参照させていただいた。

【1】SN.001 *Devatā-saṃyutta*（天相応）に収載される経とその対応漢訳経

まずSN.001 *Devatā-saṃyutta*（天相応）に収載される経と、これに対応する漢訳経の概要を紹介する。概要の紹介は次のような方針に基づく。

- ① 経の内容はほとんどすべてが偈の形式による神と釈尊の問答である。しかし散文で問答される場合も見いだされるので、偈文の場合は（偈文）、散文の場合は（散文）と記す。なおパーリの概要は主に「南伝大蔵経」（第12巻、相応部1 赤沼智善訳 昭和12年1月）の和訳を参照させていただいた。
- ② 概要においてはその対話が質問と回答形式のものであるかそうでないかがわかるように、天の質問に釈尊が答えるような形のもの（神の偈の文体が疑問形のもの）は、天が「尋ねた」と表わした。ただしパーリはただ偈文がぼんと示され、叙述の文章がない場合がほとんどなので、偈文が疑問形のものには〔質問〕と記した。
- ③ パーリは天と世尊の偈による問答のみを記して、経の六事⁽¹⁾を記す導入部とその結部を省略しているものが多い。仏在処は省略されていると考えられるものについては（ ）のなかに記した。
- ④ 神は夜中に辺り一面を煌々と輝かせて登場する。これは省略して記したもので、多少のバリエーションはあるが経文の文章は次のごときである。

その時ある天が (*aññatarā devatā*) 夜更けに (*abhikkantāya rattiya*) 美しい

容姿で (abhikkantavaṇṇā) 祇園の全体を輝かして (kevalakappaṃ Jetavanaṃ obhāsetvā) 世尊の元に至り、至ってから世尊を礼して傍らに立った。傍らに立ってその天神は次のように言った。…… (SN.001-001-001)

有一天子容色絶妙。於後夜時来詣仏所。稽首仏足退坐一面。身諸光明遍照祇樹給孤独園。時彼天子白仏言。…… (『雑阿含』1267)

時有一天光色倍常。於其夜中来詣仏所。威光顯照遍于祇洹晃然大明却坐一面。而問仏言。…… (『別訳雑阿含』180)

⑤パーリでは大部分の経で省略されているが、『雑阿含』と『別訳雑阿含』には天が「久しぶりに婆羅門を見た」という趣旨の偈を誦して没することになっている。その偈は最初の経に詳しく紹介するがごときであるが、煩雑となるので続く経ではこの偈は省略し、省略した印に※を記した。

⑥文中にポイントを落として (1) (2) などのように数字を付したのは主に語句に対する註記であって1つ1つの経の直後に註記した。また一連の経の最後に*をつけて註記したのは、1区切りにまとめた一連の経全体に対する註記である。

なお「神」を表わす言葉はパーリでは‘devatā’であるが、概要では「天」と記した。『雑阿含』と『別訳雑阿含』は元のテキスト通りである。また仏在処には下線を施し、登場人物は**太字**とした。

[1] 以下が SN.001 *Devatā-saṃyutta* (天相應) に含まれる経と、偈の内容が対応する漢訳経の内容概要である。

SN.001-001-001 (vol. I p.001、南伝 12 p.001) : あるとき世尊は舍衛城の祇樹給孤独園 (Sāvattthiyaṃ Jetavane Anāthapiṇḍikassa Ārāma) に住された。そのとき夜更けにある天が一面を輝かせて現れ、「我が師よ (mārisa)、あなたはどのように暴流を渡ったのですか」(散文) と尋ねた。世尊は「友よ (āvuso)、住せず、求めず、世間における執着を超えて渡った」(散文) と答えられた。天は「実に久しぶりに般涅槃したバラモンを見た。住せず、求めず、世間の執着を超えて渡った者を (cirassaṃ vata passāmi brāhmaṇaṃ parinibbutaṃ appatitṭhaṃ anāyūhaṃ tiṇṇaṃ loke visattikaṃ)」(1) (偈文) と誦した。その神は師は是認されたのだ (samanuñño satthā ahoṣi) と言った。そして自分の師によって是認されたとき、その天は世尊を右邊してそこに没した (tatth-ev-antaradhāyi)。

(1) 註釈は「長い時間が経過した後の意。伝えによれば、この神はカッサパ正自覚者 (過去第6仏) を見て、その般涅槃以後、その間に、他の仏を見たことがなかった。それゆえ、今、世尊を見てこのように言ったのである。しかし、この神はこれ以前に師を見たことがなかったのか。以前に見たことがあるにせよ、見たことがないにせよ、(世間一般的なこととして) 見ることによって言うのではない」としている (片山一良訳『相應部』I、大蔵出版 2011年6月 p.080)。

『雑阿含』1267 (大正 02 p.348 中、国訳 03 p.316) : あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に**1天子**が一面を輝かせて現れ、「世尊よ、あなたは駛流を渡りましたか」(散文) と尋ねた。世尊は「攀縁するところなく、所住なく駛流を渡った。このように抱き、このように直進して駛流を渡った」(散文) と答

えられた。天子は「久しぶりに婆羅門を見た。般涅槃を逮得し、一切の怖畏をすでに過ぎ、永く世の恩愛を超えた者を（久見婆羅門逮得般涅槃 一切怖已過永超世恩愛）」

（偈文）と誦し、この天子は仏の所説を聞いて歓喜し、仏足を稽首してから没した。

『別訳雑阿含』180（大正 02 p.438 下）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に1天が一面を輝かせて現れ、「瞿曇よ、あなたは深広無際で攀縁するところなく、安足するところのない暴駛流を渡りましたか」（散文）と尋ねた。世尊は「実に爾り」（散文）と答えられた。天は讚嘆して、「私は昔かつて婆羅門の涅槃したのを見たことがある。久しく嫌怖を捨てよく世間の愛を渡った者を（我昔已曾見婆羅門涅槃 久捨於嫌怖能度世間愛）」（偈文）と誦し、この天は歓喜して宮に還った。

* この経は神と釈尊の対話は散文で記され、最後の神の「婆羅門を見た」のみが偈文であるが、例外的にこれはこの後に続く経のように偈文による問答形式の経として処理した。

SN.001-001-002 (vol. I p.002、南伝 12 p.002) : 舎衛城 そのとき夜更けにある天が一面を輝かせて現れ、「友よ、あなたは衆生の解脱を知っているか」（散文）と尋ねた。世尊は「有の喜が尽き、想と識と受が尽きる。これが解脱である」（偈文）と説かれた。

『雑阿含』1268（大正 02 p.348 中、国訳 03 p.316）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に1天子が一面を輝かせて現れ、「衆生の広解脱を知っているか」（散文）と尋ねた。世尊は「愛喜の滅尽が解脱である」（散文）と答えられた。天は「久しぶりに婆羅門を見た。般涅槃を逮得し、一切の怖畏をすでに過ぎ、永く世の恩愛を超えた者を」（偈文）と誦し、世尊を礼してから没した。

『別訳雑阿含』179（大正 02 p.438 中）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき1天が一面を輝かせて現れ、「瞿曇よ、あなたは一切衆生の解脱を知っているか」（散文）と尋ねた。世尊は「一切の所縛を尽知することである」（散文）と答えられた。天は「昔婆羅門の涅槃を見たことがある。嫌怖を久しく捨てよく世間の愛を渡った者を」（偈文）と誦し、歓喜して宮に還った。

* 漢訳ではこの経も「婆羅門を見た」のみが偈文である。したがってこの経についてはこの偈文を省略せずに掲げた。

SN.001-001-003 (vol. I p.002、南伝 12 p.003) : (舎衛城) 傍らに立ったその天 (sā devatā) は、「生は死に導かれ寿命は短い、老いる者に庇護者なし。死に怖れを見て安樂をもたらす功德を積み」（偈文）と誦した。世尊は「生は死に導かれ寿命は短い、老いる者に庇護者なし。死に怖れを見て世の欲を捨てて寂靜を願え」（偈文）と説かれた⁽¹⁾。

(1) SN.002-002-009 (vol. I p.054、南伝 12 p.092) に同一偈あり。これはウッタラ天子 (Uttara devaputta) と釈尊の対話とされている。

『雑阿含』1001（大正 02 p.262 中、国訳 03 p.272）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に1天子が一面を輝かせて現れ、「冥運は命を持ち去り、老いに救護者はない。老病死を見て功德をなせ」（偈文）と誦した。世尊は「冥運は命を持ち去り、老いに救護者はない。世の貪愛を断じて無余涅槃を楽しめ」

(偈文) と説かれた。(※) 天子は世尊を礼してから没した。

『別訳雑阿含』138 (大正 02 p.427 中) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に **1 天** が一面を輝かせて現れ、「寿は定まらず、日々死の道を行く。死に向かう恐怖を見て福をなせ」 (偈文) と誦した。世尊は「死に向かう恐怖を見て寂滅の樂を欲して五欲を捨てよ」 (偈文) と説かれた。(※) 天は歡喜して去った。

SN.001-001-004 (vol. I p.003、南伝 12 p.003) : (舎衛城) 傍らに立ったその天は、「時は過ぎ去り日夜は移る。青春は我らを捨てる。死に怖れを見て、安樂をもたらす功德を積み」 (偈文) と誦した。世尊は「死に怖れを見て世の欲を捨てて寂靜を願え」 (偈文) と説かれた。

『別訳雑阿含』139 (大正 02 p.427 中) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に **1 天** が一面を輝かせて現れ、「四時は停まらず、命は日夜に尽きる。涅槃のために福を修せよ」 (偈文) と誦した。世尊は「死に向かう恐怖を見て五欲を捨て、寂滅を求めよ」 (偈文) と説かれた。(※) 天は歡喜して去った。

SN.001-001-005 (vol. I p.003、南伝 12 p.004) : (舎衛城) 傍らに立ったその天は、「何を断ち、何を捨て、何を修め、何を超えれば暴流を渡った比丘と呼ばれるのか」 (偈文) と尋ねた。世尊は「五⁽¹⁾を断ち、五⁽²⁾を捨て、五⁽³⁾を修め、五結⁽⁴⁾を超えれば暴流を渡った比丘と呼ばれる」 (偈文) と答えられた。

- (1) 有身見・疑・戒禁取見・欲貪・瞋恚の五下分結をさす。
- (2) 色貪・無色貪・掉挙・慢・無明の五上分結をさす。
- (3) 信・勤・念・定・慧の五根をさす。
- (4) 貪・瞋・痴・慢・見をいう。

『雑阿含』1002 (大正 02 p.262 下、国訳 03 p.273) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に **1 天子** が一面を輝かせて現れ、「いくばくの法を断除し、いくばくの法を捨し、いくばくの法を増修し、いくばくの聚を超越すれば駛流を渡るのか」 (偈文) と尋ねた。世尊は「五を断除し、五を捨し、五根を増修し、五和合を超越すれば駛流を渡る」⁽¹⁾ (偈文) と答えられた。(※) 天子は世尊を礼してから没した。

- (1) ほとんど同じ偈が『雑阿含』1312 (大正 02 p.360 下、国訳 03 p.359) にある。しかしここでの天には多羅健陀天子という固有名詞が与えられているので、次節の「天子相應」に収めた。

『別訳雑阿含』140 (大正 02 p.427 下) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に **1 天子** が一面を輝かせて現れ、「何法を思い、何法を捨て、何なる勝事を修し、何なる事を成就すれば駛流を渡り、比丘と称するを得るか」 (偈文) と尋ねた。世尊は「五蓋を断じ、五欲を捨て、五根を増修し、五分法を成就すれば駛流を渡り、比丘と称することを得る」⁽¹⁾ (偈文) と答えられた。(※) 天は歡喜して去った。

- (1) ほとんど同じ偈が『別訳雑阿含』311 (大正 02 p.479 上) にある。しかしここでの天には多羅健陀天子という固有名詞が与えられているので、次節の「天子相應」に収めた。

SN.001-001-006 (vol. I p.003、南伝 12 p.004) : (舎衛城) そばに立ったその天は、「覚めているときに何が眠り、眠るときに何が覚め、何によって染められ、何によって浄められるか」(偈文)と尋ねた。世尊は「覚めているときに五が眠り、眠るときに五が覚め、五によって染められ、五によって浄められる」(偈文)と説かれた(1)。

(1) 五根が目覚めているとき、五蓋(貪欲・瞋恚・惛眠・掉悔・疑)が眠ることをいう。

『雑阿含』1003(大正 02 p.262 下、国訳 03 p.274) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に天子が一面を輝かせて現れ、「幾人が覚において眠り、幾人が眠において覚め、幾人が汚れ、幾人が清浄を得るか」(偈文)と尋ねた。世尊は「五人が覚において眠り、五人が眠において覚め、五人が汚れ、五人が清浄を得る」(偈文)と答えられた。(※)天子は世尊を礼してから没した。

『別訳雑阿含』141(大正 02 p.427 下) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に1天が一面を輝かせて現れ、「誰が眠りにおいて覚め、誰が覚めるにおいて眠り、何を汚れるといい、何を清浄を得るといふか」(偈文)と尋ねた。世尊は「五戒をたもつ者を眠りにおいて覚めるといい、五悪をなす者を覚めるにおいて眠るといい、五蓋に覆するを汚れといい、無学の五分身を清浄を得るといふ」(偈文)と答えられた。(※)天は歡喜して去った。

SN.001-001-007 (vol. I p.004、南伝 12 p.005) : (舎衛城) 傍らに立ったその天は、「法を了知しないから教に引き入れられる。今こそ彼らを覚醒させるときである」(偈文)と誦した。世尊は「法を了知すれば異教に引き入れられない。彼らは正しく証して、平らかでないところを平らかに歩む」(偈文)と説かれた。

『雑阿含』579(大正 02 p.154 上、国訳 03 p.291) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に天子が一面を輝かせて現れ、「正法に習近しないから諸々の邪見に樂著する。睡眠して自覚しないけれども長劫には悟るであろう」(偈文)と誦した。世尊は「不善業を遠離すれば漏尽の阿羅漢であって、險惡世においても平等である」(偈文)と説かれた。(※)その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』164(大正 02 p.435 中) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき1天が一面を輝かせて現れ、「己の法を知らないから他法を習う。睡眠して覚めていないが時あれば悟りを得るであろう」(偈文)と誦した。世尊は「己の法を知っていれば他法を習わない。漏尽の阿羅漢は悪を棄てて正法に就くであろう」(偈文)と説かれた。(※)この天は歡喜して宮に還った。

SN.001-001-008 (vol. I p.004、南伝 12 p.005) : (舎衛城) 傍らに立ったその天は、「法に迷うから異教に引き入れられる。今こそ彼らを覚醒させるときである」(偈文)と誦した。世尊は「法に迷わなければ異教に引き入れられない。彼らは正しく証して、平らかでないところを平らかに歩む」(偈文)と説かれた。

『雑阿含』580(大正 02 p.154 中、国訳 03 p.291) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に天子が一面を輝かせて現れ、「法をもって調伏すれば諸見にしたがわない。睡眠して自覚しない者も時が来れば悟るであろう」(偈文)

と誦した。世尊は「法をもって調伏すれば異見にしたがわない。無知極まる者もよく世の恩愛を渡るであろう」（偈文）と説かれた。（※）天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』165（大正02 p.435下）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき1天が一面を輝かせて現れ、「法をもって調伏すれば異見に依止しない。睡眠して自覚しない者も時が来れば悟るであろう」（偈文）と誦した。世尊は「法をもって調伏すれば邪見に依止しない。愛の彼岸に渡って仏はすでに涅槃を知る」（偈文）と説かれた。（※）その天子は歡喜して宮に還った。

SN.001-001-009（vol. I p.004、南伝12 p.005）：（舎衛城）傍らに立ったその天は、「慢心を愛する人には調順はない。独り森に住んでも放逸であれば死魔の領域を超えることはない」（偈文）と誦した。世尊は「慢を去り、心を静め、智慧によって縛を解き、独り森に住んで放逸ならざれば死魔の領域を超える」（偈文）と説かれた。

『雑阿含』996（大正02 p.261上、国訳03 p.267）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に1天子が一面を輝かせて現れ、「驕慢をもってその心を調伏せず、寂黙を修せず、林に住しても放逸にして死の彼岸に渡らない」（偈文）と誦した。世尊は「驕慢を離れ心正受に入り、智慧をもって一切の縛から解脱し、閑林に住して不放逸であれば、死魔の領域を渡るを得る」（偈文）と説かれた。（※）天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』133（大正02 p.426上）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に1天が一面を輝かせて現れ、「驕慢の人は調習を得ない。偽りの禪定を修して放逸にして空林に処しても、死の彼岸に渡ることはできない」（偈文）と誦した。世尊は「慢を棄てて定に入り、一切処に解脱して、不放逸に空林に住すれば死の彼岸に渡ることができる」（偈文）と説かれた。（※）その天子は歡喜して宮に還った。

SN.001-001-010（vol. I p.005、南伝12 p.006）：（舎衛城）傍らに立ったその天は、「森に住む寂靜なる行者は、1食をとるのみでなぜ朗らかなる顔であるのか」（偈文）と尋ねた。世尊は「過ぎたことを悲しまず、来ぬことにあこがれず、現在に満足すれば顔色は朗らかになる」（偈文）と説かれた。

『雑阿含』995（大正02 p.260下、国訳03 p.267）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に1天子が一面を輝かせて現れ、「阿練若比丘は一坐食するのにどうして顔色が鮮明なのか」（偈文）と尋ねた。世尊は「過去を憂えず、未来に期待せず、現在に満足すれば、飲食に懸念しないから顔色が鮮明になる」（偈文）と答えられた。（※）天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』132（大正02 p.426上）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に1天が一面を輝かせて現れ、「阿練若処に住する者は一食なのにどうして顔色和悦なのか」（偈文）と尋ねた。世尊は「過去を憂えず、未来に求めず、現在に正知であれば顔色和悦となる」（偈文）と説かれた。（※）その天子は歡喜して宮に還った。

SN.001-002-001 (vol. I p.005、南伝 12 p.007) : あるとき世尊は舎衛城の祇樹給孤独園に住された。そのとき世尊は比丘らに、「むかし三十三天に属するある天 (Tāvatiṃsa-kāyikā devatā) が、歡喜園において天女たちにかしずかれて、『三十三天の歡喜園を見ない人は楽しみを知らない』(偈文)と誦した。これを聞いた他のある天が『あなたは愚かである。聖者 (arahant) の説くところを知らない。諸行は無常であり、生滅法である。生じては滅する。この滅が寂靜である』(偈文)と誦した」と説かれた。

『雜阿含』576 (大正 02 p.153 下、国訳 03 p.289) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に1天子が一面を輝かせて現れ、「難陀林に処しなければ快樂を得ない。切利天宮中において天帝の名を得る」(偈文)と誦した。世尊は「あなたは阿羅漢の所説を知らない。一切行は無常であり、生滅の法である。生ずれば滅する。寂滅こそが樂である」(偈文)と説かれた。(※)天子は礼してから没した。

『別訳雜阿含』161 (大正 02 p.435 上) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき1天が一面を輝かせて現れ、「歡喜園に生まれなければついに樂を得ることはできない。三十三天は天人の住処である」(偈文)と誦した。世尊は「あなたは小児のごとく愚かである。阿羅漢は諸行は無常であり、寂滅こそ樂と説く」(偈文)と説かれた。(※)天子は歡喜して天宮に還った。

SN.001-002-002 (vol. I p.006、南伝 12 p.008) : (舎衛城の祇樹給孤独園)傍らに立ったある天は、「子どものある者は子によって喜び、牛主は牛によって喜ぶ。人の喜びは依による。依なき者は喜びがない」(偈文)と誦した。世尊は「子あるものは子によって悲しみ、牛主は牛によって悲しむ。人の悲しみは依による。依なき者は悲しみが無い」(偈文)と説かれた。

『雜阿含』1004 (大正 02 p.263 上、国訳 03 p.274) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に天子が一面を輝かせて現れ、「母子は相喜び、牛主はその牛を楽しみ、衆生は有余を楽しみ無余を楽しむ者はない」(偈文)と誦した。世尊は「母子は相憂え、牛主はその牛を憂え、有余の衆生は憂いを生じ、無余なる者は憂いなし」(偈文)と説かれた。(※)天子は礼してから没した。

『別訳雜阿含』142 (大正 02 p.428 上) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に1天が一面を輝かせて現れ、「子孫あり、財宝や六畜があり、生を受ければ喜びである。生を受けなければ喜びはない」(偈文)と誦した。世尊は「子孫あり、財宝や六畜があり、生を受けるのは憂いである。生を受けなければ寂滅の樂である」(偈文)と説かれた。(※)その天子は歡喜して去った。

SN.001-002-003 (vol. I p.006、南伝 12 p.008) : (舎衛城の祇樹給孤独園)傍らに立ったある天が、「子供ほど可愛いものはなく、牛に等しい富はない。太陽に等しい光はなく、海は最上の湖である」(偈文)と誦した。世尊は「己に等しい可愛い者はなく、穀類に等しい富はなく、智慧に等しい光はなく、雨は最上の湖である」(偈文)と説かれた。

『雑阿含』1006 (大正 02 p.263 中、国訳 03 p.276) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に天子が一面を輝かせて現れ、「愛する所は子に過ぎる無く、財は牛より貴きは無い。光明は日に過ぎるものはなく、薩羅は海に過ぎるものはない」(偈文)と誦した。世尊は「愛するは己に過ぎるなく、財は穀に過ぎるなく、光明は慧に過ぎるなく、薩羅は見に過ぎるなし」(偈文)と説かれた。(※)天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』232 (大正 02 p.458 下) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に1天が一面を輝かせて現れ、「愛中に子が第1であり、財中に牛が第1であり、明中に日が第1であり、淵中に海が第1である」(偈文)と誦した。世尊は「所愛には身に過ぎるものなく、よく教えるが第1の財であり、慧が第1の明であり、雨が第1の淵である」(偈文)と説かれた。(※)その天子は歡喜して去った。

SN.001-002-004 (vol. I p.006、南伝 12 p.009) : (舎衛城の祇樹給孤独園)傍らに立ったある天が、「二足のうちでクシャトリヤが勝れ、四足のうちで牡牛が勝れ、妻のうちで尊い家の娘が勝れ、子のうちで長子が勝れる」(偈文)と誦した。世尊は「二足のうちで正覚者が勝れ、四足のうちで駿馬が勝れ、妻のうちで従順者が勝れ、子のうちで孝行者が勝れる」(偈文)と説かれた⁽¹⁾。

(1) 似た内容の経に次のものがある。SN.006-002-001 (vol. I p.153、南伝 12 p.260) : あるとき世尊は王舎城のサッピニー (Sappini) 河畔に住された。そのとき夜更けに梵天サナンクマーラ (brahmā Sanaṅkumāra) が一面を輝かせて現れ、釈尊の傍らに立って「氏姓を尊ぶ人々の中でクシャトリヤは殊勝であり、明行を具足する者は人天の中で殊勝である」(偈文)と誦した。世尊はこれを称讃された。梵天サナンクマーラは世尊を礼して去った。

『雑阿含』1007 (大正 02 p.263 中、国訳 03 p.276) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に天子が一面を輝かせて現れ、「刹利には両足尊勝れ、犍牛は四足の勝であり、童英を上妻となし、貴生を上子となす」(偈文)と誦した。世尊は「正覚は両足の尊であり、生馬は四足の勝であり、夫に従うを賢妻となし、漏尽が子の最上である」(偈文)と説かれた。(※)天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』233 (大正 02 p.458 下) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に1天が一面を輝かせて現れ、「二足中で刹利が最勝であり、四足中で牛が最勝であり、妻中で童女が最勝であり、子の中で長子が最勝である」(偈文)と誦した。世尊は「両足の最勝は正覚であり、四足の最勝は善乗であり、妻の最勝は貞女であり、子の最勝は孝者である」(偈文)と説かれた。(※)その天子は歡喜して去った。

SN.001-002-005 (vol. I p.007、南伝 12 p.009) : (舎衛城の祇樹給孤独園)

(天)「日の盛りの時、鳥とどまって動かず。大林が鳴って私を恐れさせる」(偈文)

(世尊)「日の盛りの時、鳥とどまって動かず。大林が鳴って私に楽しさが起こる」

(偈文)⁽¹⁾

(1) 同一偈は SN.009-012 にもあり、そこでは森に住む天と1比丘との対話とされている。対訳漢訳も同じであるのでそこに示した。

SN.001-002-006 (vol. I p.007、南伝 12 p.009) : (舎衛城の祇樹給孤独園)

(天) 「睡眠にふけて物憂く、食べ過ぎてまぶたが重い。このような人に聖道は現れない」 (偈文)

(世尊) 「睡眠、怠惰、あくび、気ふさぎ、食べ過ぎ、これを精進によって取り払えば聖道は清められる」 (偈文)

『雑阿含』 598 (大正 02 p.160 上、国訳 03 p.310) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に **1 天子** が一面を輝かせて現れ、「睡眠に沈没してあくびし、食に飽きて懈怠である。これらは衆生を覆って聖道を現わさない」 (偈文) と誦した。世尊は「睡眠に沈没してあくびし、食に飽きて懈怠である。しかし精勤して修習すれば聖道を開發することができる」 (偈文) と説かれた。(※) その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』 175 (大正 02 p.437 下) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に **1 天** が一面を輝かせて現れ、「睡臥してあくびし楽しまず、飲食調適ならずして心下劣なれば、五事覆障して賢道を見ない」 (偈文) と誦した。世尊は「もし睡臥してあくびし楽しまず、飲食調適ならずして心下劣なれば、精進して五事を捨てよ。後に必ず聖道を見るであろう」 (偈文) と説かれた。(※) その天は歡喜して宮に還った。

SN.001-002-007 (vol. I p.007、南伝 12 p.010) : (舎衛城の祇樹給孤独園)

(天) 「智慧なき者には沙門の行はなし難い。もし心を制御できなければ、いつ沙門の行をなすことができるだろうか」 (偈文) [質問]

(世尊) 「亀が自分の手足を包むごとく、比丘は意念を収めよ。何物にも依著せず、他を害せず、煩惱を離れよ」 (偈文)

『雑阿含』 600 (大正 02 p.160 中、国訳 03 p.311) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に **1 天子** が一面を輝かせて現れ、「度り難く忍び難いのは沙門が無知であるからである。どのように行ずればその心を護ることができのであろうか」 (偈文) と尋ねた。世尊は「亀が六を蔵するがごとく、諸々の覚想を摂し、何物にも依著せず、他を害するな。これが自分を守ることである」 (偈文) と説かれた。(※) その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』 174 (大正 02 p.437 中) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に **1 天** が一面を輝かせて現れ、「出家はなし難く、見るべきも難い。愚者が沙門となるのは多難である。どのように行ずれば想欲を滅することができるであろうか」 (偈文) と尋ねた。世尊は「亀が六を蔵するがごとく、所依なくして他を害するな。そのような比丘は涅槃に入って譏りを受けない」 (偈文) と説かれた。(※) その天は歡喜して宮に還った。

SN.001-002-008 (vol. I p.007、南伝 12 p.010) : (舎衛城の祇樹給孤独園)

(天) 「慚あり悪を制する人は、駿馬に鞭は必要がないように非難を去って悟る」 (偈文)

(世尊) 「慚あり悪を制し、正念ある人は苦を尽し、平らかならざるを平らかに歩む」
(偈文)

『雑阿含』578 (大正 02 p.154 上、国訳 03 p.290) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に天子が一面を輝かせて現れ、「常に慚愧の心を習う人は時々であり、諸悪を遠離するは良馬に鞭打つを顧みるようなものである」(偈文)と誦した。世尊は「常に慚愧の心を習う人は実に稀である。諸悪を遠離するのは良馬に鞭打つを顧みるようなものである」(偈文)と説かれた。(※)その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』163 (大正 02 p.435 中) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき1天が一面を輝かせて現れ、「賢善の人は慚愧を具す。良馬は善にもとる悪をなさないように」(偈文)と誦した。世尊は「世間の人には慚愧を修する人は少ない。よく悪を離れるのは調乗の馬のごとくである」(偈文)と説かれた。(※)その天は歡喜して宮に還った。

SN.001-002-009 (vol. I p.008、南伝 12 p.011) : (舎衛城の祇樹給孤独園)

(天) 「あなたに茅屋や巢はないのですか、繫縛を離れているのですか」(偈文) [質問]

(世尊) 「私には茅屋(母)も巢(妻)もない。繫縛(渴愛)を離れている」(偈文)

『雑阿含』584 (大正 02 p.155 中、国訳 03 p.294) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に1天子が一面を輝かせて現れ、「あなたに族本はありますか、転生の族はありますか」(偈文)と尋ねた。世尊は「私には族本(母)も転生の族(妻)もない」(偈文)と説かれた。(※)その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』168 (大正 02 p.436 中) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき1天が一面を輝かせて現れ、「あなたの手には杻はありますか、鞞桁はありますか、牢獄に閉じこめられていませんか」(偈文)と尋ねた。世尊は「杻(母)もなく、鞞桁(婦)もなく、羈絆(愛)もない」(偈文)と説かれた。(※)その天は歡喜して宮に還った。

SN.001-002-010 (vol. I p.008、南伝 12 p.011) : あるとき世尊は王舎城の温泉精舎 (Tapodārāma)に住された。そのとき尊者サミッディ (Samiddhi) は夜の早い時刻に (rattiyā paccusa-samayam) 温泉 (tapoda) で沐浴した。そのとき (1) 1人の天 (aññatarā devatā) が温泉の一面を輝かせて現れ、「五欲を享樂せよ。青春を虚しく過ごすなかれ」(偈文)と誦した。サミッディは「私は享樂せずに行乞する、時が自分を捨てるのを恐れるからである」(偈文)と答えたが、出家して聞もない新參比丘であったので天子を納得させることができなかつた。そこで2人は連れ立って世尊のもとを訪れた。釈尊は「名に表わされる表面のみを見て、真義を見ないものは死魔に赴く。煩惱を断滅すれば後世においても人と天の世界でその跡を求めることはできない」(偈文)と説かれた。

(1) テキストでは「夜更けに (rattiyā abhikkantavaṇṇā)」になっている。しかし実際片山訳では「夜明けに」としている(片山 p.104)。

『雑阿含』1078（大正 02 p.281 下、国訳 03 p.089）：あるとき世尊は王舎城迦蘭陀竹園に住された。そのとき1人の比丘が夜明けに榻補河の辺で沐浴していると、榻補河の一面を輝かせて1天子が現れ、「あなたはまだ年少で五欲を楽しめばよいのになぜ出家したのか」（散文）と質問した。比丘は「私は現前の樂を捨て非時の樂を求めない。私は非時の樂を捨てて現前の樂を得たのだ」（散文）と答えた。天子は「それはどういう意味か」（散文）と問うたが、比丘は出家して日も浅かったので天子を説得できなかつた。そこで天子と共に世尊のもとを訪れて報告した。釈尊は「衆生は愛の想に随い愛の想を以て住す、愛を知らざるを以ての故に即ち死の方便となす。愛や慢を断じ、瞋恚・結・希望を絶てばこの世、かの世を見ない」（偈文）と説かれた。天子は歡喜して没した。

『別訳雑阿含』017（大正 02 p.379 上）：あるとき世尊は王舎城迦蘭陀竹林に住された。そのとき一人の比丘が未明に河で裸になって沐浴していた。そこへ天が河岸を輝かせて現れ、「あなたはまだ年少である。なぜ五欲を受けないで非時に出家したのか」と尋ねた。比丘は「私はまさにこの時であると出家したのだ」（散文）と答えたが天は理解しなかつた。比丘は自分はまだ出家したばかりであるからと、天と一緒に世尊のところに行った。釈尊は「名色は無有性である。愛と名色と三種の慢と瞋恚と願欲を滅すれば生死の海を渡ることができる」（偈文）と説かれた。天は得心し、比丘らは世尊の所説を歡喜奉行した。

SN.001-003-001 (vol. I p.013、南伝 12 p.018) : 舍衛城因縁⁽¹⁾。傍らに立ったある天は、「劍によって触れられ、頭髮が燃えるがごとく觀じて、欲貪を捨てて出家せよ⁽²⁾」（偈文）と誦した。世尊は「劍によって触れられ、頭髮が燃えるがごとく觀じて、我身見を捨てて出家せよ」（偈文）と答えられた。

(1) 品 (Vagga) の冒頭に 'Sāvatti nidānam' 'sā devatā' と別立てして書かれている。これはこの品に含まれる諸經のすべてにかかると判断した。

(2) SN.002-002-006 (vol. I p.053、南伝 12 p.090) に同一偈あり。そこでは天は「スダッタ天子 (Sudatta devaputta)」とされている。

『雑阿含』586（大正 02 p.155 下、国訳 03 p.296）：あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に1天子が一面を輝かせて現れ、「利劍によって害され、頭が火に燃えるがごとく觀じて、貪欲の火を断じて正念に遠離せよ」（偈文）と誦した。世尊は「利劍によって害され、頭が火に燃えるがごとく觀じて、後身を断じて正念に遠離せよ」（偈文）と説かれた。（※）天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』170（大正 02 p.436 下）：あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき1天が一面を輝かせて現れ、「頭上の火が燃えるがごとく、方便して欲結を断ぜよ」（偈文）と誦した。世尊は「頭上の火が燃えるがごとく、方便して偏見を断ぜよ」（偈文）と説かれた。（※）その天は歡喜して宮に還つた。

SN.001-003-002 (vol. I p.013、南伝 12 p.019) : 舍衛城因縁

(天) 「触れなければ触れず、触れるがゆえに触れる」（偈文）

(世尊) 「汚れなき人を汚せば、その愚人に悪が返ってくる。風に逆らって撒かれた

塵のように」（偈文）

『雑阿含』1275（大正02 p.350下、国訳03 p.324）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に天子が一面を輝かせて現れ、「触なければ触をもって報じず、触あれば触をもって報じる。不瞋ならば瞋をまねかない」（偈文）と誦した。世尊は「不瞋なる人に瞋を加えるのは、悪心が自らのなかに返ること、逆風の塵は自らに返るようなものである」（偈文）と説かれた。（※）その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』273（大正02 p.469中）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に1天が一面を輝かせて現れ、「触れなければ触なし、触れれば必ず報あり。だからみだりに触れてはならない」（偈文）と誦した。世尊は「もし不瞋なるものに悪を加えればその悪は自分に及ぶ。逆風の塵は自分に返ってくるように」（偈文）と説かれた。（※）その天は歡喜して去った。

SN.001-003-003 (vol. I p.013、南伝12 p.019) : 舎衛城因縁

(天) 「内にも外にも人は結縛 (jaṭā) に纏われる。ゴータマよ、この結縛から離れているのは誰ですか」（偈文） [質問]

(世尊) 「智慧あり、戒に住し、慎み深い人は結縛から離れる。貪瞋痴を離れた阿羅漢は結縛から解かれる」（偈文）

『雑阿含』599（大正02 p.160中、国訳03 p.311）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に1天子が一面を輝かせて現れ、「外の纏は纏にあらず、内の纏が衆生を纏する。瞿曇よ、誰が纏において纏を離れるのですか」（偈文）と尋ねた。世尊は「智者は戒に住して智慧を修す。これによって纏において纏を離れる」（偈文）と説かれた。（※）その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』173（大正02 p.437中）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に1天が一面を輝かせて現れ、「何が外の結髪内の結髪なのか。瞿曇に問う、どのようにすれば結髪をして結髪ならざらしめるのか」（偈文）と尋ねた。世尊は「禁戒に住し、心と智慧を修する比丘は結髪をして結髪ならざらしめる」（偈文）と説かれた。（※）その天は歡喜して宮に還った。

SN.001-003-004 (vol. I p.014 南伝12 p.020) : 舎衛城因縁

(天) 「心が制止されれば心は苦しまない。すべてのところで心が制止されれば、心はすべての苦しみから脱する」（偈文）

(世尊) 「自制の心は制止されるべきではない (na mano sayattam āgatam)。悪を起こるところにこそ心は制止されるべきである」（偈文）

『雑阿含』1281（大正02 p.352下、国訳03 p.331）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に天子が一面を輝かせて現れ、「遮をもって遮せば妄想は起こらない。若し人が一切を遮らば逼迫せしめず」（偈文）と誦した。世尊は「必ずしも一切を遮せずとも、悪業を遮せば逼迫せしめない」（偈文）と説かれた。（※）その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』279（大正02 p.471中）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住さ

れた。そのとき**1天**が一面を輝かせて現れ、「覚観意欲を遮すべし。一切を遮すれば生死の塵を作らない」（偈文）と誦した。世尊は「一切を遮す必要はない。ただ悪覚観を遮せば生死の遮となさず」（偈文）と説かれた。（※）その天は歡喜して宮に還った。

SN.001-003-005 (vol. I p.014 南伝 12 p.020) : 舎衛城因縁

(天) 「最後身の漏尽の阿羅漢は『私が語る (ahaṃ vadāmi) 』といい、『私のものと言う (mamaṃ vadnti) 』というべきなのか」（偈文） [質問]

(世尊) 「最後身の漏尽の阿羅漢が「私が語る」といい、「私のものと言う」としても、ただ慣例によってそう言うだけである」（偈文）

『雜阿含』581 (大正 02 p.154 中、国訳 03 p.292) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に**天子**が一面を輝かせて現れ、「もし阿羅漢比丘の自分の所作をなしおわり、漏が尽きて最後身を持しても、我ありと説き、我所を説くのか」（偈文）と尋ねた。世尊は「すでに我慢心を離れているのであるから、そのように説いても咎はない。世の名字を解し、仮名であると説く」（偈文）と説かれた。（※）その天子は礼してから没した。

『雜阿含』582 (大正 02 p.154 下、国訳 03 p.293) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に**天子**が一面を輝かせて現れ、「もし阿羅漢比丘の漏が尽きて最後身を持しても、我ありと説き、我所を説くのか」（偈文）と尋ねた。世尊は「そのように説いても咎はない。世の名字を解し、仮名であると説く」（偈文）と説かれた。その天子は礼してから没した。

『別訳雜阿含』166 (大正 02 p.435 下) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき**1天**が一面を輝かせて現れ、「比丘が有漏を尽くして阿羅漢となって最後身に住し、偽って我であるといったり、非我であるというのか」（偈文）と尋ねた。世尊は「それは世俗に随順してそういうのである」（偈文）と説かれた。（※）その天は歡喜して宮に還った。

SN.001-003-006 (vol. I p.015、南伝 12 p.021) : 舎衛城因縁

(天) 「どのような光明があつてこの世を照らすのか」 (1) (偈文) [質問]

(世尊) 「世には四つの光がある。昼には太陽、夜には月、時には火が日夜に、正覚者は最勝の火であつて無上の光でありこの世を照らす」（偈文）

(1) SN.002-001-004 (vol. I p.047、南伝 12 p.079) に同一偈あり、そこに登場する天は「マーガダ天子 (Māgadha devaputta) 」とされている。漢訳はそちらの方に対応するので、そこに紹介する。

SN.001-003-007 (vol. I p.015、南伝 12 p.022) : 舎衛城因縁

(天) 「流れはどこで流れず、渦はどこに止むのか。どこで名と色は滅するのか」（偈文） [質問]

(世尊) 「地・水・火・風が滅するところ、そこより流れは流れず、渦は止む」（偈文）

『雜阿含』601 (大正 02 p.160 下、国訳 03 p.312) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給

孤独園に住された。そのとき後夜に天子が一面を輝かせて現れ、「薩羅の小流はどこにおいて反流するのか。生死はどこで転ぜず、苦楽はどこで滅するのか」（偈文）と尋ねた。世尊は「眼・耳・鼻・舌・身・意、名色が滅すれば薩羅は還流し、生死の道は転じない」（偈文）と説かれた。（※）その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』176（大正 02 p.438 上）：あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に1天が一面を輝かせて現れ、「池水はどうして竭き、どんな流れが還流するのか。苦楽はどこに滅するのか」（偈文）と尋ねた。世尊は「眼・耳・鼻・舌・身・意、名色が滅すれば池水は竭き、苦楽は余りなく滅する」（偈文）と説かれた。（※）その天は歡喜して宮に還った。

SN.001-003-008 (vol. I p.015、南伝 12 p.022) : 舍衛城因縁

(天) 「大富あって国を領する刹利も貪り嫉む。誰が嫉みや渴愛を捨てるだろうか」
(偈文) [質問]

(世尊) 「出家して子や家畜を捨て、貪瞋痴を離れ、漏を尽した阿羅漢こそ嫉みなき者である」 (偈文)

『雑阿含』589（大正 02 p.156 中、国訳 03 p.298）：あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に1天子が一面を輝かせて現れ、「頼吒槃提国の大富たちも欲すること火の燃えるがごときである。どのようにすれば貪欲を断じることができるであろうか」（偈文）と尋ねた。世尊は「出家して妻子・財産を捨て、漏を尽した阿羅漢は愛が尽きる」（偈文）と説かれた。（※）その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』183（大正 02 p.439 中）：あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に1天が一面を輝かせて現れ、「羅吒国の巨富たちも貪りには限りがない。誰がよく欲愛を捨てるのだろうか」（偈文）と尋ねた。世尊は「妻子および六畜を捨てて出家すれば、よく欲結を断じることができる」（偈文）と説かれた。（※）その天は歡喜して宮に還った。

SN.001-003-009 (vol. I p.016、南伝 12 p.023) : 舍衛城因縁

(天) 「4つの車輪と9つの門⁽¹⁾はみな汚れている。どこに出口があるのであろうか」 (偈文) [質問]

(世尊) 「欲貪の縄を切り、渴愛を抜き取れば出口がある」⁽²⁾ (偈文)

(1) 「4つの車輪」とは行・住・坐・臥の意で、「9つの門」とは眼や耳など身体から分泌排泄する穴のことである。以下同じ。

(2) SN.002-003-008 (vol. I p.063、南伝 12 p.107) に同一偈あり。ここに登場する天は「ナンディヴィサーラ天子 (Nandivīsāla devaputta)」とされている。

『雑阿含』588（大正 02 p.156 上、国訳 03 p.298）：あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に1天子が一面を輝かせて現れ、「四転・九門有りて貪欲が充満している。大象はどうして出るのか」（偈文）と尋ねた。世尊は「貪欲などの諸悪を断じれば、正しい処に向かうであろう」（偈文）と説かれた。（※）その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』172 (大正 02 p.437 中) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に1天が一面を輝かせて現れ、「九門・四転輪には重き銅が充滿している。どのようにすれば去ることができるだろうか」(偈文)と尋ねた。世尊は「喜愛の結や欲貪の悪を抜けば安穩に出られるだろう」(偈文)と説かれた。(※)その天は歡喜して宮に還った。

SN.001-003-010 (vol. I p.016、南伝 12 p.023) : 舎衛城因縁

(天)「鹿の足のようになやかに雄々しく、獅子や象のごとく独り行く世尊よ、どのようにすれば苦しみから逃れられるか」(偈文) [質問]

(世尊)「世に五欲があり、意は第6である。ここに欲を離れれば苦しみより脱することができる」(偈文)

『雑阿含』602 (大正 02 p.161 上、国訳 03 p.313) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に天子が一面を輝かせて現れ、「伊尼耶鹿の躡は仙人中の尊である。瞿曇よ、どのように苦から出離し、どのように苦から解脱するのか」(偈文)と尋ねた。世尊は「世に五欲があり、心法は第6である。ここに欲を離れれば苦から出離し、苦から解脱することができる」(偈文)と説かれた。(※)その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』177 (大正 02 p.438 上) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に1天が一面を輝かせて現れ、「牟尼は世雄にして伊尼延のごときである。瞿曇よ、どのように苦から出要し、どのように苦から解脱するのか」(偈文)と尋ねた。世尊は「世に五欲があり、意は第6である。喜欲を除断すれば一切苦より遠離する」(偈文)と説かれた。(※)その天は歡喜して宮に還った。

SN.001-004-001 (vol. I p.016、南伝 12 p.024) : あるとき世尊は舎衛城の祇樹給孤独園に住された。そのとき多くのサトゥッラパカーイカ神たち (sambahulā Satullapakāyikā devatāyo) ⁽¹⁾ が夜更けに一面を輝かせて現れ、傍らに立ったある天が「ただ善き人々とのみ坐し、善き人々とのみ交われ。そうすればよき人の正法を知ってよき者となる」⁽²⁾ (偈文)と誦した。他の天たちも「ただ善き人々とのみ座し、善き人々とのみ交われ。そうすれば悲しみの中にあつて悲しまない」(偈文)、「……親族の中に輝く」(偈文)「……善趣に生まれる」(偈文)、「……幸福となる」(偈文)と誦した。世尊は「善き人とのみ坐せ、善き人と交われ。善き人の正法を知ってすべての苦しみから脱する」(偈文)と説かれた。

(1) 中村元氏は「多くのサトゥッラパカーイカ神たち」を「サトゥッラパ群神」と訳し、次のように解説している。

ブッダゴーサは通俗語源解釈によって、「よき人々の教えを受けたので、教えを語って、天に生まれた者ども」と解する (sattam dhammam samādāna-vasena ullapetvā sagge nibbatā ti sat' kāyikā, Sāratthappakkasini vol. I p.054)。ブッダゴーサによると、むかし海を渡る多くの商人が海で難破したが、700人の商人は五戒を受けて守っていたので、死後に**忉利天**の宮殿に生まれ、今ここに釈尊のもとに來たのだという。

と(中村元訳『ブッダ 神々との対話 サンユッタニカーヤ I』岩波文庫 1986年8月18

日、p.252 以下『文庫』と記す)。片山氏も商人たちが難破して三十三天に生まれたという因縁譚を詳しく訳している。『相応部』1 p.397

これによれば「サトゥッラパカーイカ神」というのは、前世の業によってニックネームのようなものとして名づけられたもので、厳密な意味では固有名詞ではないが、これも固有名詞と見做しておく。

なお以下にもこの神が登場するが、対応漢訳経がないものが多く、ある対応漢訳経は「天子」あるいは「天」とするのみで名はつけられていない。

- (2) SN.002-003-001 (vol. I p.056、南伝 12 p.095) に同一偈がある。今の経ではサトゥッラパカーイカ神たちの複数の天たちが誦したことになっているが、そこではこの偈はシヴァ天子 (Siva devaputta) 1 人が誦したとされている。対応漢訳もその形式であるのでそこに紹介する。

SN.001-004-002 (vol. I p.018、南伝 12 p.026) : あるとき世尊は舎衛城の祇樹給孤独園に住された。そのとき多くのサトゥッラパカーイカ神たちが夜更けに一面を輝かせて現れ、傍らに立ったある天が「慳貪と放逸によってはこのような布施はなされえない。功德を欲する人によって布施はなされる」(偈文)と誦した。他の天たちも「功德は後世の渡し場である。布施の功德は大きい。悪人は地獄に行き、善人は天界に行く」(偈文)と誦した。世尊は「百千の供犠も布施の16分の1に値しない」(偈文)と説かれた。

『雜阿含』1288 (大正 02 p.354 下、国訳 03 p.337) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に天子が一面を輝かせて現れ、「慳吝の心が生ずれば布施を行ふことはできない。福を求むる者は布施を行ふ」(偈文)と誦した。世尊は「百千の邪盛会も布施の16分の1に値しない」(偈文)と説かれた。(※)その天子は礼してから没した。

『別訳雜阿含』286 (大正 02 p.473 中) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき天が一面を輝かせて現れ、「貪吝貧窮の苦しみは恵施しないことによる。福德を求めれば布施せよ」(偈文)と誦した。世尊は「百千の大祀も布施の16分の1に値しない」(偈文)と説かれた。(※)その天は歡喜して去った。

SN.001-004-003 (vol. I p.020、南伝 12 p.028) : 舎衛城の園林 (Sāvatti ārāme)。そのとき多くのサトゥッラパカーイカ神たちが夜更けに一面を輝かせて現れ、傍らに立ったある天が「友よ (mārisa)、布施はよい。慳貪と放逸によってはこのような布施はなされ得ない。功德を欲する人によって布施はなされる」(偈文)とのウダーナを誦した。他の天たちも「布施の功德は大きい。乏しい布施も信を持って施せばその人は安樂である。布施する人はヤマ(閻魔)のヴェータラニー河 (vetaraṇī Yamassa) を超えて天界に行く。布施には大果がある、よき田に蒔かれた種子のように。生あるものに自制をなすのもよい」(偈文)とウダーナを誦した。世尊はよく語られたとほめられ、「布施より法句が勝る。過去の善人、智慧ある人々はみな涅槃を得た」(偈文)と説かれた。

SN.001-004-004 (vol. I p.022、南伝 12 p.031) : あるとき世尊は舎衛城の祇樹給孤独園に住された。そのとき多くのサトゥッラパカーイカ神たちが夜更けに一面を

輝かせて現れ、傍らに立ったある天が「愛欲は常住ではない。禍と苦悩は欲望より生まれる。人々はそこに繫縛され、その世界から戻ってくることはない」（偈文）と誦した。尊者モーガラージャ（āyasmā Mogharāja）⁽¹⁾ は「この世でも後の世でもこのように解脱した人を見ることができないならば、利行の人を拝する彼らは讃嘆されるべきでしょうか」（偈文）と尋ねた。世尊は「比丘よ、解脱した人を拝する人もまた讃嘆されるべきである。法を知り疑いを離れた人もまた結縛を超えた人であるからである」（偈文）と説かれた。

- (1) 後に本文中に記すように尊者モーガラージャは直接神を見ていないと理解する。モーガラージャは AN.001-014-001～007 (vol. I p.025、南伝 17 p.035) では「持髻衣 (lūkhacivara-dhara) 中の(第一)」、『増一阿含』004-006 (大正 02 p.558 上、国訳 08 p.046) では「弊悪衣を著けて羞恥する所なきもの」と讃えられる人物である。『増一阿含』049-007 (大正 02 p.800 中、国訳 10 p.023) には面王比丘とされ、ここでも常に弊衣を着ける者とされている。

Suttanipāta 第5「彼岸道品」(p.190、南伝 24 p.370) に記されるデカン高原のゴードーヴァリー河畔に住していたとされるパーヴァリンという婆羅門の16人の弟子の1人で、世尊に「どのように世間を観察する者を死王は見ることがないか」と質問したとされている。このとき世尊は「世間は空なりと観察せよ (suññato lokam avekkhassu)。そのようなものを死王は見ることがない」と説かれたとされている (p.217、南伝 24 p.424)。また *Theragāthā* の vs.207～8 (p.027、南伝 25 p.159) はこの長老の偈である（『仏弟子達のことば註』2 pp.155～158 参照）。*Apadāna* の 03-04-035 (p.087、南伝 26 p.157) も同じくこの長老の偈である。ちなみにわれわれは、パーヴァリンの16人の弟子たちが釈尊に会うためにゴードーヴァリー河の岸辺を出発したのは釈尊63歳の雨期の後で（【研究ノート12】）、彼が具足戒を受けたのは釈尊64歳の雨安居の前であったと考えている（【研究ノート21】）。

なお『赤沼互照録』は『雑阿含』1286 (大正 02 p.354 中、国訳 03 p.336) と『別訳雑阿含』284 (大正 02 p.473 上) の2経を対応経としている。『姉崎目録』も『雑阿含』1286「種別」の対応経として S.1.4.4and6 としている (p.129)。しかしこれらにはモーガラージャも登場しないし、天と釈尊の問答の内容も同内容とは見なし難い。したがってここでは対応しないと見なす。

SN.001-004-005 (vol. I p.023、南伝 12 p.033) : あるとき世尊は舎衛城の祇樹給孤独園に住された。そのとき多くのウツジャーナサンニカ神たち (sambahulā Ujjhānasaññikā devatā)⁽¹⁾ が夜更けに一面を輝かせて現れ、傍らに立ったある天が「自己をあるがままでなく異なって誇示する人は賭博師のようなものである。なさないことを語っても賢者はこれを知る」（偈文）と誦した。世尊は「道跡は堅牢であって、これによって魔の縛より逃れる」（偈文）と説かれた。天は地上に降り立って、「世尊を非難することができると思ったわれわれの過ちを許されよ」（散文）といった。世尊は微笑された。天は怒って空に上り、「罪を謝しても受け入れない」（偈文）と誦した。世尊は「如来覚者は一切の有情を憐れむ。だからあなたの罪過を受け入れる」（偈文）と説かれた。

- (1) 中村元氏は‘Ujjhānasaññikā devatā’を「咎め立てをする神々」と訳している。『文庫』p.057

片山氏は「不満想のある神々」と訳し、「不満想のある天界が実際にあるのではない。そ

うではなく、これらの神々は、如来の四資具の受用について不満を漏らしつつやってくるのである」という註釈書の解説を紹介している。その不満というのは、釈尊が糞掃衣や樹下座などを説くけれども自分たちは最上の食べ物を食べ、天宮のような部屋に住んでいるので、釈尊の教えに不満を持っていたという不満であった。これによって結集の編集者達が、このように名づけた、という（『片山・相応部』1 p.143）。したがってこのウッジャーナサンニカという名は前世の業による名ではなく、ニックネームのようなものになるが、これも固有名詞と見做しておく。

なおこの対応漢訳経はただ「1天子」「1天」とするのみである。

『雑阿含』1277（大正02 p.351上、国訳03 p.325）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に**1天子**が一面を輝かせて現れ、「よく行じて説くべきであって、不行にして説く者を智者は非なりと知る。行じないで説くのは賊と同じである」（偈文）と誦した。世尊は「あなたは今譴責するところがあるのか」（散文）と問われた。天子は「私は悔過します」（散文）といった。世尊は微笑されたのみであった。天子は「私が悔過しても世尊は納受されない」（偈文）と誦した。世尊は「言葉で悔過しても内心が伴わなければならない」（偈文）と説かれた。（※）その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』275（大正02 p.469下）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき**1天**が一面を輝かせて現れ、「言説をもってせざるがゆえに沙門と名づけるを得る。虚讃して驕るのは大賊のごとくである」（偈文）と誦した。世尊は「己の功德を顕さず。他心行を知って世間の愛を渡る」（偈文）と説かれた。その天は「私に罪過がありました。懺悔します」（散文）といった。世尊は黙しておられた。天は「私が懺悔したのにあなたは受けない」（偈文）と誦した。「言葉で懺悔しても内心が伴わなければならない」（偈文）と説かれた。（※）天は歡喜して去った。

SN.001-004-006（vol. I p.025、南伝12 p.035）：あるとき世尊は舎衛城の祇樹給孤独園に住された。そのとき**多くのサトゥッラパカーイカ神**たちが夜更けに一面を輝かせて現れ、傍らに立ったある天が、「信仰は人の伴侶である。不信に止まらなければ名誉と称賛があり、死後に天に行く」（偈文）と誦し、**第2天**が「忿と慢を離れよ。名色に執着しない人に結縛はなし。不放逸に禪思すれば最勝の安樂に達する」（偈文）と誦した。

SN.001-004-007（vol. I p.026、南伝12 p.036）：あるとき世尊は釈迦族のカピラヴァットウの大林に（Sakkesu Kapilavatthusmiṃ mahāvane）すべて阿羅漢の500人の比丘らとともに（sabbe-eva arahantehi）住された。その時十方世界の諸天も世尊と比丘サンガに会うために集まってきた。**淨居天の4人**（catu Suddhāvāsakāyikā devatā）も**力士が腕を屈伸する間に現れて、**

「林の中に天衆も共に集う。敗れることのないサンガを見ようと我らもやってきた」（偈文）

「比丘らは御者が手綱を取るとく諸根を守る」（偈文）

「垣根を破り、貪欲を離れて、有眼者は汚れなく遊行する。よく調教された若い象のごとく」

「仏に帰命する人は悪趣にはおもむかない。人身を捨てて天身 (devakāya) を得る」
(偈文) と誦した。

『雑阿含』1192 (大正 02 p.323 上、国訳 03 p.224) : あるとき世尊は迦毘羅衛の迦毘羅衛林中にすべてが阿羅漢 (皆是羅漢) の 500 人の比丘らと共に住された。そのとき十方世界の大衆と諸天が世尊と比丘サンガを供養した。また **4 人の梵天王も力士が腕を屈伸する間に現れて、**

「大林中に大衆と十方の諸天が集まった。私も伏しがたき僧に帰依する」 (偈文)

「比丘らは真実心をもって精進し、諸根を納める」 (偈文)

「恩愛の刺をとかし、堅固に住すること因陀羅の幢のごときである。よく水流を渡す導師は天龍である」 (偈文)

「仏に帰依するものは悪趣に堕ちない。人身を断じて天身の樂を受ける」 (偈文) と誦して没した。

『別訳雑阿含』105 (大正 02 p.411 上) : あるとき釈尊は釈翅の迦毘羅衛の林に皆阿羅漢である 500 人の大比丘衆と共に住され、十世界の諸天も集まっていた。そこへ **4 人の梵身天が力士が腕を屈伸する間に現れて、**

「大林中に大衆が集まっている。我らも和合を破ることのできない衆僧を見ようとやってきた」 (偈文)

「よき御者が馬をよく調順するように、比丘らもまたよく諸根を制御している」 (偈文)

「例えば野馬のくびきを脱するように比丘らも三毒を脱している。世尊は大龍象である」 (偈文)

「仏に帰依するものは人身を捨てて天身を得る」 (偈文) と誦し、作礼して去った。

SN.001-004-008 (vol. I p.027、南伝 12 p.037) : あるとき世尊は王舎城のマッタクッチの鹿野苑 (Rājagahe Maddakucchismiṃ migadāya) ⁽¹⁾ に住された。そのとき世尊の足は岩の破片によって傷つけられ、その痛みは強く不快であったが、世尊はその痛みを忍ばれていた。その時夜更けに、**700 人のサトゥッラパカーイカ神たち**がマッタクッチの一面を輝かせて現れ、天たちは「不快の身苦に耐えて正念正知にある沙門ゴータマは龍象である。師子である。駿馬である」 (偈文) などとウダーナを誦した。

(1) 王舎城のマッタクッチを仏在処とする経は他に SN.004-002-003 (vol. I p.110、南伝 12 p.187) がある。対応経の別訳雑阿含 029 (大正 02 p.382 中) では王舎城の曼直林 (Maddakucchimigadāya) とされている。この経の内容は「釈尊は岩の破片で足を怪我された。そして激しい痛みを耐え、正念正心し、横臥して居られた。そのとき悪魔波旬が現れ、偈をもって『怠惰なるがゆえに横臥しているのか』と尋ねた。釈尊は『怠惰によって横になっているのではなく、衆生を憐みつつ横になっているのだ』と答えられた」というものである。『雑阿含』は魔王波旬が子供に化作して現れ、世尊は『自分は法財を得て今安らかに睡眠している』と答えられたとする。これはおそらく今の経と同じ状況にあった時であろう。

SN.-A. (vol. II p.077、片山・相応部 1 p.397) では、そのときデーヴァダッタが釈尊を殺そうとして霊鷲山上から重閣のような岩を落とし、釈尊は足を怪我されが、比丘たちは

その釈尊をマンダクッチ園にお連れしたとしている。*Dhammapada-A.* (vol. II p.164、及川2 p.216)。ただしデーヴァダッタのこの行為を記すパーリの「破僧韃度」や「僧殘罪」(『パーリ律』vol. II p.193=南伝04 p.297、『四分律』大正22 p.592下、『五分律』大正22 p.020上、『十誦律』大正23 p.260上)にはこの地名は記されていない。これらの仏在処については、『パーリ律』『四分律』『五分律』は耆闍崛山とするが、『十誦律』は欽婆羅夜叉石窟中とするから次に掲げる『雜阿含』に同じい。

なおこのマンダクッチ園は、*DN.016 Mahāparinibbāna-s.* [14/35] (大般涅槃經 vol. II p.102、南伝07 p.070、*Vinaya Saṃghādisesa* (僧殘) 008 (vol. III p.158、南伝01 p.266)、*Vinaya Uposthakkhandhaka* (布薩韃度) (vol. I p.105、南伝03 p.186)、*Vinaya Samathakkhandhaka* (滅諍韃度) (vol. II p.074、南伝04 p.117)にも言及されている。

『雜阿含』1289 (大正02 p.355上、国訳03 p.338) : あるとき世尊は王舎城の金婆羅山の金婆羅鬼神住処の石室に住された。そのとき世尊は金槍で足を刺し、身に苦痛を覚えられたが捨心をえて正智正念に堪忍された。そこへ8人の山神天子が現れ、「沙門瞿曇は人中の師子である。苦痛にあつて堪忍して正智正念から退滅することがない。大龍、牛王良馬である……」(偈文)と誦し、天子らは仏に礼してから没した。
『別訳雜阿含』287 (大正02 p.473下) : あるとき世尊は王舎城の毘婆山側の七葉窟に住された。その時世尊は**佉陀羅**のために刺されて激痛に苦しんでおられたがそれを忍受されていた。そこへ8天子が現れ、「沙門瞿曇は丈夫人中の師子である。苦痛を受けながら念覺心を捨てない。龍象、善乗牛である、……」(散文)と言ひ、「愛欲の海に沈溺すれば彼岸に渡ることができない」(偈文)と誦し、仏足を頂礼して歡喜して宮に還つた。

SN.001-004-009 (vol. I p.029、南伝12 p.041) : あるとき世尊はヴェーサーリーの大林重閣講堂 (*Vesālikāṃ mahavane Kūṭāgāra-sālā*)に住された。そのとき夜更けにコーカナダーという雨雲の娘 (*Kokanadā Pajjunnassa dhītā*)⁽¹⁾が大林の一面を輝かせて現れ、「ヴェーサーリーの林に住される衆生の上首正覺者よ、私は恭しく礼したてまつる。誰でもこの聖法を譏るものは叫喚地獄に墮ち、誰でもこの聖法に近づくものは人身を捨てるとき天に生まれる」(偈文)と誦した。

- (1) 中村元氏は、原文および註釈によって、「『雨雲』という天王(神の王)で『雨を降らす者』という名の者がいた。その娘が『四天王』という名であった」と註記している。p.265
片山氏は「雨雲天王 (*vassa-valāhaka-deva*) である四大王天 (*cātumahārājika*) 《四大王天身 (*cātu-mahārājika-kāyika*)》の娘」と註記している。p.156 これによればこの娘は四大王天と解することもできるが、対応漢訳では *Kokanadā* と *Pajjunnā* の2人の天女と解しているようである。ただし次の『別訳雜阿含』271、269では求迦尼婆天女はもと波純提の女(娘)としている。

『雜阿含』1274 (大正02 p.350上、国訳03 p.322) : あるとき世尊は毘舍離の獼猴池の側にある重閣講堂に住された。そのとき後夜に**拘迦那婆天女**と**朱盧陀天女**が一面を輝かせて現れ、朱盧陀天女が「大師等正覺が毘舍離国に住される。拘迦那・朱盧陀は稽首したてまつる。もし聖法律において惡慧を生ずれば必ず惡道に墮し、もし聖法律において律儀が定まれば天上に生じる」(偈文)と誦し、拘迦那婆天女は「身

口意において悪をなすな、五欲は虚しい」（偈文）と誦した。世尊は「その通りである」（散文）と説かれ、拘迦那婆天女の偈を復唱された。天女らは礼してから没した。

その翌朝早くに世尊は比丘らの元に至られ、この2人の天女のことを告げられた。比丘らは世尊の所説を歡喜奉行した。

『別訳雜阿含』272（大正02 p.469上）：あるとき世尊は毘舍離の北の獼猴彼岸の精舎に住された。そのとき波純提天女と拙羅天女が一面を輝かせて現れ、拙羅天女が「世尊は毘舍離にの大林中に住される。求迦尼婆天⁽¹⁾と拙羅は世尊婆伽婆に稽首してたてまつる。深法を譏るものは必ず悪趣に墮し、聖法を贊嘆するものは善処に生まれる」（偈文）と誦した。また求迦尼婆天女は「身口意に善をなせ。欲は虚しい」（偈文）と誦した。世尊は「その通りである、その通りである」（散文）と説かれた。天女らは歡喜して去った。

(1) 「求迦尼婆」は‘Kokanadā’の音写語であり、先の「波純提」は‘Pajjunna’の音写語であろう。

SN.001-004-010 (vol. I p.030、南伝12 p.041)：あるとき世尊はヴェーサーリーの大林重閣講堂に住された。そのとき夜更けにチューラ・コーカナダーという雨雲の娘 (Cūḷa-kokanadā Pajjunnessa dhītā 小紅蓮)⁽¹⁾が大林の一面を輝かせて現れ、「私はここにやって来て仏と法とを礼拝しつつ、略説してこの偈を説き奉る。身口意にいかなる悪もなすなかれ。愛欲を離れて苦しみを受けるなかれ」（偈文）と誦した。

(1) 中村元氏は「小さきコーカナダー。おそらく前経のコーカナダー女の妹なのであろう、と註記している（『文庫』p.266）。片山氏は「小コーカナダー」とするのみ（p.158）。

『雜阿含』1273（大正02 p.349下、国訳03 p.321）：あるとき世尊は王舎城の山谷精舎⁽¹⁾に住された。そのとき後夜に拘迦那婆天女が一面を輝かせて現れ、「私は広分別をもって如来の正法律を略説する。身口意にて悪をなすな、五欲は虚しい、非義に和合するな」（偈文）と誦した。世尊は「その通り」（散文）と説かれ、その偈を復唱された。拘迦那婆天女は礼してから没した。

世尊は翌朝比丘らにこのことを報告され、天女の偈を復唱された。比丘らは世尊の所説を歡喜奉行した。

(1) 王舎城の山谷精舎を仏在処とする経は続く『雜阿含』1270と【2】の[2]に紹介する1271、1272であり、その他に『雜阿含』768（大正02 p.200下、国訳02 p.253）にしか見いだされない。『雜阿含』726（大正02 p.195中、国訳02 p.235）は「王舎城夾谷精舎」とするがこれもこの異訳語であろう（金子芳夫編【資料集2-1】「原始仏教聖典の仏在処・説処一覧——マガダ国篇」「モノグラフ」第2号 2000・7 p.153参照）。すなわちこの地名は『雜阿含』にしか見いだされないことになる。

これらのすべての対応経典の仏在処を掲げると次の表ようになる。パーリのところに（ ）を施したのは、1つのパーリに2つの対応する『雜阿含』があるからである。ちなみに768と726は阿難が善知識は梵行の半分だとの発言に釈尊が善知識の意義を説いたものである。

表からわかるように、対応経からだけでは山谷精舎がパーリの何に相当するのかわからない。しかし『別訳雜阿含』からすると山谷精舎（夾谷精舎）は耆尼山に相当するのかもしれない。しかし耆尼山もここに紹介した2経にしか見いだせない。赤沼『固有名詞辞典』の‘Rājagaha’の項（[3]と[4]）には‘Rājagaha’の異名としての

‘Giribbaja’に相当すると解釈している。しかし今の経典は王舎城の山谷精舎というのであるから、王舎城そのものとは考えられない。

ところで今のこの経についてはパーリはヴェーサーリーの大林重閣講堂とするのであるから、訳語に止まらず伝承自体が相違するということになる。

『雑阿含』	パーリ	『別訳雑阿含』
1270	SN.1-4-10：大林重閣講堂	269：王舎城耆尼山中
1271	—	270：舎衛城祇樹給孤独園
1272	—	—
1273	(SN.1-4-10：大林重閣講堂)	271：王舎城耆尼山
768	SN.45-2 (vol.V p.002)：釈迦国のナガラカ	—
726	(SN.45-2 (vol.V p.002)：釈迦国のナガラカ)	—

『別訳雑阿含』271 (大正02 p.469上)：あるとき世尊は王舎城の耆尼山に住された。そのときもと波純提の娘であった求迦尼婆天女が一面を輝かせて現れ、「私は今略説して所樂を説きます。身口意に悪をなすな、欲の性相は空である、損滅の業をなすな」(偈文)と誦した。世尊は「その通りである」(散文)と説かれた。求迦尼婆天女は歡喜して天宮に帰った。

『雑阿含』1270 (大正02 p.348下、国訳03 p.318)：あるとき世尊は王舎城の山谷精舎に住された。そのとき拘迦尼天女2004が後夜に、一面を輝かせて釈尊のもとに現れ、「身口意にて悪をなすな、五欲は虚しい、非義に和合するな」(偈文)と誦した。世尊は「その通り」(散文)と説かれ、この偈を復唱された。天女は礼してから没した。

世尊は翌朝比丘らにこのことを報告され、天女の偈を復唱された。比丘らは世尊の所説を歡喜奉行した⁽¹⁾。

(1) 『雑阿含』1271も関連するが、これらは【2】の[2]に紹介した。

『雑阿含』1272 (大正02 p.349中、国訳03 p.320)：あるとき世尊は王舎城の山谷精舎に住された。そのとき拘迦那婆天女が後夜に一面を輝かせて釈尊のもとに現れ、三宝に歸依して、「五欲は虚しい、もろもろの苦に習近せざれ」という偈を誦した。釈尊は「その通りその通り」(偈文)と説かれた。天女は礼して没した。

翌朝釈尊は比丘らにこのことを報告された。比丘らは世尊の所説を歡喜奉行した。

『別訳雑阿含』269 (大正02 p.468中)：あるとき世尊は王舎城の耆尼山中に住された。そのとき夜中にもと波純提の娘であった求迦尼婆天女が一面を輝かせて現れて、「身口意に善を修して悪をなさず、欲を空無実と見て、損滅の業をなすなかれ」(偈文)と誦した。世尊は「善哉」(散文)と褒められ、その偈を復唱された。天女は歡喜して天宮に還った。

SN.001-005-001 (vol. I p.031、南伝12 p.043)：あるとき世尊は舎衛城の祇樹給孤独園に住された。そのとき夜更けに1天が一面を輝かせて現れ⁽¹⁾、「炎の燃え盛

る家より荷物を運び出して焼かれないのはよい。布施されたものは運び出されたものである。非難なく天界に行け」⁽²⁾（偈文）と誦した。

(1) 品の冒頭に別立てして、仏在処の舎衛城・祇樹給孤独園と登場人物の「ある天神 (aññatarā devatā)」が記されている。したがってこの品に含まれるすべての経にこれが適用されると判断した。

(2) この偈の内容は、次の経と対応する。ただし天は登場しないし、偈は釈尊が誦したものである。

『別訳雑阿含』087 (大正 02 p.403 下) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき**1 老婆羅門**が世尊のところに行き、「私は今まで悪をなし、福をなしたことはありません。瞿曇よ、私の帰依処を教えてください」(散文)といった。世尊は「失火の家から急いで財宝を出して無火の処に置きなさい。布施は堅牢の蔵で王賊にも水火にも侵されない」(偈文)と説かれた。比丘らは世尊の所説を歡喜奉行した。

SN.001-005-002 (vol. I p.032、南伝 12 p.044) : 舎衛城の祇樹給孤独園

(天) 「力を与えるとは何を与えるのか、美貌を与えるとは何を与えるのか」(偈文)
[質問]

(世尊) 「食物は力を与え、衣は美貌を与え、法を教える人は不死を与える」(偈文)

『雑阿含』998 (大正 02 p.261 中、国訳 03 p.269) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に**1 天子**が一面を輝かせて現れ、「何を施せば大力を得、何を施せば妙色を得るのか」(偈文)と尋ねた。世尊は「食を施せば大力を得、衣を施せば妙色を得る。法を持って悔いれば甘露を施す」(偈文)と説かれた。(※) その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』135 (大正 02 p.426 中) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に**1 天**が一面を輝かせて現れ、「何が大力を得、妙色を得せしめるのか」(偈文)と尋ねた。世尊は「飲食を施せば力を得、衣を施せば盛色を得、法のごとく弟子を教えれば甘露を施す」(偈文)と説かれた。(※) その天は歡喜して宮に還った。

SN.001-005-003 (vol. I p.032、南伝 12 p.044) : 舎衛城の祇樹給孤独園

(天) 「天も人も食を喜ぶ。食を喜ばないあの夜叉 (yakkha) は何者か」(偈文)
[質問]

(世尊) 「清浄なる心をもって食を施す人はこの世とあの世で食を得る。功德は後の世の渡し場である」(偈文)⁽¹⁾。

(1) SN.002-003-003 (vol. I p.057、南伝 12 p.098) に同一偈あり。そこでは神にセーリー天子 (Serī devaputta) という名が与えられている。漢訳も同様であるので、対応漢訳はそこに紹介する。

SN.001-005-004 (vol. I p.032、南伝 12 p.045) : [釈尊は登場しない] 舎衛城の祇樹給孤独園

(天) 「1つの根(無明)、2つの面(断と常)、3つの垢(三毒)、5つの地場(五欲)あり。その元に12の渦(十二処)がある大海(不満足)、地害(地獄)がある。聖者はこれを超えた」(偈文)

SN.001-005-005 (vol. I p.033、南伝 12 p.045) : [釈尊は登場しない] 舎衛城の
祇樹給孤独園

(天) 「無欠にして秘義を見、智慧を施し、愛欲に住しない、聖道を歩む大聖を見よ」
(偈文)

SN.001-005-006 (vol. I p.033、南伝 12 p.045) : 舎衛城の祇樹給孤独園

(天) 「仙女 (accharā) にかしづかれるのは吸血鬼ら (pisācagaṇa) に仕えられるよ
うなものである。この愚痴の林をどうしたら出ることができるであろうか」 (偈文)
[質問]

(世尊) 「まっすぐな道を慚をよりかかり板とし、正念をまん幕とし、法を御者とし、
正見を先行者とするこのような法の車輪に乗る人は涅槃に至る」 (偈文)

『雑阿含』587 (大正 02 p.156 上、国訳 03 p.297) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給
孤独園に住された。そのとき後夜に1天子が一面を輝かせて現れ、「天女衆に圍繞さ
れるのは毘舍脂 (pisāca 悪鬼) 衆に圍繞されるようなものである。痴惑の林からど
うしたら出ることができるか」 (偈文) と尋ねた。世尊は「正直の道を法想を覆いと
し、慚愧を長麤とし、正念をとばりとし、智慧を御者、正見を前導者とする寂黙の車
に乗ることによって安樂処を得る」 (偈文) と説かれた。(※) その天子は礼してか
ら没した。

『別訳雑阿含』171 (大正 02 p.437 上) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住さ
れた。そのとき夜中に1天が一面を輝かせて現れ、「天女に左右に侍されるのは、毘
舍闍が充満するようなものである。愚痴の黒闇林をどうしたら出られるのか」 (偈文)
と尋ねた。世尊は「正直を道と名づけ、無畏・覚観・慚愧・念・智慧・正見の車に乗
れば生死を離れることができる」 (偈文) と説かれた。(※) その天は歡喜して宮に
還った。

SN.001-005-007 (vol. I p.033、南伝 12 p.046) : 舎衛城の祇樹給孤独園

(天) 「どのような人の功德は日夜に増長するか。どのような人が天界に行くか」
(偈文) [質問]

(世尊) 「園や林に植え、橋を造り、井戸を掘り、池を作る人、そのような人の功德
は日夜に増長し、天界に行く」 (偈文)

『雑阿含』997 (大正 02 p.261 上、国訳 03 p.268) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給
孤独園に住された。そのとき後夜に1天子が一面を輝かせて現れ、「何が昼夜に福業
を常に増長させるか。何が天に生まれさせるか」 (偈文) と尋ねた。世尊は「園に果
樹を植え、橋船をもって人を渡し、福德の舎を作り、井戸を掘り、客舎を作れば福業
を常に増長させ、天に生まれさせる」 (偈文) と説かれた。(※) その天子は礼して
から没した。

『別訳雑阿含』134 (大正 02 p.426 中) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住さ
れた。そのとき夜中に1天が一面を輝かせて現れ、「何が昼夜に福業を常に増長させ、
何人が天道に趣くか」 (偈文) と尋ねた。世尊は「園林に種植し、流れに橋船を置き、
曠路に井戸を造り、要路に客舎を造る。この人は昼夜に福業を増長させ、天道に趣く」

(偈文) と説かれた。(※) その天は歡喜して宮に還った。

SN.001-005-008 (vol. I p.033、南伝 12 p.046) : [釈尊は登場しない] 舍衛城祇樹給孤独園

(天) 「ジェータ林 (Jetavana) は仙人衆が住み、法王 (仏) が住される祝福された住処である。人は智と定と戒に浄められるのであって氏姓によってではない。智慧と戒と寂靜によってサーリプッタのごとく彼岸に渡った比丘は最勝である」⁽¹⁾ (偈文)

(1) SN.002-002-010 (vol. I p.055、南伝 12 p.093) にも同一偈がある。神はアナータピンディカ天子 (Anāhtapiṇḍika devaputta) とされており、これに続く後日譚がある。対応漢訳はここに紹介する。

SN.001-005-009 (vol. I p.034、南伝 12 p.047) : 舍衛城の祇樹給孤独園

(天) 「慳貪で施を惜しみ、他人の布施をさまたげようとする人の生まれ変わる世はどのようなものか」 (偈文) [質問]

(世尊) 「そのような人は地獄 (niraya)、畜生 (tiracchānayani)、夜摩の世界 (yamaloka) に生れ、たとい人界に來たとしても貧家に生まれる」 (偈文)

SN.001-005-010 (vol. I p.035、南伝 12 p.049) : 舍衛城祇樹給孤独園

(ガティーカーラ (Ghāṭikāra 陶工) という名の天) 「7人の比丘が解脱して無煩天 (Aviha) に生まれた。それはウパカ (Upaka)、パラガンダ (Phalagaṇḍa)、プクサーティ (Pukkusāti)、パッティヤ (Bhaddiya)、カンダデーヴァ (Khaṇḍadeva)、パーフラッジ (Bāhuraggi)、ピンギヤ (Piṅgiya) である。彼らは人身を捨てて、天の軛をも離れた」 (偈文)

(世尊) 「よくぞ言った。その人たちは誰の法によって結縛を断じたのか」 (偈文)

(天) 「世尊の法のほかにはない。この世において世尊の法を知って結縛を断じました」

(偈文)

(世尊) 「知り難い法をあなたは語った。誰の法を知ってこのように語ったのか」 (偈文)

(天) 「むかし私は陶師であって、ヴェーバリンガ (Vehalinga) で壺を作っていた。父母に仕え、迦葉仏の優婆塞 (Kassapassa upāsaka) であって⁽¹⁾、世尊と同郷の友人であった。だから7人の比丘が解脱したことを知っているのです」 (偈文)

(世尊) 「バग्ガヴァ (Bhaggava) よ、その通りである、あなたは私の同郷で、我が友人であった。これは最後身の古き友人の2人の邂逅である」⁽²⁾ (偈文)

(1) *Buddhavaṃsa* (仏種姓) p.092 (南伝 41 p.348) にはガティーカーラは迦葉仏の侍者 (upaṭṭhaka) であったとされている。

(2) SN.002-003-004 (vol. I p.060、南伝 12 p.101) に同一偈あり。そこでは天の名は「ガティーカーラ (Ghāṭikāra 陶工) という名の天子」とされている。対応漢訳はそこに紹介する。

SN.001-006-001 (vol. I p.036、南伝 12 p.051) : (舍衛城の祇樹給孤独園)⁽¹⁾

(天) 「老いるときに何がよく、何が安住処であるか。何が人の宝で、何が賊によつ

て奪われないか」(偈文) [質問]

(世尊)「戒は老いるときによく、信(saddhā)は安住処、智慧(paññā)は人の宝であり、功德(puñña)は奪われない」(偈文)

(1) 前の品の仏在処が省略されているものと判断した。以下も同じ。

『雑阿含』1015(大正02 p.265中、国訳03 p.282)：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に天子が一面を輝かせて現れ、「何がよく老にいたり、何がよく建立し、何が人の宝であり、何が奪われないか」(偈文)と尋ねた。世尊は「戒はよく老に至り、浄信はよく建立し、智慧は人の宝であり、功德は賊も奪わない」(偈文)と説かれた。(※)その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』242(大正02 p.460中)：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に1天が一面を輝かせて現れ、「何がよく老にいたり、何が安住であり、どんな宝が第1で、何物が賊も奪わないか」(偈文)と尋ねた。世尊は「持戒がよく老にいたり、信が安住であり、智慧人が第1で、福財は賊も奪わない」(偈文)と説かれた。(※)その天は歡喜して去った。

SN.001-006-002 (vol. I p.036、南伝12 p.051)：(舎衛城の祇樹給孤独園)

(天)「何が不老であり、何がよき足場で、何が人の宝、何が賊によって奪われないか」(偈文) [質問]

(世尊)「戒は老いるによく、信はよき足場、智慧は人の宝、功德は賊によって奪われない」(偈文)

SN.001-006-003 (vol. I p.037、南伝12 p.052)：(舎衛城の祇樹給孤独園)

(天)「何者が旅人の友、何者が自家にありての友、何者が事件があったときの友、何者が未来の友であるか」(偈文) [質問]

(世尊)「商人は旅人の友、母は自家にありての友、朋友は事件があったときの友、自らなした功德は未来の友である」(偈文)

『雑阿含』1000(大正02 p.262中、国訳03 p.272)：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に1天子が一面を輝かせて現れ、「どのような人が遠遊の善知識、どのような人が居家の善知識、どのような人が通財の善知識、どのような人が後世の善知識であるか」(偈文)と尋ねた。世尊は「商人の導師は遠遊の善知識、貞節な妻は居家の善知識、相親しむ人は通財の善知識、自ら修する功德は後世の善知識である」(偈文)と説かれた。(※)その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』137(大正02 p.427上)：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に1天が一面を輝かせて現れ、「遠く他国に行くときに誰が親しき者となり、居家するとき誰が親しき者となり、資材中に誰が親しき者となり、後世に誰が親しき者となるか」(偈文)と尋ねた。世尊は「遠く他国に行くときに行伴が親しき者となり、居家するとき母が親しき者となり、資材中に眷族が親しき者となり、功德を修することが後世に親しき者となる」(偈文)と説かれた。(※)その天は歡喜して去った。

SN.001-006-004 (vol. I p.037、南伝 12 p.052) : (舎衛城の祇樹給孤独園)

(天) 「何が人の支持で、この世の最上の友とは誰か、大地の生命を誰が育むか」

(偈文) [質問]

(世尊) 「子は人の支持で、妻は最上の友、雨が大地の生命を育む」 (偈文)

SN.001-006-005 (vol. I p.037、南伝 12 p.053) : (舎衛城の祇樹給孤独園)

(天) 「何が人をして生まれさせ、人の何が走り回り、何が輪廻し、何が大きな恐れとなるのか」 (偈文) [質問]

(世尊) 「渴愛が人をして生まれさせ、人の心が走り回り、衆生が輪廻し、苦悩が大きな恐れとなる」 (偈文)

『雑阿含』1018 (大正 02 p.265 下、国訳 03 p.284) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に天子が一面を輝かせて現れ、「何が衆生を生れさせ、何が先駆けとなり、何が生死を起こし、何が恐るべきか」 (偈文) と尋ねた。世尊は「愛欲が衆生を生れさせ、意が先駆けとなり、衆生が生死を起こし、業は恐るべきである」 (偈文) と説かれた。(※) その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』245 (大正 02 p.460 下) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に 1 天が一面を輝かせて現れ、「何が衆生を生まれさせ、何が常に馳求し、何が輪転し、何が大きいなる恐れか」 (偈文) と尋ねた。世尊は「愛欲が衆生を生まれさせ、意識が馳求し、衆生が輪転し、業が大きいなる恐れである」 (偈文) と説かれた。(※) その天は歡喜して去った。

SN.001-006-006 (vol. I p.037、南伝 12 p.053) : (舎衛城の祇樹給孤独園)

(天) 「何が人を生れさせ、人の何が走りまわり、何が輪廻し、何物から解脱しないのか」 (偈文) [質問]

(世尊) 「渴愛が人を生れさせ、人の心が走りまわり、衆生が輪廻し、苦悩から解脱しない」 (偈文)

『雑阿含』1016 (大正 02 p.265 中、国訳 03 p.283) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に天子が一面を輝かせて現れ、「何が衆生を生れさせ、何が先駆けとなり、何が生死を起こし、何が解脱しないのか」 (偈文) と尋ねた。世尊は「愛欲が衆生を生れさせ、意が先駆けとなり、衆生が生死を起こし、苦法が解脱しない」 (偈文) と説かれた。(※) その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』243 (大正 02 p.460 中) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に 1 天が一面を輝かせて現れ、「衆生は何によって生じ、何が常に馳求し、何が生死を起こし、何が解脱しないのか」 (偈文) と尋ねた。世尊は「愛が衆生を生まれさせ、意が常に馳求し、一切有が生死を起こし、苦が解脱しない」 (偈文) と説かれた。(※) その天は歡喜して去った。

SN.001-006-007 (vol. I p.038、南伝 12 p.053) : (舎衛城の祇樹給孤独園)

(天) 「何が人を生れさせ、人の何が走りまわり、何が輪廻し、何が人のより所となるのか」 (偈文) [質問]

(世尊)「渴愛が人を生れさせ、人の心が走りまわり、衆生が輪廻し、業が人のより所である」(偈文)

『雑阿含』1017(大正02 p.265下、国訳03 p.284)：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に天子が一面を輝かせて現れ、「何が衆生を生れさせ、何が先駆けとなり、何が生死を起こし、何が人のより所となるのか」(偈文)と尋ねた。世尊は「愛欲が衆生を生れさせ、意が先駆けとなり、衆生が生死を起こし、業が人のより所となる」(偈文)と説かれた。(※)その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』244(大正02 p.460下)：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に1天が一面を輝かせて現れ、「衆生は何によって生じ、何が常に馳求し、何が生死輪転させ、何が怖畏なのか」(偈文)と尋ねた。世尊は「衆生は愛によって生じ、心意が常に馳求し、衆生が生死し、苦が怖畏である」(偈文)と説かれた。(※)その天は歡喜して去った。

SN.001-006-008 (vol. I p.038、南伝12 p.054)：(舎衛城の祇樹給孤独園)

(天)「何が非道といわれ、何が日夜に尽き、梵行の汚れは何で、水のいらぬ沐浴とは何か」(偈文) [質問]

(世尊)「貪欲が非道といわれ、青春は日夜に尽き、女人は梵行の汚れで、苦行(tapo)と梵行は水のいらぬ沐浴である」(偈文)

『雑阿含』1019(大正02 p.266上、国訳03 p.285)：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に天子が一面を輝かせて現れ、「何が非道で、何が日夜に遷り、何が梵行を汚し、何が世間を煩わすか」(偈文)と尋ねた。世尊は「貪欲が非道で、寿命は日夜に遷り、女人が梵行を汚し世間を煩わす」(偈文)と説かれた。(※)その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』246(大正02 p.461上)：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に1天が一面を輝かせて現れ、「何を非道といい、何が日夜に逝き、梵行を誰が汚し、誰が世間を害するか」(偈文)と尋ねた。世尊は「欲を非道といい、人命は日夜に逝き、女が梵行を汚しまた世間を害する」(偈文)と説かれた。(※)その天は歡喜して去った。

SN.001-006-009 (vol. I p.038、南伝12 p.054)：(舎衛城の祇樹給孤独園)

(天)「何が人の伴であり、何が人を教え、何を愛樂して人はすべての苦しみから脱するのか」(偈文) [質問]

(世尊)「人が人の伴であり、智慧が人を教え、涅槃を愛樂して(nibbānābhirata)人はすべての苦しみから脱する」(偈文)

『雑阿含』1014(大正02 p.265上、国訳03 p.282)：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に1天子が一面を輝かせて現れ、「何が比丘の自己と等しい第二となし、何が比丘を教授に随順する者であり、比丘はどこに娛樂してよく諸々の結縛を断ずるのか」(偈文)と尋ねた。世尊は「信を自己と等しい第二となし、智慧をもって教授し、涅槃に娛樂して結縛を断ずる」(偈文)と説かれた。

(※)その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』241（大正02 p.460上）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に1天が一面を輝かせて現れ、「人は生死において何者を二伴となし、誰が教授して涅槃道に帰向し、比丘は何を楽しんで結縛を断じるのか」（偈文）と尋ねた。世尊は「人は生死において信を二伴となし、智慧が教授して涅槃道に帰向し、結縛を断じるのを比丘という」（偈文）と説かれた。（※）その天は歡喜して去った。

SN.001-006-010 (vol. I p.038、南伝12 p.054) : (舎衛城の祇樹給孤独園)

(天) 「何が偈頌 (gāthā) の因であり、何がその記標で、偈誦は何により、何がその住み家であるか」 (偈文) [質問]

(世尊) 「韻が偈頌の因であり、文字がその記標で、偈誦は題名により、詩人をその住み家となす」 (偈文)

『雑阿含』1021（大正02 p.266中、国訳03 p.286）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に天子が一面を輝かせて現れ、「何を偈の因となし、何をもちて莊嚴し、何をより所とし、何が体であるか」（偈文）と尋ねた。世尊は「欲を偈の因となし、文字をもちて莊嚴し、名をより所とし、造作を体とする」（偈文）と説かれた。（※）その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』248（大正02 p.461中）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に1天が一面を輝かせて現れ、「偈は何を初めとなし、何を分別とし、何を依止とし、何を体とするか」（偈文）と尋ねた。世尊は「偈は欲を初めとなし、字を分別とし、名に依止し、文章を体とする」（偈文）と説かれた。（※）その天は歡喜して去った。

SN.001-007-001 (vol. I p.039、南伝12 p.055) : (舎衛城の祇樹給孤独園)

(天) 「何がすべてに勝り、それよりも勝れたものはないか。どんな1法がすべてを従属せしめるのか」 (偈文) [質問]

(世尊) 「名 (nāma) はすべてに勝り、これより勝れたものはない」 (偈文)

『雑阿含』1020（大正02 p.266上、国訳03 p.285）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に天子が一面を輝かせて現れ、「何が世間を映し、何が上あることなきか。どんな1法が衆生を制御するのか」（偈文）と尋ねた。世尊は「名が世間を映し、無上である。名の1法が衆生を制御する」（偈文）と説かれた。（※）その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』247（大正02 p.461上）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に1天が一面を輝かせて現れ、「何物を第1となし、諸物のなかの最勝は何か。どんな1種の法が世間において自在なのか」（偈文）と尋ねた。世尊は「四陰の名が最勝であり、最上である。四陰の1法が世間において自在である」（偈文）と説かれた。（※）その天は歡喜して去った。

SN.001-007-002 (vol. I p.039、南伝12 p.056) : (舎衛城の祇樹給孤独園)

(ある天) 「世間は何によって導かれ、何によって悩まされるのか。どんな1法が世間

を従属させるのか」(偈文) [質問]

(世尊)「世間は心によって導かれ、心によって悩まされる。心の1法が世間を従属させる」

『雑阿含』1009(大正02 p.264上、国訳03 p.278)：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に天子が一面を輝かせて現れ、「誰が世間を持ち去り、誰が世間を引っ張り、どんな1法が世間を制御するか」(偈文)と尋ねた。世尊は「心が世間を持ち去り、心が世間を引っ張り、心の1法がよく世間を制御する」(偈文)と説かれた。(※)その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』236(大正02 p.459中)：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に1天が一面を輝かせて現れ、「何が世間をおびやかす、何を苦悩と名づけるのか。どんな1法が世間において自在なのか」(偈文)と尋ねた。世尊は「意が諸趣をおびやかす、意が世間を悩ませる。意の1法が世間において自在である」(偈文)と説かれた。(※)その天は歡喜して去った。

SN.001-007-003 (vol. I p.039、南伝12 p.056)：(舎衛城の祇樹給孤独園)

(天)「世間は何によって導かれ、何によって悩まされるのか。どんな1法が世間を従属させるのか」(偈文) [質問]

(世尊)「世間は渴愛によって導かれ、渴愛によって悩まされる。渴愛の1法が世間を従属させる」(偈文)

SN.001-007-004 (vol. I p.039、南伝12 p.056)：(舎衛城の祇樹給孤独園)

(天)「世間は何によって縛られ、世間の足は何か。何ものを離れて涅槃と呼ばれるのか」(偈文) [質問]

(世尊)「世間は喜(nandi)によって縛られ、尋求(vitakka)は足である。渴愛を離れて涅槃と呼ばれる」(偈文)

『雑阿含』1010(大正02 p.264中、国訳03 p.279)：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に天子が一面を輝かせて現れ、「誰が世間を縛り、誰を調伏して解放され、どんな法を断除すれば涅槃というのか」(偈文)と尋ねた。世尊は「欲が世間を縛り、欲を調伏して解脱し、愛欲を断除すれば涅槃という」(偈文)と説かれた。(※)その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』237(大正02 p.459中)：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に1天が一面を輝かせて現れ、「何が世間を縛り、何を解脱といい、どんな法を断じれば涅槃というのか」(偈文)と尋ねた。世尊は「欲縛が世間を縛り、欲を捨てれば解脱を得、愛縛を断じれば涅槃という」(偈文)と説かれた。(※)その天は歡喜して去った。

SN.001-007-005 (vol. I p.039、南伝12 p.057)：(舎衛城の祇樹給孤独園)

(天)「世間は何によって縛られ、世間の足は何か。何ものを離れてすべての縛を断じるのか」(偈文) [質問]

(世尊)「世間は喜によって縛られ、尋求は足である。渴愛を離れてすべての縛を断

じる」（偈文）

SN.001-007-006 (vol. I p.040、南伝 12 p.057) : (舎衛城の祇樹給孤独園)

(天) 「世間は何によって脅迫され、何によって覆われ、何によって貫かれ、何によって燻されるのか」 (偈文) [質問]

(世尊) 「世間は死によって脅迫され、老によって覆われ、渴愛の槍によって貫かれ、欲 (icchā) によって燻される」 (偈文)

SN.001-007-007 (vol. I p.040、南伝 12 p.057) : (舎衛城の祇樹給孤独園)

(天) 「世間は何によって継がれ、何によって覆われ、何に閉じこめられ、何の上に立っているのか」 (偈文) [質問]

(世尊) 「世間は渴愛によって継がれ、老によって覆われ、死に閉じこめられ、苦しみの上に立っている」 (偈文)

SN.001-007-008 (vol. I p.040、南伝 12 p.058) : (舎衛城の祇樹給孤独園)

(天) 「世間は何によって閉じこめられ、何物のうゑに立っているのか。世間は何によって継がれ、何によって覆われているか」 (偈文) [質問]

(世尊) 「世間は死によって閉じこめられ、苦しみの上に立っている。世間は渴愛によって継がれ、老によって覆われている」 (偈文)

『雜阿含』 1011 (大正 02 p.264 中、国訳 03 p.280) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に**1 天子**が一面を輝かせて現れ、「誰が世間を覆い、誰が世間を遮し、誰が衆生を結縛し、世間はどこに立っているか」 (偈文) と尋ねた。世尊は「老が世間を覆い、死が世間を遮し、愛が衆生を結縛し、法は世間を安立している」 (偈文) と説かれた。(※) その天子は礼してから没した。

『別訳雜阿含』 238 (大正 02 p.459 下) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に**1 天**が一面を輝かせて現れ、「何物が世間を覆い、何物が圍繞し、何物が衆生を縛し、世間はどのように立っているか」 (偈文) と尋ねた。世尊は「老が世間を覆い、死が圍繞し、愛が衆生を縛し、如法が世間を安立している」 (偈文) と説かれた。(※) その天は歡喜して去った。

SN.001-007-009 (vol. I p.040、南伝 12 p.058) : (舎衛城の祇樹給孤独園)

(天) 「世間は何物によって縛られ、何物の調伏によって解脱し、何物を離れることによってすべての縛を断じるのか」 (偈文) [質問]

(世尊) 「世間は欲望によって縛られ、欲望の調伏によって解脱し、欲望 (icchā) を離れることによってすべての縛を断じる」 (偈文)

SN.001-007-010 (vol. I p.041、南伝 12 p.058) : (舎衛城の祇樹給孤独園)

(天) 「世間は何物によって生じ、何物の上に交渉をなし、何物により、何物の上に苦しむか」 (偈文) [質問]

(世尊) 「世間は六 (内処) が生じるによって生じ、六の上に交渉をなし、六により、六の上に苦しむ」

『別訳雑阿含』235（大正02 p.459上）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に1天が一面を輝かせて現れ、「何が世間を生じさせ、何が和合させ、どんな愛が世間を有らしめ、何が世間を苦しめるか」（偈文）と尋ねた。世尊は「六愛が世間を生じさせ、六触が和合させ、六愛が世間を有らしめ、六情が世間を苦しめる」（偈文）と説かれた。（※）その天は歡喜して去った。

SN.001-008-001 (vol. I p.041、南伝12 p.059) ⁽¹⁾：（舎衛城の祇樹給孤独園）

（天）「何者を殺して楽しく寝、悲しまないか。ゴータマは、どんな1法の殺害を讃えるのか」（偈文）〔質問〕

（世尊）「忿（kodha）を殺して楽しく寝、忿を殺して悲しまず。天よ（devate）、聖者は忿の殺害を讃える」⁽²⁾（偈文）

(1) 品の冒頭に別立てして「傍らに立ったその天（sā devatā）が世尊に偈をもって言った」とされている。品に含まれるすべての経に適用されるべきものと判断した。ただし仏在処は示されていないので、前品が省略されているものと判断した。

(2) SN.002-001-003 (vol. I p.047、南伝12 p.078) に同一偈あり。ここでは天の名はマーガ天子（Māgha devaputta）＝摩伽天子＝摩佉天子とされている。対応漢訳はそこに紹介する。

なおSN.011-003-001 (vol. I p.237、南伝12 p.411) にも同一偈がある。天は帝釈天である。なお「天よ（devate）」「阿修羅の征服者よ（Vatrabhū＝帝釈天）」と呼びかける言葉は「ヴァーサヴァよ（Vāsava＝帝釈天）」である。この対応経は次の経とすることができるともかもしれない。

『雑阿含』1116（大正02 p.295中、国訳03 p.134）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき晨朝に釈提桓因が一面を輝かせて現れ、「何を殺せば安穩を得、憂いなきを得、瞿曇の讚嘆するところとなるか」（偈文）と尋ねた。世尊は「兇悪の瞋恚を害せば安穩の眠を得、兇悪の瞋恚を害せば心憂畏無きを得、苦を滅する者は賢聖の称赞するところとなる」（偈文）と説かれた。釈提桓因は礼してから没した。

SN.001-008-002 (vol. I p.041、南伝12 p.060)：（舎衛城の祇樹給孤独園）

（天）「何が車の標識で、何が火の標識、何が王国の標識で、何が婦人の標識か」（偈文）〔質問〕

（世尊）「幡が車の標識で、煙が火の標識、王が王国の標識で、夫が婦人の標識である」（偈文）

『雑阿含』1022（大正02 p.266中、国訳03 p.286）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に天子が一面を輝かせて現れ、「どのようにして車乗を知り、どのようにして火を知り、どのようにして国土を知り、どのようにして妻婦を知るか」（偈文）と尋ねた。世尊は「幢蓋を見て車乗を知り、煙を見て火を知り、王を見て国土を知り、夫を見て妻婦を知る」（偈文）と説かれた。（※）その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』249（大正02 p.461中）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に1天が一面を輝かせて現れ、「何をもって王車を知り、何をもって火を知り、何をもって国を知り、何をもって女人を知るか」（偈文）と尋ねた。世尊は「幢をもって王車を知り、烟をもって火を知り、主をもって国を知り、夫をもつ

て女人を知る」(偈文)と説かれた。(※)その天は歡喜して去った。

SN.001-008-003 (vol. I p.042、南伝 12 p.060) : (舎衛城の祇樹給孤独園)

(天)「この世の最上の富とは何か、何物を修めて安樂を得るか、何物が味の最上で、どのような生活が最勝か」(偈文) [質問]

(世尊)「この世の最上の富は信であり、よく法を修めて安樂を得、眞実が味の最上で、智慧の生活が最勝である」(偈文)

『雜阿含』1013 (大正 02 p.264 下、国訳 03 p.281) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に**1天子**が一面を輝かせて現れ、「何物が上士の資材であり、どのように修して安樂を得、何が最上の味で、何が衆中の第1寿であるか」(偈文)と尋ねた。世尊は「信樂が上士の資材であり、正法を修して安樂を得、眞諦の妙説が最上の味で、賢聖の智慧が第1の寿である」(偈文)と説かれた。(※)その天子は礼してから没した。

『別訳雜阿含』240 (大正 02 p.460 上) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に**1天**が一面を輝かせて現れ、「人の財は何が勝れ、どんな善が樂報を得、味の最勝は何で、寿の最勝は何か」(偈文)と尋ねた。世尊は「人の財中で信が勝れ、善行を修して樂報を得、味の最勝は実語で、寿の最勝は慧命である」(偈文)と説かれた。(※)その天は歡喜して去った。

SN.001-008-004 (vol. I p.042、南伝 12 p.060) : (舎衛城の祇樹給孤独園)

(天)「何が生じるものの最上であり、何が降るものの最上であり、何が歩き回るものの最上で、何が語るものの最上か」(偈文) [質問]

(他の天)「種子が生じるものの最上であり、雨が降るものの最上であり、雌牛が歩き回るものの最上で、子が語るものの最上である」(偈文)

(世尊)「明が生じるものの最上であり、無明が降るものの最上であり、サンガが歩き回るものの最上で、ブツダが語るものの最上である」(偈文)

『雜阿含』1008 (大正 02 p.263 下、国訳 03 p.277) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に**天子**が一面を輝かせて現れ、「地より生ずる衆生のなかで何が最勝であり、空より墮ちてくるものの中で何が最勝であり、祈禱されるものの中で何が最勝であり、言説の中で何が最勝か」(偈文)と尋ねた。**他の天子**が「地より生ずる衆生で五穀が最勝であり、空より墮ちてくるものの中で種子が最勝であり、牛が資産の中で最勝であり、愛子の所説が言説の中で最勝である」(偈文)と誦した。世尊は「下より生ずる衆生のなかで三明が最勝であり、空より墮ちてくるものの中でまた三明が最勝であり、賢聖の弟子僧が師依の最勝であり、如来の所説が諸説の中で最勝である」と説かれた。(※)その天子は礼してから没した。

『別訳雜阿含』234 (大正 02 p.459 上) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき中夜に**1天**が一面を輝かせて現れ、「生じるものの最勝は何か、地に入るものの最勝は何か、種子は何が勝れ、擲種は誰が勝れるか」(偈文)と尋ねた。**他の天子**が「苗稼が生じるものの最勝であり、子が地に入るものの最勝であり、擁護が牛の中で勝れ、児が擲種のなかで勝れる」と答えた。世尊は「明が生じるのが苗

のなかの最勝であり、無明の滅が勝れ、仏に親近供養するのが擲種僧の最勝である」
(偈文) と説かれた。(※) その天は歓喜して去った。

SN.001-008-005 (vol. I p.042、南伝 12 p.061) : (舎衛城の祇樹給孤独園)

(天) 「道 (maggā) は種々に説かれているのになぜ多くの方は恐れるのか。智慧者
瞿曇よ、何に立てば恐れはないか」 (偈文) [質問]

(世尊) 「語と意と身に悪をなさず、信あればあの世で恐れはない」 (偈文)

『雑阿含』 1315 (大正 02 p.361 中、国訳 03 p.361) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に梅檀天子が一面を輝かせて現れ、「どこに住し何を学べば来世に悪と遭遇しないか」 (偈文) と尋ねた。世尊は「身口意を摂持し、三悪法を造らず、居家に処在して信もて財と法施を恵み、法を以て一切を立てれば他の世の恐れ無し」 (偈文) と答えられた。梅檀天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』 314 (大正 02 p.479 下) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき梅檀天子が一面を輝かせて現れ、「どこに止住し、どんな法教を習えば後世に恐れず、善の果報を得るか」 (偈文) と尋ねた。世尊は「身口意に悪不善を断ち、居家に住して布施し信心して受戒すれば後世に恐れはない」 (偈文) と答えられた。梅檀天子は歓喜して天宮に還った。

SN.001-008-006 (vol. I p.043、南伝 12 p.061) : (舎衛城の祇樹給孤独園)

(天) 「何が老い、何が老いないのか。何が非道といわれるのか。世尊に聞くためにわれわれは来た」 (偈文) [質問]

(世尊) 「色は老い、氏姓は老いない。貪欲は非道である」 (偈文)

SN.001-008-007 (vol. I p.043、南伝 12 p.062) : (舎衛城の祇樹給孤独園)

(天) 「何が世間の主で、何が最上の器であり、何が剣の鏃で、何が地獄を作るか」
(偈文) [質問]

(世尊) 「勢力は世間の主で、女人は最上の器である。忿 (kodhā) が剣の鏃で、盜賊が地獄を作る」 (偈文)

SN.001-008-008 (vol. I p.044、南伝 12 p.063) : (舎衛城の祇樹給孤独園)

(天) 「利を求める者は何を与えないか。人は何を捨てず、いかなる善を放ち、いかなる悪を放つべきでないか」 (偈文) [質問]

(世尊) 「人は利を求めて自己を与えず、自己を捨てず、よき語を放ち、悪しき語を放つべきでない」 (偈文)

SN.001-008-009 (vol. I p.044、南伝 12 p.063) : (舎衛城の祇樹給孤独園)

(天) 「何が糧食を包み、何が富の住み家か。何が人を苦しめ、何が捨て難く、何に縛られるか」 (偈文) [質問]

(世尊) 「信仰が糧食を包み、吉祥が富の住み家である。欲望 (icchā) が人を苦しめ、欲望が捨て難く、欲望に縛られる」 (偈文)

SN.001-008-010 (vol. I p.044、南伝 12 p.064) : (舎衛城の祇樹給孤独園)

(天) 「何が世間の光炎で、何物が眠らず、何が仕事の共同者で、威儀路 (iriyāpatha) は何か」 (偈文) [質問]

(世尊) 「智慧が世間の光炎で、正念が眠らず、牛が仕事の共同者で、威儀路は畔である」 (偈文)

SN.001-008-011 (vol. I p.044、南伝 12 p.065) : (舎衛城の祇樹給孤独園)

(天) 「この世において諍わない者は誰か、誰の生活は滅びないか。誰が自由人であり、クシャトリヤの尊敬を受けるのは誰か」 (偈文) [質問]

(世尊) 「沙門はこの世において諍わず、沙門の生活は滅びず、沙門は自由人であり、沙門は生れ卑しくともクシャトリヤの尊敬を受ける」 (偈文)

[2] 次にパーリの SN.001 *Devatā-saṃyutta* (天相応) に含まれる経と同じ形式・内容を持つ、パーリにはなく漢訳にしか見いだされない経を紹介する。同じ形式・内容を持つとは、固有名詞を有しない「神 (devatā)」が現れて、釈尊と偈文をもって対話する経のことである。

まず『雑阿含』の経とこれに対応する『別訳雑阿含』があればこれを掲げ、最後に『別訳雑阿含』にしか見いだされない経を掲げる。

『雑阿含』577 (大正 02 p.153 下、国訳 03 p.289) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に一天子が一面を輝かせて現れ、「一切の鉤鏤を断じて牟尼には家はない。沙門が教化に著するのはよくない」 (偈文) と誦した。世尊は「善逝は哀愍するが故に常に衆生を教授す、衆生を哀愍するはこれ法に応ずる所なり」 (偈文) と説かれた。(※) 天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』162 (大正 02 p.435 上) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき1天が一面を輝かせて現れ、「よく家業を捨てて一切法を断じ、常に他に教授するのは善沙門とは名づけない」 (偈文) と誦した。世尊は「夜叉よ、苦難の人に会うとすれば有智の人は彼を愍む。善逝も大悲をもって安慰し教導する」 (偈文) と答えられた。(※) 天は歡喜して宮に還った。

『雑阿含』603 (大正 02 p.161 上、国訳 03 p.313) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に一天子が一面を輝かせて現れ、「如何に諸流を渡るか」 (偈文) と尋ねた。世尊は「信は能く諸流を度り、不放逸は海を度り、精進は能く苦を除き、智慧は清浄を得しむ」⁽¹⁾ (偈文) と説かれた。(※) 天子は礼してから没した。

(1) この偈は SN.010-010 (vol. I p.213、南伝 12 p.371) の一部に相当する。

『雑阿含』1005 (大正 02 p.263 上、国訳 03 p.275) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に天子が一面を輝かせて現れ、「何を人の物とし、何を第一の伴と名づけ、何をもって活命し、衆生は何を依とするか」 (偈文) と尋ねた。世尊は「田宅を人の物とし、賢妻を第一の伴と名づけ、飲食をもって活命し、業を衆生の依とする」 (偈文) と説かれた。(※) その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』231（大正02 p.458中）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に1天が一面を輝かせて現れ、「何が義理において勝れ、誰をもっともよい親友となし、衆生は何によって生き、何をなして聚劍を得るか」（偈文）と尋ねた。世尊は「種田を義理となし、妻をもっともよい親友となし、衆生は熱苗によって生き、よく動作して聚劍を得る」（偈文）と説かれた。（※）その天は歡喜して去った。

『雑阿含』1012（大正02 p.264下、国訳03 p.280）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に一天子が一面を輝かせて現れ、「何が世間を隠しているか。誰が衆生を憶い、誰が衆生の幢か」（偈文）と尋ねた。世尊は「無明が世間を覆い、愛は衆生を縛り、我慢が衆生の幢である」（偈文）と説かれた。さらに天子は「誰が覆いなく、誰が愛結なく、誰が幢を立てないか」（偈文）と尋ねた。世尊は「如来は心解脱し、無明に覆われず、愛の結縛なく、我慢の幢を立てない」（偈文）と説かれた。（※）天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』239（大正02 p.459下）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき一天が一面を輝かせて現れ、「何が世間を迷わせ、何が和合させ、何が衆生を汚し、何が幢を立てるか」（偈文）と尋ねた。世尊は「無明が世間を迷わせ、愛は和合させ、瞋恚は衆生を汚し、我慢は幢を立てる」（偈文）と説かれた。天子はさらに「誰に蓋障なく、誰が欲を断じ、誰が染汚を出、よく大幢を倒すか」（偈文）と尋ねた。世尊は「如来に蓋障なく、正智が解脱を得、如来が欲を断じ、塵垢を出、我慢の幢を倒す」（偈文）と説かれた。（※）天は歡喜して天宮に還った。

『雑阿含』1279（大正02 p.352上、国訳03 p.328）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に一天子が一面を輝かせて現れ、「どのように負処（議論に敗北すること）を知るのか」（偈文）と尋ねた。世尊は「勝処は知るを得易く、負処を知ることもまた易し、楽法は勝処となし、毀法は負処となす。……」（偈文）と説かれた。（※）天子は礼してから没した。

『雑阿含』1280（大正02 p.352下、国訳03 p.330）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に一天子が一面を輝かせて現れ、「誰が屈下すれば屈下し、誰が高挙すれば随挙し、云何んが童子戯るや」（偈文）と尋ねた。世尊は「愛下れば則ち随って下り、愛挙れば則ち随って挙る、愛戯の愚夫における、童の塊もて相擲つが如し」（偈文）と説かれた。（※）天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』278（大正02 p.471上）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき一天が一面を輝かせて現れ、「誰を敬順と名づけ、誰を陵邈と名づけるか、誰を嬰愚の戯れで小兒弄士の如しとなすか」（偈文）と尋ねた。世尊は「男子は敬順され、女人は陵邈される、女人は嬰愚の戯れで小兒弄士の如しとなす」（偈文）と説かれた。（※）天子は歡喜して天宮に還った。

『雑阿含』1282（大正02 p.353上、国訳03 p.331）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に一天子が一面を輝かせて現れ、「どのようにす

れば名称や財などを得られるか」（偈文）と尋ねた。世尊は「持戒は名称を得、布施は大財を得、真実徳流聞し、恩恵は善友を得」（偈文）と説かれた。（※）天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』280（大正02 p.471中）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき一天が一面を輝かせて現れ、「何を名称を得るとなし、何を財業を得るとなし、何を称誉を得るとなし、何を親友を得るとなすか」（偈文）と尋ねた。世尊は「持戒を名称を得るとなし、布施を財業を得るとなし、実語を称誉を得るとなし、善施の衆は皆親しむ」（偈文）と説かれた。（※）天子は歡喜して天宮に還った。

『雑阿含』1283（大正02 p.353上、国訳03 p.332）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に一天子が一面を輝かせて現れ、「人は等しく財を得てもどうして優劣があるのか」（偈文）と尋ねた。世尊は「財物を得已らば、当に四分を作し応ずべし。一分もて自ら食に用い、二分もて生業を営み、余の一分は蔵密し以て貧乏を擬せよ。如法に財を集め、如法に用いよ」（偈文）と説かれた。（※）天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』281（大正02 p.471中）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき一天が一面を輝かせて現れ、「何が人として生き、明瞭に見、宝を集めるのか」（偈文）と尋ねた。世尊は「まず技能を学び、次に財宝を集め、これを四分して、一分を衣食に使い、二分を宮作事に使い、一分を窮乏に具える。……」（偈文）と説かれた。（※）天子は歡喜して天宮に還った。

『雑阿含』1284（大正02 p.353中、国訳03 p.333）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき釈尊は比丘らに、「過去世の時、拘薩羅国に**龜牛と名づくる弾琴人**がいた。彼が拘薩羅林にいたとき**6人の廣大天宮の天女**⁽¹⁾が現れ、彼の琴の音に合わせて天女たちが歌舞し、次のような偈を誦した。

第1天女「勝妙の衣を施せば天女宮中の勝なるに生まれる」（偈文）

第2天女「勝妙の香を施せば天女宮中の勝なるに生まれる」（偈文）

第3天女「食を施せば天女宮中の勝なるに生まれる」（偈文）

第4天女「婢使となり盗まず、味を節し、貧人を救えば天女宮中の勝なるに生まれる」（偈文）

第5天女「人の婦となり、舅姑の虐げを耐え忍び従順であれば天女宮中の勝なるに生まれる」（偈文）

第6天女「比丘比丘尼から正法を聞き齋戒を受ければ天女宮中の勝なるに生まれる」（偈文）

これを聞いて弾琴人は、「私はこの拘薩羅林中で天女に会うことができ、その説くを聞くことができた。ますます善業を積もう。そうすれば天上に生まれることができるであろう」（偈文）と誦した、と。

この所説を聞いて比丘らは歡喜奉行した。

(1) 廣大天宮は固有名詞ではなく「廣大なる天宮」という意に解釈した。次の『別訳雑阿含』282を参照。

『別訳雑阿含』282（大正02 p.472上）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき世尊は比丘らに次のような話をされた。昔、拘薩羅国に俱毘羅という弾琴人があり、琴を弾ずる代償に六人の天女は次のような偈を誦した。

第1天女「上衣を施せば人中最勝、天中最勝に生まれることができる」（偈文）

第2天女「上味を施せば人中最勝、天中最勝に生まれることができる」

第3天女「妙香を施せば人中最勝、天中最勝に生まれることができる」

第4天女「人中にあるとき舅姑に仕えれば天身を得て最勝となることができる」（偈文）

第5天女「人中にあるとき婢使に仕えれば天身を得て最勝となることができる」（偈文）

第6天女「人中にあるとき比丘比丘尼を見て歡喜心を生じ、彼の説法を聞けば天身を得て最勝となることができる」（偈文）

そのとき弾琴人は、「私は今薩羅林を楽しみ、天女の電光のごとく輝くのを見た。還ったら功德を作そう」（偈文）と誦した、と。

比丘らは世尊の所説を歡喜奉行した。

*この経は「天相應」に対応させるべき経ではないかもしれない。ただし一連の経中にあるから、参考のために削除せずこのまま残す。

『雑阿含』1285（大正02 p.354上、国訳03 p.335）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に天子が一面を輝かせて現れ、「何法が起こるを滅し、何法の起こるを防護し、何法を離れ、何を等観すれば樂を得るか」（偈文）と尋ねた。世尊は「瞋恚が起こるを滅し、食の起こるを防護し、無明を離れ、真諦を等観すれば樂を得る」（偈文）と説かれた。（※）その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』283（大正02 p.472下）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき1天が一面を輝かせて現れ、「何が起これば必ず滅し、何が不生を遮し、何が怖れを捨し、何が法樂を生じるか」（偈文）と尋ねた。世尊は「瞋恚が起こって滅し、食欲が不生を遮し、無明を捨てて怖れなく、証滅を樂となす」（偈文）と説かれた。（※）その天は歡喜して去った。

『雑阿含』1286（大正02 p.354中、国訳03 p.336）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に天子が一面を輝かせて現れ、「人は放逸を行じるとも愚痴を離れる。不放逸ならば諸漏を尽くすを得る」（偈文）と誦した。世尊は「世間の衆事が欲ではない。心法の覚想が気ままであることそれが欲である。信はその名称を増し、命終して生天を得る。これを名づけて比丘という」（偈文）と説かれた。（※）その天子は礼してから没した。

『雑阿含』1287（大正02 p.354下、国訳03 p.336）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に天子が一面を輝かせて現れ、「いかなる人と同処し、誰と事を共にし、どんな人の法を知るのが勝れているか」（偈文）と尋ねた。世尊は「正士と同処し、正士と事を共にし、正士の法を知るのが勝れている」（偈文）と説かれた。（※）その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』285（大正02 p.473上）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき天が一面を輝かせて現れ、「誰とともに止住し、誰に親近し、誰から法を受けるべきか」（偈文）と尋ねた。世尊は「善人とともに止住し、善者に親近し、彼から法を受けるべきである」（偈文）と説かれた。（※）その天は歡喜して去った。

『雑阿含』1290（大正02 p.355下、国訳03 p.340）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に一天子が一面を輝かせて現れ、「広きは地を過ぐるなく、深きは海を踰ゆるなく、高きは須弥を過ぐるなく、大士は毘紐を過ぎるなし」（偈文）と誦した。世尊は「広きは愛を過ぐるなく、深きは腹を踰ゆるなく、高きは憍慢を過ぐるなく、大士は仏に勝るなし」（偈文）と説かれた。（※）天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』288（大正02 p.474上）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき一天が一面を輝かせて現れ、「大地は廣大無辺であり、海は深く、須弥は高くて喩えようがない。誰が那羅延のごとく無比であるか」（偈文）と尋ねた。世尊は「愛は広く、腹は深く、憍慢は高い。唯だ仏のみ最勝にして比べるものがない」（偈文）と説かれた。（※）天子は歡喜して天宮に還った。

『雑阿含』1291（大正02 p.355下、国訳03 p.340）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に天子が一面を輝かせて現れ、「何が火に焼かれず、何が風に吹かれぬか。水災は大地を壊すが何が流されぬか、悪王・盜賊は人の財物を奪うが誰がその奪うところとならぬか。どんな珍宝は亡失しないか」（偈文）と尋ねた。世尊は「福は火に焼かれず風に吹かれぬ。水災は大地を壊すが福は流されぬ。悪王・盜賊は人の財物を奪うが福はその奪うところとならぬ。樂報の珍宝はついに亡失しない」（偈文）と説かれた。（※）その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』289（大正02 p.474中）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき中夜に一天が一面を輝かせて現れ、「何ものが火に焼かれず、旋嵐に壊されぬか。何ものが大洪水によって浸されず、どんな財宝を王賊は奪わぬか」（偈文）と尋ねた。世尊は「福聚は火に焼かれず、旋嵐にも壊されず、大洪水によって浸されず、王賊も奪わぬ」（偈文）と説かれた。（※）その天は歡喜して宮に還った。

『雑阿含』1292（大正02 p.356上、国訳03 p.341）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に天子が一面を輝かせて現れ、「誰が資糧をもち、誰が来るのを智慧者は喜ぶか」（偈文）と尋ねた。世尊は「信じる者は資糧をもち、沙門が来るのを智慧者は喜ぶ」（偈文）と説かれた。（※）その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』290（大正02 p.474中）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に一天が一面を輝かせて現れ、「誰が曠路を具し、遠行の資糧となるものは何か。何に親近すれば智慧者は喜ぶか」（偈文）と尋ねた。世尊は「信を遠行の資糧となし、沙門に親近すれば智慧者は喜ぶ」（偈文）と説かれた。（※）そ

の天は歡喜して宮に還った。

『雜阿含』1293（大正 02 p.356 上、国訳 03 p.342）：あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に一天子が一面を輝かせて現れ、「最も難得なるものは何か」（偈文）と尋ねた。世尊は「主となりて忍を行じ、財無くして施を欲し、難に遭いて法を行じ、富貴に遠離を修することである」（偈文）と説かれた。（※）天子は礼してから没した。

『別訳雜阿含』292（大正 02 p.474 下）：あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき一天が一面を輝かせて現れ、「仏は天人の師であり最勝である。難中の難は何か」（偈文）と尋ねた。世尊は「他において自在を得、触悩に対する忍辱がもっとも難しく、貧窮において布施し危険に遭って持戒するは難しく、盛年に欲を捨てて出家するは難しい」（偈文）と説かれた。（※）天子は歡喜して天宮に還った。

『雜阿含』1294（大正 02 p.356 中、国訳 03 p.344）：あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に一天子が一面を輝かせて現れ、「大力自在の樂は所求得ざるなし」（偈文）と誦した。世尊は「欲を去りたる者は、所欲のままに得る者よりも樂し」（偈文）と説かれた。（※）天子は礼してから没した。

『雜阿含』1295（大正 02 p.356 下、国訳 03 p.344）：あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に一天子が一面を輝かせて現れ、「車は何処から起り、誰が転ずるのか」（偈文）と尋ねた。世尊は「車は業より起り、心識は車を転じ、因に随って転至し、因壞すれば車は則ち亡ぶ」（偈文）と説かれた。（※）天子は礼してから没した。

『別訳雜阿含』293（大正 02 p.475 上）：あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき一天が一面を輝かせて現れ、「車は何を生となし、誰が運転し、何を損減となすか」（偈文）と尋ねた。世尊は「業が車を生み、心がそれを運転し、因が尽きれば滅する」（偈文）と説かれた。（※）天子は歡喜して天宮に還った。

『雜阿含』1296（大正 02 p.356 下、国訳 03 p.345）：あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に一天子が一面を輝かせて現れ、「今日、**拘屢陀王女の修波羅提沙**が子を生んだ」と告げた。釈尊は「これは不善である」と語られたので、天子が「人は子を生んで喜ぶ。父母が年取ったとき子が養う。どうして子を生むのが不善なのか」（偈文）と尋ねた。世尊は「子を生めば常に苦を得るに愚者は説いて樂という、この故に我説いていう、子を生むは善となすに非ず、善に非ざるを善像となし、念ずべからざるを念像す、実に苦の貌は樂に似て放逸に踐踏せらるるなり」（偈文）と説かれた。（※）天子は礼してから没した。

『別訳雜阿含』294（大正 02 p.475 上）：あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき一天が一面を輝かせて現れ、「**須多蜜奢鋤陀女**が子を生んだとき、不善と言われた。これは善ではないのか」（散文）と言い、「子が生まれるのは樂で

あり欣慶である。父母は年老いる、なぜ不善なのか」（偈文）と尋ねた。世尊は「子供を生めば必ずや別離がある。これは苦であるから不善というのである」（偈文）と説かれた。（※）天子は歡喜して天宮に還った。

『雜阿含』1297（大正 02 p.357 上、国訳 03 p.346）：あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に一天子が一面を輝かせて現れ、「数所の数とは何か。数の隠れずとは何か。数中の数とは何か」（偈文）と尋ねた。世尊は「仏法は測量し難し、二流 (1) は顕わには現ぜず、若し彼の名及び色の滅尽し悉く余無くんば、是れを数所の数と名づく」（偈文）と説かれた。（※）天子は礼してから没した。

(1) 「国訳一切経」では、順流と逆流、即ち生死を輪廻することと生死を断じること、と註記している。

『別訳雜阿含』295（大正 02 p.475 中）：あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき一天が一面を輝かせて現れ、「何を思算といい、煩惱覆となさず、何を衆数を離れるとなすか」（偈文）と尋ねた。世尊は「よく計算するものは、二漏流転せず、名色長く滅す。これを衆数を離れると名づけ、数に覆されず、数を去る」（偈文）と説かれた。（※）天子は歡喜して天宮に還った。

『雜阿含』1298（大正 02 p.357 上、国訳 03 p.347）：あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に一天子が一面を輝かせて現れ、「地より重いものは何か、虚空より高いものは何か。風よりも速いものは何か。何者が草よりも多いか」（偈文）と尋ねた。世尊は「戒徳は地よりも重く、慢は虚空よりも高く、憶念は風よりも疾く、思想は草よりも多し」（偈文）と説かれた。（※）天子は礼してから没した。

『別訳雜阿含』296（大正 02 p.475 中）：あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき一天が一面を輝かせて現れ、「何物が地よりも重く、何物が空よりも高く、何物が風よりも速く、何物が草木よりも多いか」（偈文）と尋ねた。世尊は「持戒は地よりも重く、驕慢は空よりも高く、心念は風よりも早く、乱想は草木よりも多し」（偈文）と説かれた。（※）天子は歡喜して天宮に還った。

『雜阿含』1299（大正 02 p.357 中、国訳 03 p.347）：あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に一天子が一面を輝かせて現れ、「何を戒とし、何を威儀とし、どのように天に往生するか」（偈文）と尋ねた。世尊は「不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不兩舌、不惡口、不綺語、不貪欲、不瞋恚、不邪見（十善業道）が生天への路である（趣意）」（偈文）と説かれた。（※）天子は礼してから没した。

『別訳雜阿含』297（大正 02 p.475 下）：あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき一天が一面を輝かせて現れ、「どんな戒を守り、どんな威儀をなし、どんな功德を有し、どんな行いをし、どんな法を具足すれば天に生れるのか」（偈文）と尋ねた。世尊は「不殺生、……（十善業道）を修すれば、天に生れる」（偈文）と説かれた。（※）天子は歡喜して天宮に還った。

『別訳雑阿含』178（大正02 p.438中）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき一天が夜中に一面を輝かせて現れ、「縁攀するところがあれば安足処はない。深い流れの中で誰が沈没しないでいられるだろうか」（偈文）と尋ねた。世尊は「禁戒を持し、智と禪定を修すれば暴流を渡る」（偈文）と説かれた。（※）天子は歡喜して天宮に還った。

『別訳雑阿含』277（大正02 p.470中）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき一天が一面を輝かせて現れ、「何が他を輕蔑するといひ、他を輕蔑しないといひのか。何が他に輕蔑される主因か」（偈文）と尋ねた。世尊は「樂法を恭敬と名づけ、慢法を不恭と名づける。善知識に近づかないことを不恭のはじめと名づける。……」（偈文）と説かれた。（※）天子は歡喜して去った。

『別訳雑阿含』284（大正02 p.473上）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき一天が一面を輝かせて現れ、「五塵に到るといへども貪欲をなすとは名づけず。欲は世間を縛するが健者は解脱を得る」（偈文）と誦した。世尊は「欲性は無常であり、斷滅が悟りである。信を伴にすれば名称が增長し死後天に生まれる」（偈文）と説かれた。（※）その天は歡喜して去った。

『別訳雑阿含』291（大正02 p.474下）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき一天が中夜に一面を輝かせて現れ、「樂は思念され、快さは願われ、樂中で欲樂が最勝である」（偈文）と誦した。世尊は「樂は思われず、苦は願われ、人が思願を棄てればこれを最勝となす」（偈文）と説かれた。（※）天子は歡喜して天宮に還った。

【2】SN.002 *Devaputta-saṃyutta*（天子相應）に収録される経と

その対応漢訳経

次にSN.002「天子相應」（*Devaputta-saṃyutta*）に収録される経とこれに対応する漢訳経の概要を紹介する。その要領はすべて前節のSN.001「天相應」にならう。ただしこの相應に収められている経には原則として「婆羅門を見た」の偈は存しない。例外的に存する場合は省略せずにその偈文（概要）を掲げる。

なお単に神と釈尊の問答に終らず、ストーリーのあるものはそのストーリーの概要をも記す。またここに登場する神は過去世に人間であったときの固有名詞を引きずっており、この過去世の人間時代の履歴を推測させる記述があればその部分に破線の下線を付した。神の現れ方は「天相應」と同じである。

なお「神」を表わす言葉はパーリでは‘*devaputta*’であるが、概要では「天子」と訳した。『雑阿含』と『別訳雑阿含』は元のテキスト通りである。

【1】SN.002「天子相應」（*Devaputta-saṃyutta*）に収録される経とこれに対応する漢

訳経の概要

SN.002-001-001 (vol. I p.046、南伝 12 p.077) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜更けに**カッサパ天子** (Kassapa devaputta) が一面を輝かせて現れ、「世尊は比丘に教えを説かれましたが、我らには開示されませんでした」(散文) といった。そこで世尊は「それについて詳らかにしなさい」(散文) といわれた。天子は「よく説かれたものを修めよ、沙門の行と心の寂靜を修せよ」(偈文) と誦した。世尊は是認された (samanuñño sathā ahoṣi)。天子は世尊を礼して没した。

『雑阿含』1317 (大正 02 p.361 下、国訳 03 p.362) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に**迦葉天子**が一面を輝かせて現れ、「世尊よ、私は今比丘と比丘の功德を説こうと思います」(散文) といった。世尊はそれを許された。天子は「比丘は正念を修し、その心善く解脱す。昼夜に勤めて心染著するところなし」(偈文) と誦した。世尊は「善哉」と褒められた。その天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』316 (大正 02 p.480 上) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき**迦葉天子**が一面を輝かせて現れ、「比丘よ、私は今比丘の勝利を説こうと思います」(散文) と言った。世尊は許された。天子は「比丘はよく念を具し、心に善解脱を得て一切有を捨てる。これが比丘の勝利功德である」(偈文) と誦して、歡喜して天宮に還った。

*カッサパ天子 (迦葉天子) はこの偈と次の偈にしか登場しない。

SN.002-001-002 (vol. I p.046、南伝 12 p.078) : 舎衛城の園林 (Sāvatthiyaṃ ārāme)。傍らに立った**カッサパ天子**は、「比丘もし禪思して心解脱し、世の興廢を知って執着なければその果を得ることができる」(偈文) と誦した。

『雑阿含』1318 (大正 02 p.361 下、国訳 03 p.362) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に**迦葉天子**が一面を輝かせて現れ、「世尊よ、私は今比丘と比丘の所説を説こうと思います」(散文) といった。世尊はそれを許された。天子は「比丘が正念を守り、心がよく解脱し、塵垢を離れば心に憂苦はない」(偈文) と誦した。世尊は「如是如是」(散文) と褒められた。天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』317 (大正 02 p.480 上) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に**迦葉天**が一面を輝かせて現れ、「比丘大徳よ、私は今比丘所得の功德を説こうと思います」(散文) と言った。世尊は許された。天子は「比丘が念を具し、心がよく解脱し、諸法の空を知る。これを比丘と名づけ、有を離れて涅槃を得る」(偈文) と誦し、歡喜して天宮に還った。

SN.002-001-003 (vol. I p.047、南伝 12 p.078) : 舎衛城の園林。そのとき**マーガ天子** (Māgha devaputta) が夜更けにジェータ林の一面を輝かせて現れ、「何物を殺して楽しく寝、何物を殺して悲しまず。どの一法をゴータマは讚えるか」(偈文)

と尋ねた。世尊は「忿を殺して楽しく寝、忿を殺して悲しまず。阿修羅の征服者よ (Vatrabhū=帝釈天)、忿の殺害を聖者は讃える」(偈文)と説かれた⁽¹⁾。

- (1) SN.001-008-001 (vol. I p.041、南伝 12 p.059) に同一偈あり。ただしここでは「阿修羅の征服者よ (Vatrabhū)」の代りに「天よ (devate)」とされている。同じ偈が SN.011-003-001 (vol. I p.237、南伝 12 p.411) にも見いだされるが、これについては SN.001-008-001 に触れた。なおマーガ天子 (摩伽天子、摩佉天子) はこの偈にしか登場しない。

『雑阿含』1309 (大正 02 p.360 中、国訳 03 p.357) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に**摩伽天子**が一面を輝かせて現れ、「何を殺して安眠を得、何を殺して喜樂を得るか。何を殺すを瞿曇は賛嘆するか」(偈文)と尋ねた。世尊は「瞋恚を殺して安眠を得、瞋恚を殺して喜樂を得る。瞋恚を殺すを瞿曇は賛嘆する」(偈文)と説かれた。天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』308 (大正 02 p.478 下) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき**摩佉天子**が一面を輝かせて現れ、「誰が安眠を害し、誰が無憂を害し、どんな一法の滅を聖者は賛嘆するか」(偈文)と尋ねた。世尊は「瞋が安眠を害し、瞋が無憂を害し、瞋恚の一法の滅を聖者は賛嘆する」(偈文)と説かれた。天子は歡喜して天宮に還った。

SN.002-001-004 (vol. I p.047、南伝 12 p.079) : (舎衛城の園林)

傍らに立った**マーガダ天子** (Māgadha devaputta) は、「どのような光明があつてこの世を照らすのか」(偈文)と尋ねた。世尊は「世には四つの光がある。昼には太陽、夜には月、時には火が日夜に、正覚者は最勝の火であつて無上の光でありこの世を照らす」(偈文)と説かれた⁽¹⁾。

- (1) SN.001-003-006 (vol. I p.015、南伝 12 p.021) に同一偈あり。ここでは天に固有名詞は与えられていない。なおマーガダ天子 (弥耆迦天子、弥佉天子) はこの偈にしか登場しない。

『雑阿含』1310 (大正 02 p.360 中、国訳 03 p.357) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に**弥耆迦天子**が一面を輝かせて現れ、「世にはいくつの明照があり、何が最勝か」(偈文)と尋ねた。世尊は「三種の光明がある。日が昼に照り、月が夜を照らし、灯火は昼夜を照らし、仏の光明を最勝となす」(偈文)と説かれた。天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』309 (大正 02 p.478 下) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき**弥佉天子**が一面を輝かせて現れ、「何が世間の中で無上第一の照明か」(偈文)と尋ねた。世尊は「世間には日月火という三つの照明がある、天上、人間の中では仏が無上の明である」(偈文)と説かれた。天子は歡喜して天宮に還った。

SN.002-001-005 (vol. I p.047、南伝 12 p.079) : (舎衛城の園林)

そのとき夜更けに**ダーマリ天子** (Dāmali devaputta) がジェータ林の一面を輝かせて現れ、「精励にして倦むことなく、愛欲を捨てて、有を欲しないのが婆羅門の行である」(偈文)と誦した。世尊は「婆羅門には行なし。すでになすべきことをなし終つ

たからである。漏の尽きた婆羅門は彼岸に立って運び去られることはない」（偈文）と説かれた。

『雑阿含』1311（大正02 p.360下、国訳03 p.358）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に**陀摩尼天子**が一面を輝かせて現れ、「事なつた婆羅門は愛欲を断除して後身を受けるを求めない」（偈文）と誦した。世尊は「婆羅門は事なし。所作すでになし、すでに彼岸に至っている。涅槃には所依なし」（偈文）と説かれた。天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』310（大正02 p.478下）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき**曇摩尸天子**が一面を輝かせて現れ、「婆羅門は三有の欲結を断じ、有を求めない。何を所作となすか」（偈文）と尋ねた。世尊は「婆羅門には所作なし。曇摩よ、あなたはすでに漏を尽し、最後身に住して生死の海を渡っている」（偈文）と説かれた。天子は歡喜して天宮に還った。

*ダーマリ天子（陀摩尼天子、曇摩尸天子）はこの偈にしか登場しない。

SN.002-001-006 (vol. I p.048、南伝12 p.080) : (舎衛城の園林)

傍らに立った**カーマダ天子** (Kāmada devaputta) は、「それはなし難く、きわめてなし難い」（偈文）と誦した。世尊は「カーマダよ、彼らはなし難きをなした。学あり、戒に住し、出家者には安樂をもたらず知足がある」（偈文）と説かれた。天子は「その知足は得難い」（偈文）と誦した。世尊は「彼らは得難きものを得ている」（偈文）と説かれた。……

『雑阿含』1313（大正02 p.361上、国訳03 p.359）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に**迦摩天子**が一面を輝かせて現れ、「はなはだ難しい」（散文）と言った。世尊は「学びは難しいけれども、戒を具し、非家に出家して閑居して寂靜なるは楽しい」（偈文）と説かれた。天子は「寂靜は得難い」（散文）と言った。世尊は「得難い学を得、戒を具足し、昼夜に意の樂を修習せよ」（偈文）と説かれた。……天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』312（大正02 p.479上）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき**迦黙天子**が一面を輝かせて現れ、「何をなし難い」（散文）とするか、と質問した。世尊は「学はなし難い。戒定を具足し、衆縁の努めを離れば靜にして楽しい」（偈文）と説かれた。天子は「靜黙は難しい」（散文）と言った。世尊は「迦黙よ、あなたは今得難きを得ようとしている。昼夜に定意を修せば必ずや靜黙に安んずることができる」（偈文）と説かれた。……天子は歡喜して天宮に還った。

*カーマダ天子（迦摩天子、迦黙天子）はこの經にしか登場しない。

SN.002-001-007 (vol. I p.048、南伝12 p.081) : (舎衛城の園林)

傍らに立った**パンチャーラチャンダ天子** (Pañcālacaṇḍa devaputta) は、「大智ある人は障碍の中にあっても余地を知る。牟尼なるブツダは禪定を知っておられる」（偈文）と誦した。世尊は「彼らは障碍の中にあっても涅槃に至る道を知っている。正念を得る人は正しく心が寂靜である」（偈文）と説かれた。

『雜阿含』1305（大正 02 p.358 中、国訳 03 p.352）：あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に**般闍羅健天子**が一面を輝かせて現れ、「憤乱（悩ませること）の処所にも点慧の者は能く覚る。牟尼の思惟の力である」（偈文）と誦した。世尊は「憤乱にも法を了知し、正覚して涅槃を得る。もし正念を得れば一心よく正受す」（偈文）と説かれた。天子は礼してから没した。

『別訳雜阿含』304（大正 02 p.477 上）：あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき**般闍羅天子**が一面を輝かせて現れ、「在家は衆務に纏われる、出家ははなはだ寛博である。牟尼は禅より出でて廓然大悟し、大智を顕す」（偈文）と誦した。世尊は「衆務に纏われてもよく法を得ることができる。念力を具すれば定を得て明智あって涅槃を証することができる」（偈文）と説かれた。天子は歡喜して天宮に還った。

*パンチャーラチャンダ天子（般闍羅健天子、般闍羅天子）はAN.009-005-042（vol.IV p.449、南伝 22 上 p.157）にも話題にあがる。あるときアーナンダはコーサンビーのゴーシタ園に住していた。そのときウダーインがアーナンダのもとにやって来て、パンチャーラ・チャンダという天子の唱えたこの偈（ただし若干の相違はある）を取り上げ、この偈の意味するところを質問したので、アーナンダは詳しく解説したとされている。

SN.002-001-008（vol. I p.049、南伝 12 p.082）：（舍衛城の園林）

そのとき元外道の師であった**ターヤナ天子**（Tāyana devaputta）がジェータ林の一面を輝かせて現れ、「婆羅門よ流れを断て、精進せよ、愛欲を滅せよ。作さないのは悪をなすより勝る。悪をなせば後に苦しむからである。善をなすは勝る。作して苦しむことなし。あたかも草を握ること悪ければ手を傷つけ、沙門の生活を悪しくなせば奈落に引かれるがごときである」⁽¹⁾（偈文）と誦して、世尊を礼して没した。

翌朝世尊は、比丘らにこのことを告げてその偈を復唱され、「この**ターヤナ天子**の偈を記憶せよ（pariyāpuṇātha）。この偈は義理を伴い、最初の梵行に属する」（散文）と説かれた。

(1) 『法句経』巻下（大正 04 p.570 上）参照

SN.002-001-009（vol. I p.050、南伝 12 p.084）：舍衛城に住された

（Sāvattthiyaṃ viharati）。そのとき**月天子**（Candimā devaputta=チャンディマー天子）は**阿修羅王ラーフ**（Rāhu asurinda）に捕われていた。月天子は世尊を憶念して、「ブッダに帰依します。あなたはすべての障碍から解脱している。私は障碍に落ちています。私の帰依処になってください」（偈文）と誦した。世尊はラーフに「月天子は今如来に帰依した。月を放せ。諸仏は世を憐れむ」（偈文）と説かれた。ラーフは月天子を解放した。

そのとき**ヴェーパチッティ**という**阿修羅**（Vepacitti asurinda）王は阿修羅王ラーフがチャンディマー天子を解放したのを見て、「ラーフよ、何を恐れて月を放したのか」（偈文）と問うた。ラーフは「私はブッダの偈を恐れた。もし月を解放しなければ頭破れて七分し、生きて安楽を得ることはできない」（偈文）と答えた。

『雑阿含』583 (大正 02 p.155 上、国訳 03 p.293) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。羅睺羅阿脩羅王は月天子をさえぎった。恐れた月天子は世尊のところに来て、「一切障を脱せられた如来に帰依します。阿修羅を解いてください」(偈文)と誦した。世尊は「毘盧遮那の清浄なる光明は顕れた。羅睺羅は月を捨てて還った」(偈文)と説かれた。

そのとき婆稚という阿修羅が現れ、羅睺羅阿脩羅王が月を捨てたので、「月を捨てるになぜこのように速いのか」(偈文)と問うた。羅睺羅は「瞿曇は呪偈を説いた。速やかに月を捨てずんば頭破れて七分し、死の苦しみを受けるだろう」(偈文)と答えた。月天子は世尊の所説を歡喜して礼をなして去った。

『別訳雑阿含』167 (大正 02 p.436 上) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき羅睺羅阿脩羅王は手によって月をさえぎった。恐れた月天子は世尊のところに来て、「一切処に解脱された如来に帰依します。羅睺羅から私を救ってください」(偈文)と誦した。世尊は「月は虚空にあって一切の闇を破し、世の灯となっている。羅睺羅よ放せ」(偈文)と説かれた。

そのとき跋羅蒲盧旃が月を解放した阿脩羅王のところに来て、「あなたはどのようにこんなに早く月を解放したのか」(偈文)と問うた。羅睺羅は「仏の説く偈を聞いた。もし月を捨てずんば頭破れて七分し、ついに安樂を得ることができない」(偈文)と答えた。

SN.002-001-010 (vol. I p.051、南伝 12 p.085) : (舎衛城)

そのとき日天子 (Suriya devaputta=スリヤ天子) は阿脩羅王ラーフに捕われた。日天子は世尊を憶念して、「ブッダに帰依します。あなたはすべての障碍から解脱している。私は障碍に落ちています。私の帰依処になってください」(偈文)と誦した。世尊はラーフに、「日天子は今如来に帰依した。日を放せ。諸仏は世を憐れむ」(偈文)と説かれた。ラーフは日天子を解放した。

そのときヴェーパチッティという阿修羅 (Vepacitti asurinda) 王が現れ、阿脩羅王ラーフがスリヤ天子を解放したのを見て、「ラーフよ、何を恐れて日を放したのか」(偈文)と問うた。ラーフは「私はブッダの偈を恐れた。もし月を解放しなければ頭破れて七分し、生きて安樂を得ることはできない」(偈文)と答えた。

SN.002-002-001 (vol. I p.051、南伝 12 p.087) : 舎衛城の園林

そのとき夜更けにチャンディマサ天子 (Candimasa devaputta) ⁽¹⁾ がジェータ林の一面を輝かせて現れ、「心を集中するのに巧みで禪定に入る者は蚊の患いなく行く獸のごとく平安に行く。不放逸で禪定に入る人は網を破った魚のごとく平安に行く」(偈文)と誦した。

(1) 註 (片山・相応部 1 p.239) によれば、この天子は「梵天界で涅槃を想う者」とされている。しかし対応漢訳では「月自在天子」とされているので、ここでは「月天子」と理解する。

『雑阿含』1303 (大正 02 p.358 中、国訳 03 p.351) : あるとき世尊は舎衛国祇樹

給孤独園に住された。そのとき後夜に**月自在天子**が一面を輝かせて現れ、「彼は当に究竟に至るであろう。蚊の草に依従するが如きである。彼は究竟に行くであろう。正念を得れば一心はよく正受する」（偈文）と誦した。世尊は「彼は彼岸に行くであろう。魚の網を決するがごとく禅定具足すれば喜樂を受ける」（偈文）と説かれた。天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』302（大正02 p.476下）：あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき**月自在天子**が一面を輝かせて現れ、「修禅は尽処に至る。草を食う鶏鹿の戒のように。棄樂を成就すれば四禅を得る」（偈文）と誦した。世尊は「禅を修すといえども生死の網の中にある。正念を具し独処に心慄怖であれば、鵠の網が出るがごときである」（偈文）と説かれた。天子は歡喜して天宮に還った。

* チャンディマサ天子（月自在天子）はこの偈にしか登場しない。

SN.002-002-002 (vol. I p.052、南伝12 p.088) : (舍衛城の園林)

傍らに立った**ヴェンドゥ天子** (Veṇḍu devaputta) は、「ゴータマの教えによって不放逸を学ぶ人は幸いなるかな」（偈文）と誦した。世尊は「私の説いた教えを守り、禅定に入って不放逸ならば死魔の領域に入ることはない」（偈文）と説かれた。

『雑阿含』1304（大正02 p.358中、国訳03 p.351）：あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に**毘瘦紐天子**が一面を輝かせて現れ、「如来に供養するものは歡喜常に増長し、正法律を欣樂して不放逸にして学に随う」（偈文）と誦した。世尊は「もしこの教えにおいて不放逸ならば魔の自在にしたがわぬ」（偈文）と説かれた。天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』303（大正02 p.477上）：あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき**毘紐天子**が一面を輝かせて現れ、「仏に親近すれば歡喜を得ない者はない。よく就学する者は不放逸を獲得する」（偈文）と誦した。世尊は「この教誡において不放逸ならば魔の便りを得ない」（偈文）と説かれた。天子は歡喜して天宮に還った。

* ヴェンドゥ天子（毘瘦紐天子、毘紐天子）は、DN.020 *Mahāsamaya-s.*（大會經 vol. II p.259、南伝07 p.286）において、迦毘羅城（Kapilavatthu）の大園林に集まった諸々の天の中の1人（Veṇhu deva）である。

SN.002-002-003 (vol. I p.052、南伝12 p.088) : あるとき世尊は王舍城迦蘭陀竹園 (Rājagaha Veluvana Kalandakanivāpa)に住された。そのとき夜更けに**ディーガラッティ天子** (Dīghalaṭṭhi devaputta) が一面を輝かせて現れ、「もし比丘が心の成就を望むなら、禅思し、心が解脱し、世の興亡盛衰を知って、善き心にて執着しなければその果を得る」（偈文）と誦した。

『雑阿含』1301（大正02 p.358上、国訳03 p.349）：あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に**長勝天子**が一面を輝かせて現れ、「よく微妙の説を学び、沙門に習近し、独住すれば思惟が静黙する」（偈文）と誦した。世尊は「よく微妙の説を学び、沙門に習近し、独住すれば諸根を静める」（偈文）と説かれ

た。天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』300（大正02 p.476下）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき**最勝長者天子**が一面を輝かせて現れ、「常に善偈を学び、沙門に親近し、空処を楽しめば諸根を静める」（偈文）と誦した。世尊は「常に善偈を学び、沙門に親近し、空処を楽しめば心意を静める」（偈文）と説かれた。天子は歡喜して天宮に還った。

* ディーガラッティ天子（長勝天子、最勝長者天子）はこの経にしか登場しない。註によれば、天界においてはすべての者が3ガーヴァ（約9キロメートル）の身長となるが、人間界において彼は長身であったのでこの名がついたとされている。片山・相応部1 p.240

SN.002-002-004 (vol. I p.052、南伝12 p.089) : (王舎城の迦蘭陀竹園)

傍らに立った**ナンダナ天子** (Nasdana devaputta) (1) は、「いかなるを持戒者と呼び、いかなるを智慧者と呼ぶか。どんな人を諸天は崇敬すべきか」（偈文）と尋ねた。世尊は「戒を具え、智慧あり、憂いを離れて、漏を尽した最後身の人を持戒者と呼び智慧者と呼ぶ。このように苦を超えた人を諸天は崇敬す」（偈文）と説かれた。

(1) この天はこの経にしか登場しない。漢訳対応経は固有の名を示さない。

『雑阿含』597（大正02 p.160上、国訳03 p.309）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に**1天子**が一面を輝かせて現れ、「どのような衆生が妙色を得、どのような方便によって乗出道を得るか。どのような人が諸天に供養されるか」（偈文）と尋ねた。世尊は「戒をたもち、智慧を有し、憂いなくして解脱する。これをもって妙色を得、乗出道を得、諸天に供養される」（偈文）と説かれた。

(※) 天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』182（大正02 p.439上）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に**1天**が一面を輝かせて現れ、「誰が色の最勝を得、誰が和合逝に乗ずるか。どんな人が天を供養するか」（偈文）と尋ねた。世尊は「持戒にして智慧ある人は色の最勝を得、和合逝に乗ずる。このような人は天を供養する」（偈文）と説かれた。(※) 天子は歡喜して天宮に還った。

SN.002-002-005 (vol. I p.053、南伝12 p.089) : (王舎城の迦蘭陀竹園)

傍らに立った**チャンダナ天子** (Candana devaputta) は、「足場もないのにどのように暴流を渡るのか」（偈文）と尋ねた。世尊は「常に戒を具え、智慧あつて心を静め精進すれば暴流を渡る」（偈文）と説かれた。

『雑阿含』1316（大正02 p.361中、国訳03 p.361）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき**栴檀天子**が後夜に一面を輝かせて現れ、「どのような者が諸流を渡るのか。よるべなく住処なくしてどうして溺れないのか」（偈文）と尋ねた。釈尊は「一切の戒を具足し、智慧ありて善く正受し、内に思惟正念あらば、能く度り難き流を渡る。欲想に染まらなければ色愛を超え、貪喜尽きて難測に入らない」（偈文）と説かれた。天子は世尊の所説を歡喜し、仏足を礼して没していなくなった。

『別訳雑阿含』315（大正02 p.479下）：あるとき世尊は舎衛国の祇樹給孤独園に住

された。そのとき**栴檀天子**が一面を輝かせて現れ、「どのようにすれば駛流を渡るか。安足処がないのに溺れないのか」（偈文）と尋ねた。世尊は「戒定慧は難度を度し、欲想を断ずれば沈没しない」（偈文）と説かれた。天子は世尊の所説を歡喜し、礼をなして天宮に還った。

『雜阿含』1269（大正 02 p.348 下、国訳 03 p.317）：あるとき世尊は**舍衛国祇樹給孤独園**に住された。そのとき**1 天子**が後夜に一面を輝かせて現れ、「どのような者が諸流を渡るのか。よるべなく住处なくしてどうして染まらないのか」（偈文）と尋ねた。釈尊は「一切の戒を具足し、智慧ありて善く正受し、内に思惟繫念すれば難度の諸流を度る。欲想を楽しまず、色結を超越すれば繫せずまた住せずして、染においてまた著せず」（偈文）と説かれた。（※）天子は世尊の所説を歡喜し、仏足を礼して没していなくなった⁽¹⁾。

- (1) ここに登場する天子は**栴檀**という固有名詞を与えられていないが偈の内容は同一といてよいほど相似する。したがってここに掲げた。

SN.002-002-006 (vol. I p.053、南伝 12 p.090) : (王舎城の迦蘭陀竹園)

傍らに立った**スダッタ天子** (Sudatta devaputta)⁽¹⁾ は、「劍によって触れられ、頭髪が燃えるがごとく観じて、欲を棄てて出家せよ」（偈文）と誦した。世尊は「劍によって触れられ、頭髪が燃えるがごとく観じて、我身見を棄てて出家せよ」⁽²⁾（偈文）と説かれた。

- (1) スダッタ天子はここにしか登場しない。

- (2) SN.001-003-001 (vol. I p.013、南伝 12 p.018) に同一偈あり。そこでは天に固有名詞は与えられていない。対応漢訳はそこに掲げた。

SN.002-002-007 (vol. I p.053、南伝 12 p.090) : (王舎城の迦蘭陀竹園)

傍らに立った**スブラフマー天子** (Subrahmā devaputta)⁽¹⁾ は、「心常に恐怖す、これを逃れる道があれば教えてほしい」（偈文）と頼んだ。世尊は「菩提分を修するのほか、諸根を制するのほかに私は衆生の平安を見ない」（偈文）と説かれた。

- (1) スブラフマーという辟支梵天 (Subrahmā paccekabrahmā、漢訳では善臂別梵天、小勝善閉梵) が SN.006-001-006 (vol. I p.146、南伝 12 p.250) = 『雜阿含』1194 (大正 02 p.323 下、国訳 03 p.227) = 『別訳雜阿含』107 (大正 02 p.412 上)、SN.006-001-007 (vol. I p.148、南伝 12 p.253)、SN.006-001-008 (vol. I p.148、南伝 12 p.253) に現れるが、同じ天ではないであろう。なお漢訳は固有名詞を出さない。

『雜阿含』596 (大正 02 p.159 下、国訳 03 p.308) : あるとき世尊は**舍衛国祇樹給孤独園**に住された。そのとき後夜に**1 天子**が一面を輝かせて現れ、「この世は恐怖が多い。もしこれを離れる処があれば説かれよ」（偈文）と頼んだ。世尊は「苦行によって諸根を伏し、一切を棄てれば解脱を得る」（偈文）と説かれた。（※）天子は礼してから没した。

『別訳雜阿含』181 (大正 02 p.439 上) : あるとき世尊は**舍衛国祇樹給孤独園**に住された。そのとき**1 天**が一面を輝かせて現れ、「世間は常に恐れる。もしこれをなからしめる道があれば説け」（偈文）と頼んだ。世尊は「苦行によって諸根を摂し、一切

の努めを棄てれば生死の恐れを離れることができる」（偈文）と説かれた。（※）天子は歡喜して天宮に還った。

*この經の神は釈尊に依頼しているわけであるが、後述する統計ではこれも質問として処理した。

SN.002-002-008 (vol. I p.054, 南伝 12 p.091) : あるとき世尊はサーケータ (Sāketa) のアンジャナ林 (Añjanavana) に住された。そのとき夜更けにカクダ天子 (Kakudha devaputta) が一面を輝かせて現れ、「比丘よ、あなたは悲しみも喜びもないのか、不快もないのか」（偈文）と尋ねた。世尊は「夜叉よ (yakkha)、私には悲しみも喜びも不快もない」（偈文）と説かれた。天子はさらに「どうして悲しみも喜びも不快もないのか」（偈文）と尋ねた。世尊は「悲しみある者には喜びがあり、喜びある者には悲しみがある。比丘は喜びも悲しみもない」（偈文）と説かれた。天子は※「愛着を超え、涅槃した婆羅門を久しぶりに見た」（偈文）と誦した。

『雜阿含』585 (大正 02 p.155 中, 国訳 03 p.295) : あるとき世尊は釈氏の優羅提那塔所に住された。そのとき世尊は鬚髮を剃られ、衣をもって頭を覆っておられた。後夜に一面を輝かせて塔辺に住む天神が現れ、「沙門よ、あなたは煩惱を離れているか、歡喜はないか、獨一に住することを願わないか」（偈文）と尋ねた。世尊は「私は解脱して歡喜あることなし。獨一に住している」（偈文）と答えられた。天神はさらに「どのようなことが歡喜あることなく、獨一に住していることか」（偈文）と尋ねた。世尊は「煩惱は歡喜を生じ、また歡喜は煩惱を生じる。悩みなく歡喜なきを護持せよ」（偈文）と説かれた。（※）天神は礼してから没した。

『別訳雜阿含』169 (大正 02 p.436 中) : あるとき世尊は釈翅鳩羅脾大斯聚落に住された。そのとき世尊は鬚髮を剃除されたばかりで衣をもって頭を覆っておられた。晨朝早くに聚落中の1天神が現れて、「比丘よ、あなたは煩惱なきを得ているか、歡喜はないか」（偈文）と尋ねた。世尊は「私には煩惱も歡喜もない。よく獨住している」（偈文）と説かれた。さらに天神は「何故に煩惱も歡喜もなく、よく獨住できるのか」（偈文）と尋ねた。世尊は「歡喜はすなわち煩惱である。私には歡喜も煩惱もないと知れ」（偈文）と答えられた。（※）天神は歡喜して天宮に還った。

*パーリのカクダ天はここにしか登場しない。パーリの註釈は、「この天はコーラという都市 (Kola-nagara) にマハーモグッラーナ長老の奉仕者として、幼い頃には長老の近くに住み、禪定を起こして死に、梵天界に生まれた。そこでもカクダ梵天と呼ばれた」とする。片山・相応部 1 p.247

*漢訳 2 經の神は「塔辺に住む天神」「塔辺に住む天神」とされ、この天神は「森相応の神」に属するであろう。ただし内容がパーリと相応するところがあるのでここに収めた。ただし「森相応の神」にしては「婆羅門を見た」の偈が存するのが奇妙である。

SN.002-002-009 (vol. I p.054, 南伝 12 p.092) : 王舎城因縁 (Rājagaha nidānam) 傍らに立ったウッタラ天子 (Uttara devaputta) は、「生は死に導かれ寿命は短い、老いる者に庇護者なし。死に怖れを見て安樂をもたらす功德を積み」（偈文）と誦した。世尊は「生は死に導かれ寿命は短い、老いる者に庇護者なし。死に怖れを見て世の欲を捨てて寂靜を願え」⁽¹⁾ (偈文) と説かれた。

- (1) SN.001-001-003 (vol. I p.002、南伝 12 p.003) に同一偈あり。そこでは単に「天」とされ、固有名詞は与えられていない。対応する漢訳経はそこで紹介した。なおおウッタラ天子はここにしか登場しない。

SN.002-002-010 (vol. I p.055、南伝 12 p.093) : (王舎城因縁)

傍らに立った**アナータピンディカ天子** (Anāhtapiṇḍika devaputta) は、「このジェータ林 (Jetavana 祇樹給孤独園) は仙人衆の住処であり、法王 (仏) が住される祝福された住処である。人は智と定と戒に浄められるのであって氏姓によってではない。智慧と戒と寂靜によって**サーリプッタ**のごとく彼岸に渡った比丘は最勝である」(1) (偈文) と誦した。

翌日、世尊は比丘たちにこれを告げられると、**アーナンダ**が「それはアナータピンディカ長者に違いありません。長者はサーリプッタのもとで浄信を得た (abhippasanna) のです」(散文) と語った。世尊はこれを善哉として可とされた。

- (1) SN.001-005-008 に同一偈がある。ここに登場する天には固有名詞は与えられていない。なお PTS テキスト上では記載されていないが、おそらく仏在処を記す部分が省略されたものと考えられる。これを復元すると仏在処は王舎城である。【資料集 8】「パーリ『経蔵』の六事と仏在処一覧」(「モノグラフ」第 21 号 2017 年 4 月) p.165。ただし本文中に天子がジェータヴァナに現れたという文章があり、この文意を取っていえば釈尊は祇園精舎におられたことになる。

『雑阿含』593 (大正 02 p.158 中、国訳 03 p.305) : あるとき世尊は**舎衛国の祇樹給孤独園**に住された。そのとき**給孤独長者**が病気で亡くなり兜率天に生れた。天子となった**長者**は力士の腕を屈伸するが間に一面を輝かせて現れて、「この祇桓林に仙人衆が止住し、諸王もまた此に住する、我は歡喜の心を増す。衆生を浄めるのは戒と智慧であって族生ではない。大智**舍利弗**は遠離を修す」(偈文) と誦した。そのとき**阿難**が釈尊に、「それは給孤独長者であり、生天して釈尊のもとに来たのです。長者は舍利弗を尊敬しておりました」(散文) と告げると、釈尊は「そのとおりで」と是認され、「一切世間の智者は舍利弗の智に比ぶるに十六の一にも及ばず」(偈文) と誦された。比丘らは世尊の所説を歡喜奉行した。

『別訳雑阿含』187 (大正 02 p.441 上) : あるとき世尊は**舎衛国の祇樹給孤独園**に住された。そのとき**須達長者**が病気で**困篤**であった。世尊はこれを聞かれてその家を訪問され、「あなたは仏・法・僧・戒に不壞信を持っているか、念仏・念法・念僧・念戒・念施・念天の六念法を修しているか」と問われた。長者は「修しています」と答えた。長者は世尊に中食を供養し、世尊が去られてまもなく**命終して天上に生まれた**。

この**須達天子**は一面を輝かせて世尊の前に現れ、仏足を礼拝して、「この祇洹の園林は仙聖の住処であり、法王が住んでおられてたいへん喜ばしい。信戒上慧が浄めるのであって種姓が上行ではない。**舍利弗**は最勝である」(偈文) と誦した。世尊はその通りであると、その偈を復唱された。須達天子は歡喜して天宮に還った。

翌朝の夜明け前、世尊は講堂において比丘たちにこのことを話された。そのとき**阿難**は世尊の背後でこの偈を聞いて、「須達長者は天上に生まれ、還ってきて舍利弗を讚歎したのです」(散文) と言った。世尊は「そのとおりだ」(散文) と是認された。

阿難および比丘らは世尊の所説を歡喜奉行した。

SN.002-003-001 (vol. I p.056、南伝 12 p.095) : あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜更けに**シヴァ天子** (Siva devaputta) が一面を輝かせて現れ、「ただ善き人々とのみ坐し、善き人々とのみ交われ。そうすればよき人の正法を知ってよき者となる。ただ善き人々とのみ坐し、善き人々とのみ交われ。そうすれば悲しみの中にあつて悲しまない。……親族の中に輝く。……善趣に生まれる。……幸福となる」⁽¹⁾ (偈文) などと誦した。世尊は「善き人とのみ坐せ、善き人と交われ。善き人の正法を知ってすべての苦しみから脱する」(偈文) と説かれた。

(1) SN.001-004-001 に同一偈あり。そこではこの偈はサトゥッラパカーイカ群神の誦したものである。

『雑阿含』1302 (大正 02 p.358 上、国訳 03 p.350) : あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に**尸毘天子**が一面を輝かせて現れ、「どのような人と交わり、どのような人と事を共にすべきか」(偈文) と尋ねた。世尊は「正士と交わり、正士と事を共にすべきである。これによって止悪に転じる」(偈文) と説かれた。天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』301 (大正 02 p.476 下) : あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき**尸毘天**が一面を輝かせて現れ、「誰と共に止住し、誰と和合すべきか。誰の正法をにおいて過患なきか」(偈文) と尋ねた。世尊は「賢聖と共に止住し、賢聖と和合せよ。賢聖の正法にしたがえば過患なし」(偈文) と説かれた。天子は歡喜して天宮に還った。

*シヴァ天子(尸毘天子、尸毘天)はこの経にしか登場しない。なおこの天はいわゆるヒンドゥー教のシヴァ神とは理解しない。

SN.002-003-002 (vol. I p.057、南伝 03 p.097) : (舍衛城の祇樹給孤独園)

傍らに立った**ケーマ天子** (KHEMA devaputta) ⁽¹⁾ は、「愚かにして智慧なき者は自ら敵のごとく振る舞う。懈怠者は死魔の口に至り、車軸の壊れたように思いに沈む」(偈文) と誦した。

(1) ケーマ天子はここにしか登場しない。なお漢訳対応経には固有名詞はない。

『雑阿含』1276 (大正 02 p.350 下、国訳 03 p.324) : あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に**1 天子**が一面を輝かせて現れ、「愚痴の人の所行は點慧に合せず。自ら行じるところは悪知識となり、ついに苦果の報を得る」(偈文) と誦した。世尊は「不善の業を作れば諸々の悩みを受ける。善業を作る者は安樂の報を得る」(偈文) と説かれた。(※) 天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』274 (大正 02 p.469 中) : あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき**1 天**が一面を輝かせて現れ、「愚かな少智者は諸々の悪業を造る。自ら怨みを作つて大苦報を受ける」(偈文) と誦した。世尊は「不善をなせば自ら焼く。愚痴にして悪を作せば報を受けて啼哭する」(偈文) と説かれた。(※) 天子は歡喜して天宮に還った。

SN.002-003-003 (vol. I p.057、南伝 12 p.097) : (舎衛城の祇樹給孤独園)

傍らに立った**セーリー天子 (Serī devaputta)** は、「天も人も食を喜ぶ。食を喜ばないあの夜叉は何者か」(偈文)と尋ねた。世尊は「清浄なる心をもって食を施す人はこの世とあの世で食を得る。功德は後の世の渡し場である」(1) (偈文)と説かれた。

そのとき**セーリー天子**は私は昔セーリーという王(2)で布施の讃嘆者であり、四門において布施していた。そこへ妃妾やクシャトリヤや軍隊やバラモンたちがやってきて私たちも布施をして功德を得たい、と言った。私は4つの門の布施を彼らに与えた。世尊はよく説かれた、と言った。

(1) 同一の偈が SN.001-005-003 (vol. I p.032、南伝 12 p.044) にある。ここでは天に固有名詞は与えられていない。なおセーリー天子(悉鞞梨という天子)はここにしか登場しない。

(2) 註によれば、この王はシンダヴァ国とソーディヴァーカ国という2国を領有し、その都はロールヴァ (Roruva) と呼ばれた、とされている。片山・相応部 1 p.264

『雑阿含』999 (大正 02 p.261 下、国訳 03 p.270) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に**悉鞞梨**という天子が一面を輝かせて現れ、「世間に福がついてくるものがあるか」(偈文)と尋ねた。世尊は「布施にはこの世においてもあの世においても、福業が常に影のようについてくる」(偈文)と説かれた。悉鞞梨天子は「私は過去世において国王となり、妻・子・大臣・將軍・庶民のために財を尽して布施した。その福業の果報は五大河が合して1になるように計り知れない」(散文)と言ひ、世尊の所説を歡喜して没した。

『別訳雑阿含』136 (大正 02 p.426 下) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき夜中に**1天**が一面を輝かせて現れ、「天も人も飲食に歡喜を生じる。世間には飲食のように喜を生じるものはない」(偈文)と誦した。世尊は「信施はこの世にもあの世にも飲食の福がついて回る」(偈文)と説かれた。そのときこの**遲緩と名づける天**は、「私は過去世の王であったとき、夫人・太子・大臣・臣下のために財を尽して布施をなした。その福の果報は辺際を知らない」(散文)といい、仏の所説を歡喜して宮に還った。

SN.002-003-004 (vol. I p.060、南伝 12 p.101) : (舎衛城の祇樹給孤独園)

傍らに立った**ガティーカーラ (Ghāṭikāra 陶工)** という名の天子は世尊と次のような会話をした。

(天子) 「7人の比丘が解脱して無煩天 (Aviha) に生まれた。それは**ウパカ (Upaka)**、**パラガンダ (Phalagaṇḍa)**、**プクサーティ (Pukkusāti)**、**バッティヤ (Bhaddiya)**、**カンダデーヴァ (Khaṇḍadeva)**、**バーフラッグ (Bāhuraggi)**、**ピンギヤ (Piṅgiya)** である。彼らは人身を捨てて、天の軛をも離れた」(偈文)
(世尊) 「よくぞ言った。その人たちは誰の法によって結縛を断じたのか」(偈文)
(天子) 「世尊の法のほかにはない。この世において世尊の法を知って結縛を断じました」(偈文)

(世尊) 「知り難い法をあなたは語った。誰の法を知ってこのように語ったのか」 (偈文)

(天子) 「むかし私は陶師であって、ヴェーバリンガで壺を作っていた。父母に仕え、迦葉仏の優婆塞であって、世尊と同郷の友人であった。だから7人の比丘が解脱したことを知っているのです」 (偈文)

(世尊) 「バग्ガヴァ (Bhaggava) よ、その通りである、あなたは私の同郷で、我が友人であった。これは最後身の古き友人の2人の邂逅である」 (1) (偈文)

(1) SN.001-005-010 (vol. I p.035、南伝 12 p.049) に同一偈あり。そこではガティーカーラ (Ghāṭikāra 陶工) という天子の名は上げられていない。【研究ノート 14】の【081】MN.081 Ghāṭikāra-s. (陶師経 vol. II p.045、南伝 11 上 p.059、片山・中部 4 p.148) 参照

『雑阿含』595 (大正 02 p.159 中、国訳 03 p.307) : あるとき世尊は舎衛国の祇樹給孤独園に住された。そのとき無煩天子が一面を輝かせて世尊のもとに現れて、「7人の比丘は貪瞋痴を尽して恩愛を渡った」 (偈文) と誦した。世尊は「尊者優波迦、波羅健荼、弗迦羅娑利、跋提、健陀曇、婆休難提、賓耆迦らは諸流を渡り、死魔のくびきを脱した。あなたは誰か」 (偈文) と問われた。天は「私は阿那含を得て無煩天に生まれました。だから彼らのことをよく知っています。私はむかし鞞跋楞伽村に難提婆羅という名で生まれ、壺を作っていました。父母に供養し迦葉仏の優婆塞となり、世々に仏は我が友でした」 (偈文) と答えた。世尊は「その通りである。このように正士は宿命によって共に和合して後辺身をたもっているのだ」 (偈文) と説かれた。無煩天子は世尊の所説を聞いて歡喜し、姿を消した。

『別訳雑阿含』189 (大正 02 p.442 中) : あるとき世尊は舎衛国の祇樹給孤独園に住された。そのとき1天が一面を輝かせて世尊のもとに現れ、「7人の比丘が無煩天に生まれた」 (偈文) と誦した。世尊は「優比羅、建陀、仏羯羅、跋直、羯提婆、婆睺提、毘紐は駛流を渡って生死の禍を断じた。そういうあなたは誰か」 (偈文) と問われた。天は「私は不還を得た無煩天です。むかし私は毘婆陵伽に生まれ難提婆という瓦師で、迦葉仏の優婆塞であり、父母に孝養を尽くし、世尊の前世の愛答摩納と親友でした」 (偈文) と答えた。世尊は「その通りである。私たちは親友で、最後身に住して本日再会した」 (偈文) と説かれた。天は世尊の所説を歡喜して作礼して去った。

SN.002-003-005 (vol. I p.061、南伝 12 p.103) : [釈尊は登場しない] 多くの比丘がコーサラ国の雪山のふもとの森に住していた。彼らは高慢となり、心を散乱させていた。15日の布薩日にジャントゥ天子 (Jantu devaputta) (1) が比丘らのところに来て、「かつてゴータマの弟子である比丘たちは安楽に暮らしていた。求める心なくして食を乞い、求める心なくして臥坐具を乞い、世の無常を知って彼らは苦を滅していた。ところが今の比丘たちは自らを悪人となして、食べて横になり、村長のように他の家の富に心奪われている。私は不放逸の人々に帰依する」 (2) (偈文) と誦した。

- (1) この天はここにしか登場しない。
- (2) 同一偈が SN.009-013 (vol. I p.203、南伝 12 p.352) にもあり。これには天はただ「森に住む天」とされ、固有名詞は示されない。経の構造はそちらに収載されるほうがふさわしいので、対応漢訳はそこに掲げた。

SN.002-003-006 (vol. I p.061、南伝 12 p.104) : 舎衛城に住された。

傍らに立ったローヒタツサ天子 (Rohitassa devaputta) 天子は、「何物も生ぜず起こらざる世界の辺に行くことができるか、見ることができるか」(散文)と尋ねた。世尊は「それについては語らない」(散文)と答えられた。これを聞いた天子は、「昔私はローヒタツサという仙人で、ボージャの子で神通があって空を飛行した。その私は世界の辺に行こうと懸命に飛んだがそこに達せずして死んだ。世尊の説かれるところは素晴らしい」(散文)と言った。世尊は「友よ、私は世界の終辺に達しないで苦悩の終辺をなすというのではない。私はこの1尋の身体の上に世界と世界の果と世界の滅と世界の滅に至る道を説くのである」(散文)と説かれ、「歩行にて世界の終辺に至ることはできない。世界の終辺に至らずして苦悩を脱することはできない。だから世間解者は世界の終辺に至り、梵行をなし終って悪を静めた人は、世界の終辺を知ってこの世、後の世を求めない」(偈文)と誦された。

『雑阿含』1307 (大正 02 p.359 上、国訳 03 p.353) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に赤馬天子が一面を輝かせて現れ、世尊に「よく世界の辺を行き過ぎ、不生不老不死の辺に至ることができるか」(散文)と尋ねた。世尊は「よく世界の辺を行き過ぎ、不生不老不死の辺に至る者がある」(散文)と説かれた。天子は反問した。「私はいにしえの昔に赤馬という外道の仙人であった。神通力によって世界の辺に行こうとして100年を費やしたが行き着けなかった。世界の辺を行き過ぎ、不生不老不死の辺に至ることはない」(散文)と。世尊は「今、1尋の身をもって説こう。世界とは五受陰であり、世界の集とは染著、世界の滅とは染著の滅、世界の滅道とは八聖道である」(散文)と説かれ、「牟尼は世界の辺を知り、世界の辺を解し、世界の彼岸に立つ」(偈文)と誦された。天子は礼して没した。

『別訳雑阿含』306 (大正 02 p.477 中) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき赤馬天子が一面を輝かせて現れ、「不生不老不死の処を得ることができるか」(散文)と尋ねた。世尊は「人が辺際に至ることはできない」(散文)と答えられた。天子は「世尊の所説やよし。私は過去世において赤馬という仙人であった。神通力によって世界の辺をめざして100年間飛び続けたが行き着けなかった」(散文)と言った。世尊は「その通りである。衆生の辺際は涅槃であり、それが辺際を得るということである」(散文)と説かれ、「牟尼は智慧によってよく辺際を知って辺の彼岸に渡る」(偈文)と誦された。天子は歡喜して天宮に還った。

*AN.004-005-045 (vol. II p.047、南伝 18 p.085)、AN.004-005-046 (vol. II p.049、南伝 18 p.087)、『増一阿含』043-001 (大正 02 p.756 上、国訳 09 p.271) は同一内容である。なお An.-A. vol. III p.087 参照。

SN.002-003-007 (vol. I p.062、南伝 12 p.106) : (舎衛城)

傍らに立った**ナンダ天子** (Nanda devaputta) は、「時は過ぎ去り日夜は移る。青春は我らを捨てる。この恐れを見て安樂をもたらす功德を積み」(偈文)と誦した。世尊は「時は過ぎ去り日夜は移る。青春は我らを捨てる。この恐れを見て世の欲を棄て、寂靜を願え」(偈文)と説かれた。

SN.002-003-008 (vol. I p.063、南伝 12 p.107) : (舎衛城)

傍らに立った**ナンディヴィサーラ天子** (Nandivisāla devaputta) は、「4つの車輪と9つの門はみな汚れている。ここに出口があるのであろうか」(偈文)と尋ねた。世尊は「欲貪の縄を切り、渴愛を抜き取れば出口がある」(偈文)と説かれた⁽¹⁾。

(1) SN.001-003-009 (vol. I p.016、南伝 12 p.023) に同一偈がある。そこに登場する天には固有名詞は与えられていない。漢訳も同様なので、対応漢訳はそちらの方に紹介した。

SN.002-003-009 (vol. I p.063、南伝 12 p.107) : 舎衛城因縁 (Sāvatti nidānaṃ)。

そのとき世尊はやってきた**アーナンダ**に、「あなたも**サーリプッタ**は好ましいか」(散文)と問われた。アーナンダが「サーリプッタには大いなる智慧がある」(散文)と讃歎すると、世尊は「その通りである。彼は賢者であり、少欲知足であり、悪を非難する人である」と告げられた。

このとき**スシマ天子** (Susima devaputta) が他の天子らと共に釈尊のもとに現れて、「サーリプッタは忿なく小欲にして、師の誉れを担う智者である」(偈文)と誦した。世尊は「忿なく少欲であり、傭人が賃金の支払いを待つように、死の時を待っている。サーリプッタは智者である」(偈文)と誦された。

『雜阿含』1306 (大正 02 p.358 下、国訳 12 p.352) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に**須深天子**が500人の眷属と共に一面を輝かせて釈尊のもとに現れた。このとき釈尊は**阿難**に、「尊者**舍利弗**はよく説法し、心に喜樂するや否や」(散文)と問われた。阿難は「舍利弗は多聞持戒にして少欲知足で広深の智慧を持っています。舍利弗の説法に喜樂しないものはありません」(散文)と答えた。須深天子は喜んで「舍利弗は多聞にして明智平等慧あり、涅槃を得て最後身を持っています」(偈文)と誦し、仏の所説を歡喜して没した。

『別訳雜阿含』305 (大正 02 p.477 中) : あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。**須尸摩天子**が500人の眷族とともに現れて一面に坐した。その時世尊は**阿難**に「**舍利弗**は多聞持戒、少欲知足にして智慧具足する」(散文)と褒められると、阿難はその通りです、と答えた。そのとき須尸摩天子は一面を輝かせて、「舍利弗は多聞にして大智ありと世尊は讃嘆される」(偈文)と誦した。世尊は、「舍利弗は多聞にして大智あり、寂滅を得て、魔を破し最後身に住する」(偈文)と説かれた。天子らは世尊の所説歡喜して天宮に還った。

* スシマ天子(須深天子、須尸摩天子)は次の経にも登場する。ただし直接の関係はない。

SN.011-001-002 (vol. I p.217、南伝 12 p.380) : 世尊は舎衛城の祇樹給孤独園に住された。そのとき世尊は比丘らに、「遠い昔のことであるが阿修羅が天を攻撃した。そのとき帝釈天がスシマ天子 (Susima devaputta) に阿修羅を迎え撃てと命じた。天子はわかりましたと答えながら放逸に過ごした。帝釈天は『努力もせずに安樂に達する処があるなら教えてほ

しい』と言った。スシーマ天子は『そのような処があるなら私に教えてほしい』と答えた。帝釈は『無業にして老いることがなければ涅槃の道である。スシーマよ、そこに行くがよい』と説いた。こうして帝釈は三十三天を統治しつつ努力を称賛する者となった。比丘らよ、あなたたちも努力しなさい』と説かれた。

SN.002-003-010 (vol. I p.065、南伝 12 p.110) : あるとき世尊は王舎城迦蘭陀竹園に住された。そのとき夜更けにもと外道の弟子であった六天子が一面を輝かせて現れ、それぞれ次のような偈を誦した。

アサマ天子 (Asama devaputta) 「プーラナ・カッサパはこの世に切るも殺すも悪を認めず、功德も認めなかった。彼は師と尊ぶにふさわしい」 (偈文)

サハリ一天子 (Sahali devaputta) 「マッカリ・ゴースーラは苦行と厭離によって自らを制する。彼は悪をなすようなことはない」 (偈文)

ニンカ天子 (Nimka devaputta) 「ニガンタ・ナータプッタは四種に身を制御し、見られ聞かれたことを顕現する。彼に罪過はない」 (偈文)

アーコータカ天子 (Ākoṭaka devaputta) 「パクダ・カーティヤーナやニガンタやマッカリ・ゴースーラやプーラナ・カッサパは人々の師であり、沙門果に達した人である」 (偈文)

ヴェータンバリー天子 (Veṭambarī devaputta) 「吠えても野干は野干であって獅子とは等しくない。裸にて妄語し衆の師となる」 (偈文)

悪魔波旬「彼らは厭離の生活をし、天界を喜ぶ。彼らの教えは正しい」 (偈文)

世尊はこれを悪魔波旬と見破って、「どんな色も空に輝く光も、ナムチ (Namuci) の讃えるところであって魚の餌のようなもの、殺さんがために投げられたものである」 (偈文) と誦された。

そのときマナーヴァ・ガーミヤ天子 (Māṇava-gāmiya devaputta) は、「王舎城の山々の中ではヴィプラ山が最勝、空行くものの中では太陽が最勝、天界を含む世界の中では仏が第一である」 (偈文) と誦した。

『雑阿含』1308 (大正 02 p.359 中、国訳 03 p.354) : あるとき世尊は王舎城毘富羅山に住された。そのときもと外道であった六天子が現れ、次のような偈を誦した。

阿毘浮天子「比丘は常に修行し、厭離し、その所説を見聞すれば地獄には墮ちないであろう」 (偈文)

増上阿毘浮天子「黒闇を厭離し、如来大師にしたがって沙門の法を稟受すれば衆悪を造らない」 (偈文)

能求天子「迦葉は悪を造るを見ず、福をなすを見ない」 (偈文)

毘蘭婆天子「尼乾外道若提子は長夜に難行を修す。このような人を羅漢に遠からずと説く」 (偈文)

そのとき世尊は、「野狐は師子と共に遊んでも師子となることはできない。尼乾大師の衆は羅漢を去ることはなはだ遠い」 (偈文) と誦された。

天魔波旬は (阿俱吒天子に) 「深く微妙の色に著する。私はこれらを教化して梵天に生じさせる」 (偈文) と誦した。

世尊は「あらゆる色も虚空中の光も魔の縛を離れない。餌で魚を釣るようなものである」（偈文）と誦された。

（他に**迦藍天子**の名が上がる）

ときに天子らは「王舎城の第1は毘富羅山であり、天人中には等正覚を最上となす」と釈尊の威徳を讃嘆し、歓喜して没した。

『別訳雑阿含』307（大正02 p.477下）：あるとき世尊は王舎城迦蘭陀竹林に住された。そのとき六天子が現れ偈を誦した。

難勝天子「比丘を譏毀すべし。四時に自ら禁制し、見聞して住する人は諸悪を離れる」（偈文）

自在天子「苦行は譏毀されるべきである。己身を**撿**撰し悪口を断じるその法主のところでは衆悪を作らない」（偈文）

顕現天子「殺人も祀火も善悪の報はない。これが**迦葉**の所説である」

決勝天子「**尼乾若提子**は長夜に苦行を修すれば羅漢に遠からずと説く」

世尊は「野干は師子王と同じではない。あなたたち裸形の衆は羅漢を去ること遠い」（偈文）と誦された。

1 **天子**「王舎城の諸山のうち毘富羅を最上となし、一切の天人中如来を最尊となす」

（他に**時起天子**、**輕弄天子**の名が上がる）

諸々の天子は歓喜して天宮に還った。

* パーリと『雑阿含』『別訳雑阿含』には元外道であったとされる6人の天子が登場するが、それぞれは必ずしも対応していない。

[2] SN.002「天子相応」の形式に類するが、パーリには対応する経がない漢訳の『雑阿含』『別訳雑阿含』にしかない経を掲げる。形式とは天子が登場して釈尊と偈によって対話するということであるが、「天相応」と区別されるのはここに登場する神は固有名詞を有するということである。

まず『雑阿含』の経番順に『別訳雑阿含』に対応経があるものを紹介し、次に『別訳雑阿含』にしかないものを紹介する。

『雑阿含』1271（大正02 p.349上、国訳03 p.319）：あるとき世尊は王舎城の山谷精舎に住された。そのとき**阿難**は比丘らに四句法経を説くべしとして、「身口意において悪をなすな。五欲は虚空であり、正智に念じて衆苦に近づくな、非義と和合するな」（偈文）と説いた。

これを聞いた一人の婆羅門が世尊のもとを訪れ、「これは非人の語ではないか」（散文）と質問した。世尊は婆羅門に「その通り、非人の語である」（散文）と答えられ、あるとき**拘迦尼天女**がこの語を説いたのである、「だから非人の語である」（散文）と説かれた。この婆羅門は世尊の所説を歓喜して、礼をなして去った。

『別訳雑阿含』270（大正02 p.468下）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき**阿難**は比丘らにいま四句の法を説こうと言って、「身口意に悪をなすな。欲は空無実であると観じて損減の業をなすなかれ」（偈文）と説いた。一人の婆羅門がこれは非人の説に違いないと世尊に質問した。世尊は「かつて王舎城の耆尼山

にいたときに、**求迦尼婆**という天女が説いたものであるから非人の説である」（散文）と答えられた。婆羅門は仏の所説を歓喜して去った。

*この経と次の『雑阿含』1272は【1】の[1]に紹介したSN.001-004-010を受けたものである。

『雑阿含』1312（大正02 p.360下、国訳03 p.359）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に**多羅健陀天子**が一面を輝かせて現れ、「いくばくの法を断捨し、いくばくの法を増修し、いくばくの積聚を超越すれば比丘が流れを渡ったというか」（偈文）と尋ねた。世尊は「五を断じ、五を捨し、五法を増修し、五種の積聚を超越すれば比丘が流れを渡ったという」（偈文）と説かれた。天子は礼してから没した⁽¹⁾。

『別訳雑阿含』311（大正02 p.479上）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき**多羅健陀天子**が一面を輝かせて現れ、「いくばくの法を断除し、いくばくの法を棄て、いくばくの法を増進し、いくばくの法を成就し、いくばくの法を除けば比丘は駛流を渡るのか」（偈文）と尋ねた。世尊は「五欲受陰を断除し、五蓋を棄て、五根を増進し、五分身を成就すれば比丘は生死の海を渡る」⁽¹⁾（偈文）と説かれた。天子は歓喜して天宮に還った。

*ほとんど同じ偈がSN.001-001-005（vol. I p.003、南伝12 p.004）の対応経である『雑阿含』1002（大正02 p.262下、国訳03 p.273）、『別訳雑阿含』140（大正02 p.427下）にある。しかしそこでは神に固有名詞が与えられずただ「1天」とされているので、前節の「天相應」に収載した。

『雑阿含』1314（大正02 p.361上、国訳03 p.360）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき後夜に**迦摩天子**が一面を輝かせて現れ、「貪や恚などは何が所因であるか。恐怖、覺想は何によって起こり、何が子の乳母によるがごときなるか」（偈文）と尋ねた。世尊は「愛生じて自身長ずる、尼拘律樹の如し。処処に所著に随う、榛綿の叢林の如し。若し彼の因を知る者は発悟し開覺せしむ、生死の海流を度し復た更に有を受けず」（偈文）と説かれた。天子は礼してから没した。

『別訳雑阿含』313（大正02 p.479中）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき**迦摩天子**が一面を輝かせて現れ、「貪欲と瞋恚は何を根本とするか、恐怖は何から生じるか、嬰兒の母乳をとらえる意はどこから生じるか」（偈文）と尋ねた。世尊は「愛が心に至ることは尼拘陀樹のごときであり、愛着は欲に生じること摩樓多は林樹を覆うがごとくである。この根本を棄てれば生死の海を渡って後はない」（偈文）と説かれた。天子は歓喜して天宮に還った。

*パールの対応経は第10「夜叉相應」に収められているSN.010-003（vol. I p.207、南伝12 p.360）である。この仏在処はガヤーで登場人物はカラ夜叉（Khara yakkha）とスチローマ夜叉（Suciloma yakkha）である。

『別訳雑阿含』298（大正02 p.476中）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき**因陀羅天子**が夜中に一面を輝かせて現れ、「何が寿命を知らず、何が寿命を覚しないか。何が寿命に貪著するか」（偈文）と尋ねた。世尊は「色は寿命を知らず、行は寿命を覺せず、愛寿が繫縛する」（偈文）と説かれた。因陀羅天子は

さらに、「仏の所説のごとく、色が寿命でなければ何が意識とともに身体を形成するのか」（偈文）と尋ねた。世尊は「歌羅羅（kalala）によって識がある、歌羅羅は胞を生じ、順次に肉段、堅鞭、五胞、髪爪、五根、男女の相を生じ、寿命がある」（偈文）と説かれた。天子は歓喜して天宮に還った。

『別訳雑阿含』299（大正02 p.476中）：あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき釈迦という天子⁽¹⁾が一面を輝かせて現れ、「一切結を断じて衆務を捨てても、他に教授するならば沙門と名づけない」（偈文）と誦した。世尊は「夜叉よ知れ。智者は悲愍して説法教導する、羅漢は慈慧をもって救抜して過たない」（偈文）と説かれた。天子は歓喜して天宮に還った。

- (1) 釈迦が Sakka の音写であるとするとは「帝釈天」ということになる。しかし‘Sakka-saṃyutta’は別立てされているし、下記のように第10「夜叉相応」SN.010-002（vol. I p.206、南伝12 p.359）に同じ偈があり、ここでは Sakka という名の夜叉（Sakka-nāmaka yakkha）とされている。したがってここでは帝釈天と別の天子であると理解する。偈の内容は『雑阿含』577（大正02 p.153下、国訳03 p.289）、『別訳雑阿含』162（大正02 p.435上）にも相応する。

【3】SN.009 Vana-saṃyutta（森相応）に収載される経とその対応漢訳経

次にSN.009「森相応（Vana-saṃyutta）」に収載される経とそれに対応する漢訳経を紹介する。

「森に住む神（vanasaṅḍe adhiṅgā devatā）」に収載される経も大体において「天相応」と「天子相応」に収められる経と同じであるが、次の点が異なる。

まず「森に住む神」の登場のし方は必ずしも「天相応」や「天子相応」のごとく定型化しているわけではないが、例えばその第1経を引用すると次のごとくである。

その時その比丘は昼日住に行つて（divāvihāragato）家居に関する悪不善の思いを抱いた。時に森に住む天神（vanasaṅḍe adhiṅgā devatā）がその比丘を憐れみ、利益を思い、その比丘を警覺せしめようとして（anukampikā atthakāmā saṃvejetukāmā）その比丘に近づき、近づいてからその比丘に偈文を誦した。（SN.009-001）

時有異比丘在拘薩羅住林中、入晝正受心起不善覺依於惡貪。時彼林中住止天神作是念。「非比丘法。止住林中入晝正受心生不善覺依於惡貪。我今當往開悟之」。時彼天神即說偈言。（『雜阿含』1333）

爾時復有一比丘。亦住於彼俱薩羅林、晝入房坐起於惡覺依於貪嗜。時林天神、「如彼比丘起於惡覺依於貪嗜、不能稱可出家法式、是不善事處此林中起於惡覺。我於今者當寤悟之」。作是念已即往其所而說偈言。（『別訳雑阿含』353）

そして経末も、次のように表わされる。

そのときその比丘はその天神に警覺させられた（saṃvejito saṃvegaṃ āpādi）。（SN.009-001）

時彼天神說是偈已。彼比丘聞其所説專精思惟断諸煩惱心得阿羅漢。（『雜阿含』

1333)

なお『別訳雑阿含』は大部分の経は偈文で終っており結部は記されていない。1 経（『別訳雑阿含』364）だけ例外があるが、それは概要に記した。

このように「森に住む神」は文字通り森に住んでいるのであり（他に聚落とか河とかに住む神もある）、だから没して天に還るということはない。また昼間に現れるから、一面を輝かせて現れるのでもない。すなわち「天相応」や「天子相応」に登場する神は天界に住んでいるのであるが、「森に住む神」は人間世界に住んでいるのであり、「天相応」「天子相応」の神よりは下位の神であるようである。そしてその神が対するのは釈尊ではなく〔釈尊は登場しない〕、まだ聖者とはなっていない比丘であることも大きな違いである。

[1] 以下に「天相応」や「天子相応」と同様に、パーリとその対応漢訳経を紹介する。

SN.009-001 (vol. I p.197、南伝 12 p.342) : [釈尊は登場しない] あるとき 1 人の比丘 (aññatara bhikkhu) がコーサラ国のとある森の茂み (Kosalesu viharati aññatarasmiṃ vanasaṇḍe) に住していた。その時その比丘は昼日住 (divāvihāra) に行き、家居に関する悪不善の思いを抱いた。そこへ森に住む天が比丘を警覺せしめようと現れて、「あなたは遠離を求めて森に入ったのに心は外界に走っている。泥に浴する鳥が身を震わせて羽根についた泥を払うように身についた塵を払いなさい」(偈文) と誦した。比丘は警覺させられた。

『雑阿含』1333 (大正 02 p.368 上、国訳 03 p.384) : [釈尊は登場しない] あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき 1 人の比丘が拘薩羅の人間の林中において昼住に入り心が貪欲にとらわれた。そこへ林中に住む天神が現れて、「遠離を欲して空閑林に入ったのに外縁にとらわれている。正念にして塵垢を除け。如来の法律において心を持して放逸なること莫れ」(偈文) と誦した。その比丘は精進して煩惱を断じ、阿羅漢を得た。

『別訳雑阿含』353 (大正 02 p.490 上) : [釈尊は登場しない] 1 人の比丘が拘薩羅林に住し、昼に房へ入って坐して悪覺を起して貪嗜に依っていた。林中の天神が「これは出家の法式ではない」(散文) と目覺ましめて、「比丘よ、悪欲を恐れてこの林に来たのではないのか。欲樂を貪るな。鳥が塵を払うように比丘も禪思により心の塵を取り払え」(偈文) と誦した。

SN.009-002 (vol. I p.197、南伝 12 p.343) : [釈尊は登場しない] あるとき 1 人の比丘がコーサラ国のとある森の茂みに住していた。その時その比丘は昼日住に行き、眠った。そこへ森に住む天が警覺せしめようと現れて、「起きよ、毒矢に射られているのにどうして眠るのか」(偈文) と誦した。比丘は「勤精進して弛まず、涅槃を望む出家者をなぜ責めるのか」(偈文) と誦した。

『雑阿含』1332 (大正 02 p.367 下、国訳 03 p.383) : [釈尊は登場しない] あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき 1 人の比丘が拘薩羅の人間の林中において昼住に入って眠った。そこへ林中に住む天神が現れて、「比丘よ起きよ、病む時になぜ眠るのか。睡眠何の利かあらんや」(偈文) と誦した。その比丘は

この偈を聞いて精進し、阿羅漢を得た。

『別訳雑阿含』352（大正02 p.489下）：[釈尊は登場しない] 1人の比丘が拘薩羅国を遊行して拘薩羅林で日中に眠っていた。林中の天神が「これは沙門の法ではない、この浄林を汚す」（散文）と目覚ましめて、「比丘よ起きよ、睡眠を貪るなかれ、重病に迫られているのになぜ安眠するのか。……」（偈文）と誦した。

SN.009-003（vol. I p.198、南伝12 p.344）：[釈尊は登場しない] あるときカッサパゴッタ尊者（Kassapagotta）がコーサラ国のある森の茂みに住し、昼日住に行って1人の獵師を教誡した。そこへ森に住む天がカッサパゴッタを警覚せしめようと現れて、「山の難所に行く獵師は智慧が少なく心なき者である。10指の光明を掲げても愚者は義を覚ることはない」（偈文）と誦した。カッサパゴッタは警覚させられた。

『雑阿含』1339（大正02 p.369中、国訳03 p.388）：[釈尊は登場しない] あるとき世尊は王舎城迦蘭陀竹園に住された。そのとき尊者十力迦葉が王舎城の仙人窟に住んでいた。このとき尺只獵師が網をはって鹿を捕らえた。十力迦葉は彼のために指端に火を然して説法したが理解されなかった。そこへ仙人窟中に住する天神が現れ、「深山中の獵師は少智の盲にして無目なり。何ぞ非時の説をなすや。たとい十指を焼くもついに諦を見ない」（偈文）と誦した。尊者十力は黙然として住した。

『別訳雑阿含』359（大正02 p.491上）：[釈尊は登場しない] そのとき尊者十力迦葉は拘薩羅国の栖泥窟の中にいた。そのとき近くで連迦という獵師が鹿を網で捕獲しようとしていた。そこで迦葉は憐愍の情により連迦に説法をしたが、連迦はその教えを理解しなかった。このとき栖泥窟の神が「獵師は深山にいて智慧少なく無目である。あなたが十指より光を出して四諦を説いても彼を分らせることはできない。禪に安住していなさい」（偈文）と誦した。

(1) カッサパゴッタ比丘は他に次の經に登場する。この概要は次のとおりである。

『雑阿含』830（大正02 p.213上、国訳02 p.294）：あるとき世尊は崩伽闍国（Paṅkadhā）の崩伽耆林に住された。そのとき世尊は比丘らに戒相應の法を説き、これを讃歎されたのち舎衛城の祇樹給孤獨園へ向われた。このとき迦葉氏は世尊の説法を喜ばなかったがすぐに後悔の念を生じて、翌日、釈尊の後を追い、「世尊が崩伽闍国の崩伽耆林で比丘らのために戒相應の法を讃歎されたとき喜びを生じなかった。今これを懺悔する」と告白した。世尊は彼を許され、「上座の比丘で戒を重んじる者を私は讃歎する。上座も中年も少年も戒を讃嘆すれば余人もその所見を同じくし、長夜に利益を得るであろう」と説かれた。比丘らは仏の所説を歡喜奉行した。

AN.003-009-090（vol. I p.236、南伝17 p.387）：あるとき釈尊は比丘たちと共にコーサラを遊行して、パンカダー（Paṅkadhā）というコーサラの村に住された。このとき世尊はカッサパゴッタ（Kassapagotta）をはじめとする比丘たちに、学処相應（sikkhāpada-paṭisaññutta）の法話（dhammi kathā）をされたのち、王舎城の靈鷲山へ赴かれた。そのときカッサパゴッタは世尊が学処相應の法を説かれたとき満足しなかったことを反省し、懺悔するために世尊の後を追って王舎城へ向った。世尊は彼を許され、「学を欲し、学を受くるを称讃し、また学を欲せざる他の比丘を学に勧導し、学を欲する他の比丘を時に応じて称讃するそのような長老比丘や中年比丘や新学比丘に親近し、彼らを見習うべし」と説かれた。

この経の内容は戒を説くことを勧める内容であり、本経のカッサパゴッタは無知なる獵師まで教誡しようとするのであるから、これを踏まえているものではないかと考えられる。なおこの経はコーサラ国内のパンカダー (Paṅkadhā) が仏在処となっている。これも本経のシチュエーションと等しい。

またカッサパゴッタは「チャンパー犍度」制定のきっかけとなった比丘である。Vinaya「瞻波犍度」(vol. I p.312)はこのとき彼はカーシ国のヴァーサバ村にいたとしている。『五分律』「羯磨法」(大正 22 p.161 上)は王舎城付近の一住処におり、執事 (tantibaddha、漢訳では「摩摩帝」「帝帝陀羅」と表現されている)を誠実に務めていた、としている。ところがこのときやってきた客比丘といざこざがあって、チャンパーにおられた釈尊に会いに行き客比丘の非なることを訴え、彼の処置が正しい、客比丘が間違っているということから、チャンパー犍度が制定された。これは釈尊の第3回目のアング国訪問の釈尊 66 歳=成道 32 年のことであった(【研究ノート1】「釈尊のアング (Aṅga) 国訪問年の推定」)。

「チャンパー犍度」のカッサパゴッタも律の規定に誠実に対処しようとしたのであって、これまた先に紹介した『雑阿含』830=AN.003-009-090のシチュエーションと似ている。

おそらく『雑阿含』830=AN.003-009-090はチャンパー犍度が制定された釈尊 66 歳=成道 32 年よりも以前の経であろう。

なおカッサパゴッタはこのチャンパー犍度が制定された釈尊 66 歳のときには寺院の執事を務めていた。執事は寺の世話役であってサンガのリーダーではない。したがってこのときにはカッサパゴッタはまだ寺院の最長老にはなっていなかったのであろう。とするならば彼は釈尊の晩年にサンガでの主要な地位につき始めたと考えてよいであろう。

また今の主題となっている SN.009-003 とこの対応経には釈尊が登場しないから、われわれのこれまでの方針にしたがうなら、その説時は「釈尊滅後の経」ということになる。

SN.009-004 (vol. I p.199、南伝 12 p.345) : [釈尊は登場しない] そのとき**多数の比丘たちがコーサラ国のある森の茂みに**住しており、彼らは3カ月の雨安居を終えて遊行に出た。これを**森に住む天神**が悲しんで、「空しい座を見て悲しい。ゴータマの弟子たちはどこへ去ったのか」(偈文)と誦した。そこへ他の神々が現れて、「ある者はマガダへ、ある者はコーサラへ、またある者はヴァッジへと去った。彼らは鹿のように家なく自在に住する」(偈文)と誦した。

『雑阿含』1331 (大正 02 p.367 下、国訳 03 p.382) : [釈尊は登場しない] あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき**多数の比丘**が拘薩羅国の人間を遊行してある林の中で夏安居を過した。ときに**林中に住む天神**が15日の比丘の受歳を知って悲しんだ。他の天神が「受歳は喜ばしいことではないか」(散文)というと、その天神は「空林処を見るのは寂しい。多聞の諸比丘、瞿曇の弟子は、今悉く何処に去るや」(偈文)と誦した。他の天神たちは「摩竭提に至る有り、拘薩羅に至る有り、また金剛地に至り、処処に修して遠離せり、なお野禽獣の如く所樂に随いて遊ぶなり」(偈文)と誦した。

『別訳雑阿含』351 (大正 02 p.489 中) : [釈尊は登場しない] そのとき**衆多の比丘**が拘薩羅国の竹林中で夏安居を過ごし、自恣を終えて遊行に出ようとしていた。このとき**林中の天神**が悲しだったので、他の天神が「あなたはどのようにして悲しんでいるのか。持戒の比丘たちが自恣をしており、会うことができず喜ぶべきではないか」(偈

文)と誦した。その天は「比丘らが去ってしまうと聞見できない、だから悲しいのだ」(偈文)と答えた。他の天神たちは「比丘らは四散して摩竭提、跋耆、毘舍離などに向かう。比丘らは野鳥や鹿のように止まるどころなく、縁務を捨てて空閑処を求め安楽に静座する」(偈文)と誦した。

SN.009-005 (vol. I p.199、南伝 12 p.346) : [釈尊は登場しない] あるときアーナンダはコーサラ国のとある森に住した。そのときアーナンダは長時に (ativela) 在家者に説法して住していた。森に住む天がアーナンダを警覚せしめようとして、「ゴータマよ、心を涅槃に留めて禅思して放逸なるなかれ、雑談はあなたには用はない」(偈文)と誦した。アーナンダは警覚させられた⁽¹⁾。

(1) *Atthakathā* (SN.-A. vol.1 p.292) は、「釈尊般涅槃後、マハーカッサパは次の雨安居に王舎城で第一結集を行うことを告げ、アーナンダには『森に入って一来・不還・阿羅漢の道に精進しなさい』と命じた。アーナンダはコーサラの森に入ったが、人々は『今は師と離れて一人で森に住んでいる。どんなに寂しかろう』といって朝も昼も夕方も悲しむので、アーナンダは世の無常を説き、悲しがってはならないと論じた。このことがここでいわれているのである」としている。片山・相応部 2 p.448

なお天神はアーナンダに「ゴータマよ」と呼びかけている。アーナンダもゴータマ姓であったことがわかる。

SN.009-006 (vol. I p.200、南伝 12 p.346) : [釈尊は登場しない] あるとき尊者アヌルッダ (Anuruddha) がコーサラ国のとある森の茂みに住していた。そのとき彼のもとの妻であり、今は三十三天 (Tāvātimsa-kāyikā devatā) に住むジャーリニーという天女 (devatā Jālinī nāma) が現れて、「一切の愛欲が具わった三十三天に生れて天女たちと楽しもうではないか」(偈文)と誘惑した。アヌルッダは「有身見にとらわれた天女たちは禍である」(偈文)と誦した。さらにジャーリニー天女は、「三十三天の歓喜園を見ない人は楽しみを知らない」(偈文)と誦した。アヌルッダは「すべては無常であってそれが静まることこそ楽である。私は輪廻を越えてもはやどこにも再生しない」(偈文)と誦した。

『雑阿含』1336 (大正 02 p.368 下、国訳 03 p.385) : [釈尊は登場しない] あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき尊者阿那律が拘薩羅国の人間のある林の中に住した。このとき彼の本の善知識であった閻隣尼天神が現れて、「切利天上には五欲の樂が悉く備わっている。本処に生まれんと願え」(偈文)と誘惑した。阿那律は「諸天玉女の衆はこれ皆大苦聚である。私は生死がすでに尽きているから後有を受けない」(偈文)と誦した。閻隣尼天神は阿那律の所説を聞いて歡喜してその場に没した。

『別訳雑阿含』356 (大正 02 p.490 中) : [釈尊は登場しない] そのとき阿那律が拘薩羅国を遊行してある林に止住した。このとき天上の彼のもとの妻が現れて、「あなたは昔天上で琴を奏で、歌や舞をして楽しかった。またもとの三十三天の宮殿に戻って楽しもう」(偈文)と誘惑した。阿那律は「天は苦しみである。苦でないものはない。私にはもはや後有はないから更に天には生れない。私は生死を尽した」(偈文)と誦した。

* アヌルッダは天眼第1と称される比丘であり、ナンディヤ、キンピラ、アーナンダ、デーヴァダッタ、バツディヤ、バグそしてウパーリの7人と一緒に出家し具足戒を受けたとされる。これは釈尊47歳の雨安居後のことである。そしてアヌルッダとナンディヤ、キンピラの3人は常に一緒に行動していた3人組と称してもよい仲間である（次号「モノグラフ」に掲載する【研究ノート16】の【031】の〔6〕参照）。

ところで「涅槃経」ではアヌルッダは世尊が入滅するために禅定に入られたときに、それを入滅と勘違いしたアーナンダにその本当に意味を教えたとされているから、釈尊の滅後も生存したのである。DN.016 *Mahāparinibbāna-s.* (大般涅槃経 vol.II p.156、南伝07 p.144)、*Mahāparinirvāṇasūtra* (p.394、「中村」下 p.690)、『長阿含』002「遊行経」(大正01 p.026中、国訳07 p.107)、法顕訳『大般涅槃経』(大正01 p.205上)、白法祖訳『仏般泥洹経』(大正01 p.172下)、失訳『般泥洹経』(大正01 p.188中)。その他SN.006-002-005 (vol.I p.157、南伝12 p.266)、『雜阿含』1197 (大正02 p.325中、国訳03 p.231)、『別訳雜阿含』110 (大正02 p.413上) 参照。

なお *Thera-g.* v.919 にはアヌルッダ自らがヴェールヴァ村の竹林で入滅するであろうことを誦している。赤沼『固有名詞辞典』はこれは仏滅後5,6年後とするが(p.50右)がその根拠はわからない。

このアヌルッダの偈の内容は *Thera-g.* v.908 にも記されている。また v.915 はかつては三十三天にいたとしている。

SN.009-007 (vol. I p.200、南伝12 p.347) : [釈尊は登場しない] あるとき尊者 **ナーガダッタ** (Nāgadatta) (1) は コーサラ国のある森 にいた。そのとき彼は朝早くに村へ入って乞食し午後遅くに帰って来た。そこで **森に住む天** が警覺せしめようと現れ、「ナーガダッタよ、あなたはあまりにも長く在家者と交わり苦樂を共にしている。そのようなことをしていると悪魔の領域に墮ちるぞ」(偈文) と誦した。彼は警覺させられた。

『雜阿含』1342 (大正02 p.369下、国訳03 p.389) : [釈尊は登場しない] あるとき世尊は 舎衛国の祇樹給孤独園 に住された。そのとき尊者 **那迦達多** は 拘薩羅国 の 人間 のある林中に住して、在家や出家との交友を頻りにしていた。そこで **林中に住む天神** が、「比丘よ、朝早くに出でて暮れに迫りて林に還り、道俗相習近し苦樂必ず同じく安んず、家の放逸を起し而して魔の自在に随わんを恐る」(偈文) と誦した。那迦達多はこれを聞いて専精に思惟し、諸の煩惱を断じて阿羅漢を得た。

『別訳雜阿含』362 (大正02 p.491中) : [釈尊は登場しない] そのとき 拘薩羅国 に **龍与** という **年少の比丘** が林中に止住しており、朝早くに聚落に入って夕暮れになって帰った。そこで **天神** が「在家者の生活のごときだ。在家の生活に貪著して清淨行を損じてはならない」(偈文) と誦した。

- (1) ナーガダッタ (那迦達多) という比丘はこのほかに『雜阿含』566 (大正02 p.149上、国訳02 p.154) と『雜阿含』567 (大正02 p.149下、国訳02 p.155) にも登場する。この2経に対応するパーリは前者がSN.041-005 (vol.IV p.291、南伝15 p.442) であり、後者がSN.041-007 (vol.IV p.295、南伝15 p.449) であるが、ここではナーガダッタではなくそれぞれ尊者カマーブー (Kāmabhū)、尊者ゴータッタ (Godatta) とされている。「懲罰羯磨」論文ではパーリの方を信頼し、76.4 [チッタ (Citta) 居士] 「このころより優婆塞の手本と讃えられるようになる」の以後経として処理済みであるが、パーリと漢訳の両方とも仏在処も記されず釈尊も登場しないから釈尊滅後の経である可能性が高い。先の結

論は76.4の以後経ということであるから、先の結論とも齟齬しない。

SN.009-008 (vol. I p.201、南伝12 p.348) : [釈尊は登場しない] そのとき1人の比丘がコーサラ国のとある森の茂みに住していた。ときに彼はある在家の家に入り浸っていたので森に住む天が比丘を警覺せしめようと主婦の姿に化作して現れ、「あちらこちらであなたと私のことを陰口するがどうしてだろうか」(偈文)と誦した。比丘は「世間には不快なことばが多い。苦行者は堪え忍ばなくてはならない。風にも驚く鹿のように声に驚いては修行を成就することはできない」(偈文)と誦した。

『雜阿含』1344 (大正02 p.370中、国訳03 p.391) : [釈尊は登場しない] あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき1人の比丘が拘薩羅国の人間のある林中に住し、長者の婦人と遊戯して悪評をたてられ、それを苦にして自殺しようと考えた。このとき林中に住む天神が長者の女身に化作して現れ、「還俗してあい娛樂しよう」(散文)と言った。比丘は「悪名が上がったので自殺する」(散文)と答えた。天神は元の姿を現わし、「多く悪名を聞くと雖も苦行者はこれを忍ぶ、苦もて自害すべからず、また悩みをも起すべからず。もしあなたが本当のことを知っているならば諸天もまた知っている」(偈文)と諫めた。比丘は天神に開悟させられ、精進して諸の煩惱を断じて阿羅漢を得た。

『別訳雜阿含』364 (大正02 p.491下) : [釈尊は登場しない] そのとき1人の比丘が拘薩羅国の林中に止住していた。彼には長者の親友がいて、その長者には1人の若い娘がおり、あるとき彼がこの端正な娘と言葉を交していたので人々が「非法である」(散文)と非難した。彼はこれを悩んで自らを罰して自殺しようとした。これを知った天神がその娘に化作して現れ、「出家者は他の譏りを忍受しなければならない。あなたには罪はない。賢聖や諸天はみなそれを知っている」(偈文)と慰めてその場に没した。比丘は昼夜に精進し煩惱を断じて阿羅漢を成じた。

SN.009-009 (vol. I p.201、南伝12 p.349) : [釈尊は登場しない] あるとき1人のヴァッジ族の比丘がヴェーサーリーのとある森の茂みに住していた。そのときヴェーサーリーでは夜を徹する祭りが行われていて、その比丘はその楽器の鳴り響く音を聞いて、「森に捨てられた材木のように私たちは阿練若に独りで住んでいる。私たちよりも不幸な者はなかろう」(偈文)と誦した。森に住む天がこの比丘を警覺せしめようと現れて、「あなたは森に捨てられた材木のように独りで住んでいる、多くの人は生天者を羨むようにあなたを羨む」(偈文)と誦した。

『雜阿含』1340 (大正02 p.369下、国訳03 p.388) : [釈尊は登場しない] あるとき世尊は王舎城迦蘭陀竹園に住された。このとき尊者金剛子⁽¹⁾が巴連弗邑のある林に住んでいた。そのとき人々は夏の4ヵ月間を過ぎて橋牟尼大会⁽²⁾を開いていた。金剛子はこれを聞いて不快心を起こし、「世間は楽しそうだが私は見捨てられた枯れ木のような。このように苦しむ者は他にはないであろう」(偈文)と誦した。これを知った林中に住む天神が現れて、「見捨てられた枯れ木のようにだけれども、地獄で

人道を羨むように三十三天を願う人に羨まれる」（偈文）と誦した。金剛子は勧発されて精進し、煩惱を断じて阿羅漢を得た。

(1) 比丘の名のような表現をされているが‘vajjiputta’の訳と理解する。

(2) 国訳者はこれに「sabbaratti-cāra、夜通しの祭事」と註記している。「橋牟尼」（『別訳雑阿含』では「拘蜜提大会」と表現されている）はコームディー（komudī）の漢訳語であり、カッティカ月の満月の日（15日）、すなわち雨期の4ヶ月の終わりの日にあたる。白蓮華（Kumuda）がこの頃に花をつけることからこのように呼ばれる。【資料集5】「原始仏教聖典における釈尊の雨安居記事」「モノグラフ」第10号 p.083を参照されたい。

『別訳雑阿含』360（大正02 p.491中）：[釈尊は登場しない] そのとき**跋耆子**が**拘薩羅国**を遊行して林中に止住していた。そのとき彼は人々が拘蜜提大会で7日7夜にわたり騒いでいるのを見て、「私は樹間に捨てられた木のように」と嘆いた。これを知った**天神**が「どうしてそのように思うのか、地獄が天を羨むように天はあなたを羨む」（偈文）と誦した。

SN.009-010（vol. I p.202、南伝12 p.350）：[釈尊は登場しない] あるとき**1人の比丘**が**コーサラ国**の**とある森の茂み**に住していた。この比丘は以前は誦經に励んでいたが今は黙然として住していた。そこで**森に住む天**が「人はそれを聞いて喜ぶのにあなたはどのようにして法句を誦さないのか」（偈文）と**なじった**。比丘は「今は離欲した。よき人は智慧によって何物をも捨てよ教えられた」（偈文）と答えた。

『雑阿含』1337（大正02 p.368下、国訳03 p.386）：[釈尊は登場しない] あるとき世尊は**舎衛国祇樹給孤独園**に住された。そのとき**1人の比丘**が拘薩羅国の人間の林中で誦經し講説して阿羅漢果を得たが、後には誦經講説しなくなった。そこで**林中に住む天神**が「あなたは先には誦經し講説したが、今は法句において寂然として所説なし」（偈文）と**なじった**。比丘は「今は離欲した。道を知り已に備わったのだから聞見の道を用いない。世間の諸の聞見、無知を悉く放捨した」（偈文）と誦した。天神はこの所説を聞いて歡喜して**没した**。

『別訳雑阿含』357（大正02 p.490中）：[釈尊は登場しない] そのとき**1人の比丘**が**拘薩羅国のある林**に住し、昼夜に誦習し精進して阿羅漢を得たので誦習しなくなった。このとき**天神**が現れて、「常に法句を誦していたのにどうして止めてしまったのか。なぜ黙っているのか」（偈文）と**なじった**。比丘は「すでに離欲して法句の義を成就した。どうして文字を用いる必要があるか」（偈文）と答えた。

SN.009-011（vol. I p.203、南伝12 p.351）：[釈尊は登場しない] あるとき**1人の比丘**が**コーサラ国**の**とある森の茂み**に住していた。そのとき比丘は昼日住に行き、悪不善の思惟（欲尋、瞋尋、害尋）を起した。そこで**森に住む天**が警覺せしめようとして現れ、「あなたは不如理に作意している。不如理の思惟を捨てよ。師と法と僧と戒から退転するな。そうすれば喜びを得るであろう」（偈文）と誦した。比丘は警覺させられた。

『雑阿含』1334（大正02 p.368中、国訳03 p.384）：[釈尊は登場しない] あるとき世尊は**舎衛国祇樹給孤独園**に住された。そのとき**1人の比丘**が**拘薩羅国**のある林中で昼の正受に入って不正の思惟を起した。そこへ**林中に住む天神**が現れて、

「どうして不正の思惟をなして寝食するのか。仏法僧を尊崇し、淨戒をたもち、常に隨喜の心を生せば速やかに苦邊を究竟するであろう」（偈文）と誦した。比丘は勸発され、精進して諸の煩惱を尽して阿羅漢を得た。

『別訳雜阿含』354（大正02 p.490上）：〔釈尊は登場しない〕1人の比丘が拘薩羅林に住し、昼に房へ入って坐し、欲において清淨想を起した。林の天神がその思いを知り、「あなたは欲覺に吞まれている。欲淨想にとらわれている。仏と法と僧と戒を念じて歡喜心を得、苦の邊際を知るべし」（偈文）と誦した。

SN.009-012（vol. I p.203、南伝12 p.352）：〔釈尊は登場しない〕あるとき1人の比丘がコーサラ国のある森の茂みに住していた。そのとき森に住む天が現れて、「日の盛りの時、鳥とどまって動かず。大林が鳴って私を恐れさせる」（偈文）と誦した。比丘は「日の盛りの時、鳥とどまって動かず。大林が鳴って私に楽しさが起こる」⁽¹⁾（偈文）と誦した。

(1) 同一の偈がSN.001-002-005にもある。

『雜阿含』1335（大正02 p.368中、国訳03 p.385）：〔釈尊は登場しない〕あるとき世尊は舍衛国祇樹給孤独園に住された。そのときある比丘が拘薩羅の林中において昼の正受に入って楽しまず、「日中に鳥たちは静かである。空野にたちまち声が起こり私を恐れさせる」（偈文）と誦した。その時林中に住む天神が現れ、「日中に鳥たちは静かである。空野にたちまち声が起こる。あなたは楽しまないが不樂を捨てて正受を修すべし」（偈文）と説いた。この比丘はこれを聞いて精進し、煩惱を捨てて阿羅漢を得た。

『別訳雜阿含』355（大正02 p.490中）：〔釈尊は登場しない〕そのとき1人の比丘が俱薩羅国の林中において日中を楽しまなかった。この比丘は「日中は暑く樹木がうっとうしい。鳥は暑さに飛ぼうともしない。たちまち起こる声に私は怖れを抱く」と誦した。これを聞いた林の天神が、「日中は暑く樹木がうっとうしい。鳥は暑さに飛ぼうともしない。たちまち起こる声をあなたは楽しむべきである。ここが恐ろしいわけがない」（偈文）と説いた。

* パーリと対応する『雜阿含』と『別訳雜阿含』では主客が逆転している。したがってパーリでは比丘は警覺させられるのではないような形になっている。「森相應」に含まれる經のだいたいの趨勢としては漢訳の方が正しいと思われるが、このままにしておく。

SN.009-013（vol. I p.203、南伝12 p.352）：〔釈尊は登場しない〕あるとき多くの比丘たちがコーサラ国のある森の茂みに住していた。彼らは掉挙して心騒がしく、無駄口をたたいて心を散乱させていた。そこへ森に住む天が比丘らを警覺せしめようとして現れて、「むかしゴータマの弟子たちは安樂に住していた。無欲で食を乞い、無欲で臥坐具を乞い、世の無常を知って苦を寂滅した。今は他の家の富に心奪われ食べては寝ている。私は不放逸に住する人に歸依をなす」⁽¹⁾（偈文）と誦した。比丘らは警覺させられた。

(1) SN.002-003-005（vol. I p.061、南伝12 p.103）参照。そこではジャントゥ天子（Jantu devaputta）となっている。

『雜阿含』1343（大正02 p.370上、国訳03 p.390）：〔釈尊は登場しない〕ある

とき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき多くの比丘が拘薩羅国の人間に在って談笑し、心が定まらずにいた。そこへ林中止住の天神が現れて、比丘らに「先に瞿曇の正命の比丘らは無常心をもって乞食し床臥を受けた。今の沙門は処々に飲食を求め他家に遊んで真の沙門ではない。僧迦梨を着ていても老牛の尾を曳くがごとしである」（偈文）と忠告した。ある比丘が「あなたは私を厭うのか」（散文）と問うと、天神は答えて「その名姓をさすのではない。衆に説くのである。精進する者には帰依恭敬する」（偈文）と誦した。その比丘は天神の勸発を受けて专精し、阿羅漢を得た。

『別訳雑阿含』363（大正02 p.491下）：[釈尊は登場しない] 衆多の比丘が俱薩羅国の林中に止住し、落ち着きがなく停まるところがなかった。そのとき天神が現れて比丘らに、「瞿曇の弟子たちは正命にして自活した。常に無常を覩じて乞食し坐臥した。（しかしあなたがたは）世俗人のごとく食べ終って睡眠し、他家に親近している。僧迦梨を着ていても老牛の駕犁のごときである」（偈文）と忠告した。比丘らは「あなたは私たちを譏めるのか」（散文）と問うた。天神は答えて「種姓や名字をいうのではない。もしよく精進するならば礼足する」（偈文）と誦した。

SN.009-014（vol. I p.204、南伝12 p.353）：[釈尊は登場しない] あるとき1人の比丘がコーサラ国のある森の茂みに住していた。そのときその比丘は食後に蓮池の中に入って紅蓮華の香を嗅いだ。このとき森に住む天が警覺せしめんと現れて、「あなたは蓮華の香を盗んだ」（偈文）と誦した。比丘が「取り去ったのでもなく折ったのでもなく離れて嗅いだけなのにどうして盗人と呼ぶのか。それなのに蓮の根を掘って食う人をどうして盗人と呼ばないのか」（偈文）と反論すると、天は「罪なく、常に清浄を求める人は毛端ほどの悪でも雲ほどに見える」（偈文）と答えた。比丘は「あなたは私を哀愍するのだ。このような時にはまた私に語れ」（偈文）と誦した。天は「比丘よ、あなたは自分でどのように善趣に行くかを知らなければならない」（偈文）と誦した。比丘は警覺させられた。

『雑阿含』1338（大正02 p.369上、国訳03 p.387）：[釈尊は登場しない] あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき1人の比丘が拘薩羅国の人間のある林中に住していた。そのとき彼は眼を患い、師の助言で池の側に行って鉢曇摩花の香を嗅いだ。そこへ池に住む天神が現れて、「どうして花を盗むのか、あなたは盗人である」（散文）と非難した。比丘は「壊しもしていない、奪ってもいない、遠くで香を嗅ぐだけでどうして盗人というのか」（偈文）と反論した。天神は「あなたは与えられないものを取ったのだ。だから盗人である」（偈文）と答えた。そのとき1人の男が蓮根をとっていった。比丘は「あなたはなぜ遮さないのか」（偈文）と問うた。天神は「黒衣は墨にては汚れないが珂貝は小なりとも現れる。毛髪のごとき悪も泰山のごとく見なければならぬ」（偈文）と答えた。比丘は「常にこのような偈を説いてほしい」（偈文）と誦した。天神は「私はあなたの奴ではない。あなた自身が饒益事を知りなさい」（偈文）と誦した。比丘は精進して煩惱を断じ阿羅漢を得た。

『別訳雑阿含』358（大正02 p.490下）：[釈尊は登場しない] そのとき一人の比丘が拘薩羅国のある林に依止していた。彼は眼病を患ったので医師を呼んで診てもらおうと、「蓮華の匂いを嗅げばよくなる」（散文）と言った。そこで彼が池で蓮華の匂いを嗅いでいると天神が現れて、「匂いを盗んだ。大仙よあなたはなぜ香を盗むのか」（偈文）と非難した。比丘は「蓮華は池中に生え、私は根茎を傷つけたわけではない。偷盗には当たらない」（偈文）と反論した。天神は「香といえども檀越が布施しなければそれを盗みという」（偈文）と主張した。そこへ他の人がやってきて蓮根を勝手に盗んでいった。ところが天神が非難しないので比丘はその理由を問うた。すると天神は「あの人は常に悪業をなす者であるが、あなたは煩惱を断じようとする者である。あたかも黒い服に汚れがついても目立たないが、白い服につけばすぐに分かるようなものだ」（偈文）と答えた。比丘は「天よ、あなたは私を利益してくれた。しばしば私を覚悟してくれ」（偈文）と誦した。天神は「損益はあなた自身が知りなさい」（偈文）と誦した。

[2] 次にパーリに対応経のない同じ構造の漢訳経を紹介する。

『雑阿含』1341（大正02 p.369下、国訳03 p.389）：[釈尊は登場しない] あるとき世尊は舎衛国の祇樹給孤独園に住された。そのとき一人の比丘が拘薩羅国のある林の中に住していたが持戒を楽しみ功德を増長させることができなかった。そのとき林に住む天神が現れて、「あなたは一向に持戒し、多聞を修習していない。独り静かに禅三昧し、閑居して遠離を修せよ」（偈文）と誦した。彼はこれを聞いて、諸の煩惱を断じて阿羅漢を得た。

『別訳雑阿含』361（大正02 p.491中）：[釈尊は登場しない] そのとき一人の比丘が拘薩羅国の林に止住していた。彼は戒を持することに満足してそれ以上を求めなかった。そこへ天神が現れ、「あなたは未だ諸漏を尽くさず、智を用いて自ら損滅している。凡夫の法を遠離して菩提の樂を得よ」（偈文）と誦した。

『雑阿含』1345（大正02 p.370中、国訳03 p.391）：[釈尊は登場しない] あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき見多比丘が拘薩羅国の人間の林中に住して糞掃衣を着ていた。このとき梵天王が700の梵天と共に宮殿に乗って彼のもとに現れて恭敬礼拝した。そのなかの一天子が「三明を得、不動の法を得て、糞掃衣のみをつける。700の梵天子、乗宮し来りて奉詣せり、生死の有辺を見て、今、有の岸を度れるものを礼せり」（偈文）と誦した。その天神は見多比丘を讚嘆して没した。

* これはここに納めるべきものかどうか問題なきにしもあらずであるが、一連の経中にあるのでとりあえずここに収載した。

『雑阿含』1346（大正02 p.370下、国訳03 p.392）：[釈尊は登場しない] あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのときある比丘が拘薩羅国の人間の林中にいたが、夜になって疲れて寝てしまった。そのとき林中に住む天神が、「比丘よ、起きよ。何が故に睡眠に著するや、睡眠に何の義有らん。禅を修し睡眠するこ

となかれ」（偈文）と諫めた。比丘は「承服しない。身体が疲れるのには理由がある、夜には眠くなるものだ」（偈文）と答えた。天神は「あなたは修閑を得たのだ。それを退没させてはならない」（偈文）と諫めた。天神はこの比丘を覚悟させ、比丘は精進して阿羅漢を得た。天神は「比丘はまさにこのようであるべきだ。もしあなたが病気の時には私が良薬を与えよう」（偈文）と誦し、その場に没した。

『雑阿含』1349（大正02 p.371中、国訳03 p.395）：[釈尊は登場しない] あるとき世尊は拘薩羅国の人間を遊行して林中に住された。そのとき**林中に住む天神**が優楼鳥⁽¹⁾が仏足跡を踏もうとするのを見て、「如来の跡を乱し、我が念仏の境を壊すこと勿れ」（偈文）と誦した。そして天神は黙ってその場から没した。

(1) 国訳一切経は「Ulūka 鵲鵲」とする。‘ulūka’はフクロウである。ここでは固有名詞ではなく鳥のフクロウと解しておく。

『雑阿含』1350（大正02 p.371中、国訳03 p.395）：[釈尊は登場しない] あるとき世尊は拘薩羅国の人間を遊行して林中の波吒利（pāṭali）の樹下に住された。そのとき**林中に住む天神**が、「今日、風がにわかになり、波吒利樹を吹き、波吒利の花が落ちて如来を供養される」（偈文）と誦し、黙然として住した。

『雑阿含』1351（大正02 p.371下、国訳03 p.395）：[釈尊は登場しない] あるとき世尊は王舎城の迦蘭陀竹園に住された。そのとき**多数の比丘たちが支提山の側に**住んでおり、みな阿練若住者で糞掃衣を着、乞食を行っていた。そこへこの**山に住む山神**が現れ、「鞞提山（Vediya）の孔雀が時に随って妙声を出して、乞食比丘・糞掃衣者・依樹坐者を覚ます」（偈文）と誦し、黙然として住した。

『雑阿含』1352（大正02 p.371下、国訳03 p.396）：[釈尊は登場しない] あるとき世尊は王舎城の迦蘭陀竹園に住された。そのとき**多数の比丘らが支提山の側に**住んでおり、みな阿練若住者で糞掃衣を着、乞食を行っていた。そのとき那婆佉多河の岸が崩れて營事の3人の比丘を殺した。そこへこの**山に住む山神**が現れ、「糞掃衣比丘・依樹下比丘は慎んで造立を営むなかれ」（偈文）と誦し、黙然として住した。

『雑阿含』1359（大正02 p.372下、国訳03 p.399）：[釈尊は登場しない] あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき**ある比丘が拘薩羅国**の人間の林中におり、「もし好劫貝を得られれば衣を作り、善法を樂修するのだが」（散文）と考えた。これを**林中に住む天神**が見て、痩せ衰えて骨だらけとなった身体を化作し、「比丘は昼に劫貝の七肘、広さ六尺なるを思う。夜はどんな思いを起すのであろう」（偈文）と誦した。比丘は恐れを生じて、「止めよ、止めよ、髡を須いず。今、糞掃衣を著せり。昼に骨鑠の舞を見れば、知る夜は復た何をか見ん」（偈文）と誦した。比丘は精進して、諸の煩惱を断じて阿羅漢を得た。

『雑阿含』1362（大正02 p.373中、国訳03 p.401）：[釈尊は登場しない] あるとき世尊は舎衛国祇樹給孤独園に住された。そのとき拘薩羅国の人間のある林中に住する**比丘**のまえに**天神**が現れ、「鵲鳥の当に胡麻・米・粟等を積聚すべく山頂の樹

上の高頭なるところに巢窟を作る。雨が降っても安らかに飲食して宿る」（偈文）と誦した。比丘はこれを聞いて目を覚まされ、「凡夫も善法を積み、三宝を恭敬せば身壞命終の時も神心安樂に資す」（偈文）と誦し、専精に思惟して、諸の煩惱を除いて阿羅漢を得た。

【4】有偈篇の神たちの統計

以上、パーリ SN.の有偈篇中の「天相應」「天子相應」「森相應」に含まれる経とそれに対応する『雑阿含』『別訳雑阿含』の経の概要を紹介した。

これからこれらに登場する神たちを考察するのであるが、その便のためにいくつかの項目を設定して統計をとってみたい。

[1] 統計に関する凡例は以下のとおりである。

(1) 仏在処

経における釈尊の在処である。**祇園精舎**と**その他**と**不記載**に分類する。ここに収められている経が史実でないなら、祇園精舎で処理されることが多いだろうと考えるからである。

祇園精舎には単に「舎衛城」とするものも含める。ただし「コーサラ国」はその他とする。**その他**は祇園精舎、舎衛城以外の仏在処である。さまざまな場所があり、それは考察の中で紹介する。**不記載**は仏在処が記されていないものである。パーリには表面上は記されていないとも、前経の仏在処が省略されていると判断される場合が多いので、このような場合は概要中に（ ）のなかに記入した。したがってこのようなものは不記載扱いになっていない。

(2) 釈尊

経中に釈尊が**登場**するかしない（**不登場**）かを示した。

登場はいうまでもなく経中に釈尊が登場するものである。パーリは多くが偈文のみで細かな記述が省略されている。したがって地の文章中に釈尊が登場ことはほとんどないが、偈が神と釈尊の問答である場合は登場として処理した。

不登場は経中に釈尊が登場しないものである。この場合は概要の冒頭に「釈尊は登場しない」と記しておいた。

(3) 前文

神と釈尊の偈による対話の導入部分（前文）が**有るか無いか**を分類した。われわれのいう「六事」⁽¹⁾が記される場合はもちろん、ただ「傍らに立った天は次のように言った」も前文と見なした。SN.有偈篇に含まれる経の編集意図や編集経過を調査する時に役立つと考えたからである。

(1) 「モノグラフ」21号（2017年4月）に掲載した【資料集8】「パーリ『経蔵』の六事と仏在処一覧」参照。

(4) 結文

神と釈尊の偈による対話の結末部分（結文）が**有るか無いか**を分類した。「無」としたのは偈でぷつんと切れ、対話の後にその神がどうこうしたというような結末が記されないものである。前項のような意図とともに、(13)の「婆羅門を見た」の有無の処理に資すると考えたからである。

(5) 神を示す語

パーリには神を表わす言葉に *devatā* と *devaputta* がある。前者は**天**、後者は**天子**とした。まれにはこれ以外の言葉で表現されることがあるのでこれは**その他**と分類した。

漢訳経典では神は**天**、**天子**、**天神**と表わされる。まれにはこれ以外の言葉で表現されることもあるのでこの場合は**その他**と分類した。

その他の具体的な言葉は註記した。なお漢訳では「天女」は天や天子、天神とは別の言葉であるが、パーリでは天女も *devatā* であるので**その他**とはならない。

(6) 固有名詞

当該の神に個別の固有名詞が付せられている**(有)**か**いない(無)**かを示した。「有」と処理した具体的な固有名詞は註記した。なお浄居天とか梵天のように天の種類が示されていてもこれは固有名詞ではないから、このようなものは「無」とした。

(7) 現れる時刻

神が現れる時間がきちんと記されているものを**夜更け**と**昼間**と**その他**に分類した。「夜更け」「昼間」の表現にもヴァリエーションがあるがこれについては概要を参照されたい。「その他」の具体的なことについては註記した。また明記されていないものは**不記載**とした。

次の項目の「辺り一面を輝かせて」という表現があるものはその出現が夜であることは明白であるが、これだけで時刻を表わす表現がない場合には**不記載**として処理した。

(8) 現れ方

神が現れる現れ方を**輝かせて**と**不記載**に分類した。「輝かせて」はもちろんその要をとったものであり、詳細な表現は【1】「*SN.001 Devatā-samyutta* (天相応) に含まれる経とその対応漢訳経」の冒頭を参照されたい。

(9) 神の相手

登場した神が対話する相手を**釈尊**と**比丘**と**その他**と**不記載**に分類した。パーリには偈のみが投げ出されている場合が多く、その元テキストには偈の話者も記されていない。しかしながら「南伝大蔵経」はこれを推定してあり、その処理は妥当だと思われるので概要もそれにしたがった。「比丘」は不特定の比丘であり、阿難など固有名詞がある比丘は「その他」に分類した。「その他」の詳細は註記した。

(10) 去り方

神が去る去り方を**没した**と**天宮に還った**と**その他**と**不記載**に分類した。元テキストの表現にはにはさまざまヴァリエーションがあるが、「没した」というのは「その場で消えてなくなった」というような表現一切を含み、『雑阿含』の「歡喜して去った」もこれに分類した。「天宮に還った」は「宮に還った」とするものも含む。これによって当該の天がどこに住しているかが知られるかもしれないという意図によるものである。

「その他」は註記した。「不記載」はこれが記されないものである。

(11) 神の住処

天の住処が知られるものを**天**と**森**と**不記載**に分類した。「天」にはその住処が知られる三十三天、無煩天あるいは月天子や日天子などを分類した。「森」には池や聚落など森以外の地上の住処も含めた。「不記載」は経の文章からはその神の住処が知られ得ないものである。

(12) 現れる目的

神が現れる目的を対話の内容から**釈尊に質問**と**自内証**と**比丘の警覚**と**その他**に分類した。

「釈尊に質問」は偈の文章が疑問形のものであって、これを意識して概要中には「尋ねた」と記した。「自内証」は神が自分の自内証を釈尊に報告しそれを釈尊に評価してもらうために現れるものであるが、釈尊がこれに偈をもって答えられるものと、散文で「善哉」とされるもの、一方的な神の偈のみのもを含める。「比丘の警覚」は例えば怠惰な比丘を神が警覚しようとして現れるものである。「その他」については註記した。

(13) 婆羅門を見た

「婆羅門を見た」という偈が含まれるかどうかを**有・無**に分類した。これについては【1】「SN.001 *Devatā-samyutta* (天相応) に含まれる経とその対応漢訳経」の冒頭に記した。

[2] 経に関する基礎的統計表は次のようになる。これを〔第1表〕とよぶ。

〔第1表〕経に関する基礎的統計

	SN.				雑阿含				別訳雑阿含				総計
	天	天子	森	計	天	天子	森	計	天	天子	森	計	
経数	81	30	14	125	77	27	22	126	77	28	14	119	370
仏在処													
祇園精舎	76	20	0	96	70	24	16	110	71	26	0	97	303
その他 ⁽¹⁾	5	9	0	14	7	3	6	16	6	2	0	8	38
不記載	0	1	14	15	0	0	0	0	0	0	14	14	29
釈尊													
登場	78	29	0	107	77	27	0	104	77	28	0	105	316
不登場	3	1	14	18	0	0	22	22	0	0	14	14	54
前文													
有	27	30	14	71	77	27	22	126	77	28	14	119	316
無	54	0	0	54	0	0	0	0	0	0	0	0	54
結文													
有	1	5	11	17	77	27	22	126	77	28	1	106	249
無	80	25	3	108	0	0	0	0	0	0	13	13	121

(1) 祇園精舎以外の仏在処は次のとおりである。

天相応

- SN.001-002-010 (vol. I p.008、南伝 12 p.011) : 王舎城の温泉精舎
『雑阿含』1078 (大正 02 p.281 下、国訳 03 p.089) : 王舎城迦蘭陀竹園
『別訳雑阿含』017 (大正 02 p.379 上) : 王舎城迦蘭陀竹林
SN.001-004-007 (vol. I p.026、南伝 12 p.036) : 釈迦族のカピラヴァットウの大林
『雑阿含』1192 (大正 02 p.323 上、国訳 03 p.224) : 迦毘羅衛の迦毘羅衛林
『別訳雑阿含』105 (大正 02 p.411 上) : 釈翅の迦毘羅衛の林
SN.001-004-008 (vol. I p.027、南伝 12 p.037) : 王舎城のマンダクッチの鹿野苑
『雑阿含』1289 (大正 02 p.355 上、国訳 03 p.338) : 王舎城の金婆羅山の金婆羅鬼神住処の石室
『別訳雑阿含』287 (大正 02 p.473 下) : 王舎城の毘婆山側の七葉窟
SN.001-004-009 (vol. I p.029、南伝 12 p.041) : ヴェーサーリーの大林重閣講堂
『雑阿含』1274 (大正 02 p.350 上、国訳 03 p.322) : 毘舍離の獼猴池の側にある重閣講堂
『別訳雑阿含』272 (大正 02 p.469 上) : 毘舍離の北の獼猴彼岸の精舎
SN.001-004-010 (vol. I p.030、南伝 12 p.041) : ヴェーサーリーの大林重閣講堂
『雑阿含』1273 (大正 02 p.349 下、国訳 03 p.321) : 王舎城の山谷精舎
『雑阿含』1270 (大正 02 p.348 下、国訳 03 p.318) : 王舎城の山谷精舎
『別訳雑阿含』269 (大正 02 p.468 中) : 王舎城の耆尼山中
『別訳雑阿含』271 (大正 02 p.469 上) : 王舎城の耆尼山

天子相応

- SN.002-002-003 (vol. I p.052、南伝 12 p.088) : 王舎城迦蘭陀竹園 17
ただし対応経の『雑阿含』1301 (大正 02 p.358 上、国訳 03 p.349) と『別訳雑阿含』300 (大正 02 p.476 下) は舎衛国祇樹給孤独園
SN.002-002-004 (vol. I p.052、南伝 12 p.089) : (王舎城の迦蘭陀竹園)
ただし対応経の『雑阿含』597 (大正 02 p.160 上、国訳 03 p.309) と『別訳雑阿含』182 (大正 02 p.439 上) は舎衛国祇樹給孤独園
SN.002-002-005 (vol. I p.053、南伝 12 p.089) : (王舎城の迦蘭陀竹園)
ただし対応経の『雑阿含』1316 (大正 02 p.361 中、国訳 03 p.361) と『別訳雑阿含』315 (大正 02 p.479 下) と『雑阿含』1269 (大正 02 p.348 下、国訳 03 p.317) は舎衛国の祇樹給孤独園
SN.002-002-006 (vol. I p.053、南伝 12 p.090) : (王舎城の迦蘭陀竹園)
ただし対応経の『雑阿含』586 (大正 02 p.155 下、国訳 03 p.296) は舎衛国祇樹給孤独園
SN.002-002-007 (vol. I p.053、南伝 12 p.090) : (王舎城の迦蘭陀竹園)
ただし対応経の『雑阿含』596 (大正 02 p.159 下、国訳 03 p.308) と『別訳雑阿含』181 (大正 02 p.439 上) は舎衛国祇樹給孤独園
SN.002-002-008 (vol. I p.054、南伝 12 p.091) : サーケータ (Sāketa) のアンジャナ林 (Añjanavana)
『雑阿含』585 (大正 02 p.155 中、国訳 03 p.295) : 釈氏の優羅提那塔所
『別訳雑阿含』169 (大正 02 p.436 中) : 釈翅鳩羅脾大斯聚落
SN.002-002-009 (vol. I p.054、南伝 12 p.092) : 王舎城因縁
SN.002-002-010 (vol. I p.055、南伝 12 p.093) : (王舎城因縁)
SN.002-003-010 (vol. I p.065、南伝 12 p.110) : 王舎城迦蘭陀竹園

- 『雑阿含』1308 (大正 02 p.359 中、国訳 03 p.354) : 王舎城毘富羅山
 『別訳雑阿含』307 (大正 02 p.477 下) : 王舎城迦蘭陀竹林
 『雑阿含』1271 (大正 02 p.349 上、国訳 03 p.319) : 王舎城の山谷精舎
 ただし対応経の『別訳雑阿含』270 (大正 02 p.468 下) は舎衛国祇樹給孤独園 (この経は阿難が四句の法を説いたという内容であるが、これはもともと王舎城にいた天女が説いたものとされている)
 『雑阿含』1272 (大正 02 p.349 中、国訳 03 p.320) : 王舎城の山谷精舎
 森相応
 『雑阿含』1339 (大正 02 p.369 中、国訳 03 p.388) : 王舎城迦蘭陀竹園
 『雑阿含』1340 (大正 02 p.369 下、国訳 03 p.388) : 王舎城迦蘭陀竹園
 『雑阿含』1349 (大正 02 p.371 中、国訳 03 p.395) : 拘薩羅国
 『雑阿含』1350 (大正 02 p.371 中、国訳 03 p.395) : 拘薩羅国
 『雑阿含』1351 (大正 02 p.371 下、国訳 03 p.395) : 王舎城の迦蘭陀竹園
 『雑阿含』1352 (大正 02 p.371 下、国訳 03 p.396) : 王舎城の迦蘭陀竹園
 森相応に収められる経には釈尊は登場しない。したがって SN. と『別訳雑阿含』には仏在処は記されず、記されるのは『雑阿含』のみである。

[3] 経中に登場する神に関する基礎的統計表は次のようになる。これを [第2表] とよぶ。

[第2表] 神に関する統計

	SN.				雑阿含				別訳雑阿含				総計
	天	天子	森	計	天	天子	森	計	天	天子	森	計	
経数	81	30	14	125	77	27	22	126	77	28	14	119	370
神を示す語													
天	79	0	14	93	2	1	0	3	70	8	1	79	175
天子	0	30	0	30	70	24	1	95	3	18	0	21	146
天神	0	0	0	0	0	1	21	22	0	1	11	12	34
その他 (1)	2	0	0	2	5	1	0	6	4	1	2	7	15
固有名詞													
有 (2)	9	30	0	39	5	22	0	27	4	24	0	28	94
無	72	0	14	86	72	5	22	99	73	4	14	91	276
現れる時刻													
夜	12	7	0	19	73	22	0	95	42	4	0	46	160
昼	0	0	10	10	0	0	9	9	0	0	9	9	28
その他 (3)	1	0	0	1	1	0	0	1	1	1	0	2	4
不記載	68	23	4	95	3	5	13	21	34	23	5	62	178
現れ方													
輝かせて	13	7	0	20	74	24	0	98	73	23	0	96	214
不記載	68	23	14	105	3	3	22	28	4	5	14	23	156

神の相手													
釈尊	75	29	0	104	75	27	1	103	75	28	0	103	310
比丘	0	1	9	10	1	0	15	16	1	0	10	11	37
その他 (4)	1	0	4	5	1	0	5	6	1	0	3	4	15
不記載	5	0	1	6	0	0	1	1	0	0	1	1	8
去り方													
没した	1	2	0	3	76	25	5	106	32	1	1	34	143
宮に還った	0	0	0	0	0	0	0	0	43	25	0	68	68
その他 (5)	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	2
不記載	80	28	14	122	1	2	15	18	2	2	13	17	157
神の住処													
天 (6)	3	5	1	9	3	3	1	7	2	3	1	6	22
森	0	0	13	13	0	1	20	21	0	1	12	13	47
不記載	78	25	0	103	74	23	1	98	75	24	1	100	301
現れる目的													
釈尊に質問	50	8	0	58	50	11	0	61	51	10	0	61	180
自内証	28	20	0	48	25	14	0	39	24	16	0	40	127
比丘の警覚	0	1	10	11	0	0	16	16	0	0	11	11	38
その他 (7)	3	1	4	8	2	2	6	10	2	2	3	7	25
婆羅門を見た													
有	1	1	0	2	67	5	0	72	69	4	0	73	147
無	80	29	14	123	10	22	22	54	8	24	14	46	223

(1) 神を表わす語の「その他」の詳細

SN.の天相応

dhīṭā SN.001-004-009 (vol. I p.029、南伝 12 p.041)、SN.001-004-010 (vol. I p.030、南伝 12 p.041)

『雑阿含』の天相応

天女：『雑阿含』1274 (大正 02 p.350 上、国訳 03 p.322)、『雑阿含』1273 (大正 02 p.349 下、国訳 03 p.321)、『雑阿含』1270 (大正 02 p.348 下、国訳 03 p.318)、『雑阿含』1284 (大正 02 p.353 中、国訳 03 p.333)

*なお天女であるが閻隣尼天神とされているので「天神」に分類されているものに『雑阿含』1336 (大正 02 p.368 下、国訳 03 p.385) がある。

『雑阿含』の天子相応

天女：『雑阿含』1271 (大正 02 p.349 上、国訳 03 p.319)、『雑阿含』1272 (大正 02 p.349 中、国訳 03 p.320)

『別訳雑阿含』の天相応

天女：『別訳雑阿含』272（大正02 p.469上）、『別訳雑阿含』271（大正02 p.469上）、
『別訳雑阿含』269（大正02 p.468中）、『別訳雑阿含』282（大正02 p.472上）

『別訳雑阿含』の天子相応

天女：『別訳雑阿含』270（大正02 p.468下）

『別訳雑阿含』の森相応

神：『別訳雑阿含』359（大正02 p.491上）

元の妻：『別訳雑阿含』356（大正02 p.490中）

(2) 固有名詞のある神のうち「天相応」に含まれる固有名詞は次のものである。なお「天子相応」の諸経に登場する神には固有名詞がついているのが原則であるからここには紹介しない。

SN.

サトゥッラパカーイカ神：SN.001-004-001（vol. I p.016、南伝12 p.024）、
SN.001-004-002（vol. I p.018、南伝12 p.026）、SN.001-004-003（vol. I p.020、南
伝12 p.028）、SN.001-004-004（vol. I p.022、南伝12 p.031）、SN.001-004-006
（vol. I p.025、南伝12 p.035）、SN.001-004-008（vol. I p.027、南伝12 p.037）

ウッジャーナサンニカ神：SN.001-004-005（vol. I p.023、南伝12 p.033）

コーカナダーという雨雲の娘：SN.001-004-009（vol. I p.029、南伝12 p.041）

チューラ・コーカナダーという雨雲の娘：SN.001-004-010（vol. I p.030、南伝12 p.041）

『雑阿含』

拘迦那婆天女と朱盧陀天女：『雑阿含』1274（大正02 p.350上、国訳03 p.322）

拘迦那婆天女：『雑阿含』1273（大正02 p.349下、国訳03 p.321）

拘迦尼天女：『雑阿含』1270（大正02 p.348下、国訳03 p.318）

栴檀天子：『雑阿含』1315（大正02 p.361中、国訳03 p.361）

広大天宮の天女：『雑阿含』1284（大正02 p.353中、国訳03 p.333）

『別訳雑阿含』

波純提天女と拙羅天女：『別訳雑阿含』272（大正02 p.469上）

波純提（pajjunna）の娘であった求迦尼婆という天女：『別訳雑阿含』271（大正02 p.469上）、
『別訳雑阿含』269（大正02 p.468中）

栴檀天子：『別訳雑阿含』314（大正02 p.479下）

(3) 現れる時間のSN.の「天相応」の「その他」は明け方とするSN.001-002-010であり、『雑阿含』の「天相応」の「その他」は「於夜明相出時」とするその対応経の『雑阿含』1078（大正02 p.281下、国訳03 p.089）である。『別訳雑阿含』の「天相応」のその他は「天明未暁」とするこれもその対応経の『別訳雑阿含』017（大正02 p.379上）である。「天子相応」のその他は「晨朝」とする『別訳雑阿含』169（大正02 p.436中）である。

(4) 神の相手の「その他」データは次のものである。

SN.

天相応

尊者サミッディ：SN.001-002-010（vol. I p.008、南伝12 p.011）

森相応

カッサバゴッタ尊者（Kassapagotta）：SN.009-003（vol. I p.198、南伝12 p.344）

アーナンダ：SN.009-005（vol. I p.199、南伝12 p.346）

尊者アヌルッダ（Anuruddha）：SN.009-006（vol. I p.200、南伝12 p.346）

尊者ナーガダッタ（Nāgadatta）：SN.009-007（vol. I p.200、南伝12 p.347）

『雑阿含』

天相応

鹿牛と名づくる弹琴人：『雑阿含』1284（大正02 p.353中、国訳03 p.333）

森相応

尊者十力迦葉：『雑阿含』1339（大正02 p.369中、国訳03 p.388）

阿那律：『雑阿含』1336（大正02 p.368下、国訳03 p.385）

尊者那迦達多：『雑阿含』1342（大正02 p.369下、国訳03 p.389）

見多比丘：『雑阿含』1345（大正02 p.370中、国訳03 p.391）

優楼鳥：『雑阿含』1349（大正02 p.371中、国訳03 p.395）

『別訳雑阿含』

天相応

俱菟羅という弾琴人：『別訳雑阿含』282（大正02 p.472上）

森相応

尊者十力迦葉：『別訳雑阿含』359（大正02 p.491上）

阿那律：『別訳雑阿含』356（大正02 p.490中）

龍与という年少の比丘：『別訳雑阿含』362（大正02 p.491中）

(5) 去り方の「その他」のデータ

『雑阿含』の森相応

黙然として住した：『雑阿含』1351（大正02 p.371下、国訳03 p.395）、『雑阿含』1352（大正02 p.371下、国訳03 p.396）

(6) 神の住処は

この住処に言及されると考えられるものは次のようなものがある。

SN.001-002-001 (vol. I p.005、南伝12 p.007) : 三十三天

『雑阿含』576（大正02 p.153下、国訳03 p.289） : 忉利天宮

『別訳雑阿含』161（大正02 p.435上） : 三十三天

SN.001-004-007 (vol. I p.026、南伝12 p.036) : 淨居天（色界第4禪の不還果を証した聖者の生れるところ。無煩天、無熱天、善現天、善見天、色究竟天の5つがある。五淨居天という）

『雑阿含』1192（大正02 p.323上、国訳03 p.224） : 4人の梵天王

『別訳雑阿含』105（大正02 p.411上） : 4人の梵身天

SN.001-005-010 (vol. I p.035、南伝12 p.049) : 無煩天 (aviha)

『雑阿含』595（大正02 p.159中、国訳03 p.307） : 無煩天子

『別訳雑阿含』189（大正02 p.442中） : 無煩天

SN.002-001-009 (vol. I p.050、南伝12 p.084) : 月天子

『雑阿含』583（大正02 p.155上、国訳03 p.293） : 月天子

『別訳雑阿含』167（大正02 p.436上） : 月天子

SN.002-001-010 (vol. I p.051、南伝12 p.085) : 日天子

SN.002-002-001 (vol. I p.051、南伝12 p.087) : チャンディマサ天子 (Candimasa devaputta)

『雑阿含』1303（大正02 p.358中、国訳03 p.351） : 月自在天子

『別訳雑阿含』302（大正02 p.476下） : 月自在天子

SN.002-003-004 (vol. I p.060、南伝12 p.101) : 無煩天

『雑阿含』595（大正02 p.159中、国訳03 p.307）

『別訳雑阿含』189（大正02 p.442中）

SN.009-006 (vol. I p.200、南伝12 p.346) : 三十三天

『雑阿含』1336（大正02 p.368下、国訳03 p.385） : 忉利天

『別訳雑阿含』356（大正02 p.490中） : 三十三天

(7) 現れる目的の「その他」

天相応

神同士の会話（ただし釈尊がこれを比丘らに話しているのであるから釈尊の面前でなされたと理解した）

SN.001-002-001

SN.001-004-006

比丘への質問（詰問）

SN.001-002-010＝『雑阿含』1078＝『別訳雑阿含』017

天の一方的な偈（釈尊が答える偈はなく）

『雑阿含』1284＝『別訳雑阿含』282

天子相応

偈としては世尊のものしかないもの

SN.002-003-006＝『雑阿含』1307＝『別訳雑阿含』306

仏弟子の偈のみ

『雑阿含』1271＝『別訳雑阿含』270

【5】有偈篇の経に関する基礎的統計の分析

神の考察に入る前に「天相応」「天子相応」「森相応」に含まれる経について一瞥しておく。

[1] ここで扱うのはサンユッタニカーヤ・有偈篇の「天相応」「天子相応」「森相応」に含まれる経とそれに対応する『雑阿含』『別訳雑阿含』の諸経である。もともと『雑阿含』と『別訳雑阿含』にはパーリのような相応別の編集はされていない。本稿があたかも漢訳もこのような部類分けがなされていたような形をとったのは、経の内容によってパーリに対応する漢訳をそこに貼り付けたからである。その1つ1つについては若干の問題なきにしもあらずであるが、これについては次節においてふれる。

そして本稿のような形式が可能になったのは、パーリと『雑阿含』と『別訳雑阿含』に含まれる経の内容が全体的にまことによく対応するからである。概要はこの対応関係を強調するようなものになったことは否めないが、この概要を一読していただければ、三者がよく一致することは明白である。

しかもそれぞれの経の総数は統計の〔第1表〕の一番上に示したように、

SN. : 125 経

『雑阿含』 : 126 経

『別訳雑阿含』 : 119 経

であるから、経の数においても共通するといつてよいであろう。後にふれるが、現在の『雑阿含』『別訳雑阿含』はパーリのように相応別に部分けされていないけれども、今の大蔵経に編集される前には、何らかの部別がなされていたかもしれないことを推測させる。

[2] 統計表を見て直ちに見て取れるように、これらの経の仏在処は祇園精舎が圧倒的に多い。そもそも「森相応」所収の経には釈尊が登場しないのであるからこれを除外すると、

推測した仏在処も含めてであるが、祇園精舎の占める割合は、

$$\text{SN.} : 76+20/81+30=86.5\%$$

$$\text{『雑阿含』} : 70+24/77+24=90.4\%$$

$$\text{『別訳雑阿含』} : 71+26/77+28=92.4\%$$

となる。

ちなみにパーリの「経蔵」だけに限定すると、祇園精舎を仏在処とするものは仏在処を記す全2,028経中の285経であって14.05%に過ぎない。東園鹿子母講堂と単に舎衛城とするものを合わせると1,245経であって61.4%である⁽¹⁾。またわれわれがA文献⁽²⁾と呼んでいるパーリと漢訳の両方を含む原始仏教聖典の全データ中仏在処・説処が記されているものは7,294データであるが、そのなかで舎衛城に該当するものは4,882データ、すなわち66.9%である（【論文19】「コーサンビーの仏教」p.153）。これに対していま対象としている経が仏在処を祇園精舎とするものが多いことは判然としている。

これが何を意味するか軽々には論じられないが、原始仏教聖典では仏在処が必ずしもはっきりしないものは舎衛城の祇園精舎としておけという傾向があり⁽³⁾、「天相応」「天子相応」に含まれる経にもそのような傾向が顕著であるとはいいうるであろう。釈尊が登場しないにも拘わらず『雑阿含』が仏在処を掲げ、その祇園精舎の占める割合が多い（16/22=72.7%）のもそれを象徴している。

舎衛城（祇園精舎）以外を仏在処とする経は註1に示したが計38経であり、パ・漢取り混ぜて

王舎城（迦蘭陀竹園、温泉精舎他）：26経

釈迦国（カピラヴァットゥ他）：5経

ヴェーサーリー（大林重閣講堂）：4経

コーサラ国：2経

サーケート：1経

である。この検討は節（【10】の[4-2]）を改めて行う。

(1) 「モノグラフ」第21号 p.321

(2) 【論文1】p.078

(3) 『僧祇律』「雑誦跋渠法」（大正22 p.497上、律部10 p.323）「若忘説処者。是八大城趣举一」、『根本有部律・雜事』（大正24 p.328下、国訳26 p.099）「不知世尊於何方域城邑聚落。説何經典制何学処。此欲如何。仏言。於六大城但是如来久住大制底処。称説無犯」

[3] 経の前文と結文であるが、パーリには『雑阿含』や『別訳雑阿含』と比して「無」が圧倒的に多い。

統計表を%で示すと次のようになる。

	SN.				雑阿含				別訳雑阿含			
	天	天子	森	計	天	天子	森	計	天	天子	森	計
前文・有	33.3	100	100	56.8	100	100	100	100	100	100	100	100
無	66.7	0	0	43.2	0	0	0	0	0	0	0	0

結文・有	1.2	16.7	78.6	13.6	100	100	100	100	100	100	7.1	89.1
無	98.8	83.3	21.4	86.4	0	0	0	0	0	0	92.9	10.9

このように前文については『雑阿含』も『別訳雑阿含』も100%の経がこれを有するに対してパーリでは33.3%にすぎない。しかしパーリの結文の「有」はたった1.2%しかないのに、前文の「有」が33.3%もあるのは、ただ「傍らに立った神が次のように言った」とするだけのものも「有」として処理したからである。[第2表]に記した「現れる時刻」や「現れ方」の不記載がぐんと増えるのは（「天相応」では84.0%、「天子相応」では76.7%）、「現れる時刻」や「現れ方」は前文の部分に記され、今のこの%は前文が「無」であることを示しているわけである。

「結文」の方も同じ傾向であってパーリにはこれを有する経は少ない。これに対して『雑阿含』には100%の経にある。『別訳雑阿含』にはこれがないのが10.9%あるが、そのすべては「森相応」であって、『別訳雑阿含』の「森相応」に含まれる経はほとんどが偈でぷつんと終るからである。

要するにパーリは『雑阿含』と『別訳雑阿含』とは違って、神と釈尊の偈による対話のみが残されて、その前後の部分が省略されるという傾向があるということになる。本来あったものがパーリにおいて省略されたとみるべきか、それとも本来なかったものが『雑阿含』や『別訳雑阿含』において付加されたとみるべきかが問題となるが、これは聖典の形成史と関係するであろうから節を改めて考える。

[4] そして「天相応」「天子相応」には当然のことながら釈尊が登場するが（登場率は「天相応」「天子相応」全体で316/320=98.8%）、「森相応」には釈尊が登場しない（登場率は「森相応」全体で1/50=2%）のも注目しなければならないであろう。

【6】有偈篇に登場する神たちの呼称

すでに本稿の冒頭に示したことであるが、もう少し細部にわたって有偈篇に登場する神たちが経においてどのように表わされているかを調査しておく。

統計の[第2表]に示したように、「天相応」「天子相応」「森相応」に登場する神々は文献によってそれぞれ呼称が異なる。おおまかにいうと次のようになる。なお‘devatā’には数少ないが「天女」も含まれる。

	天相応	天子相応	森相応
パーリ	devatā	devaputta	devatā (1)
雑阿含	天子	天子 (2)	天神
別訳雑阿含	天	天子	天神

パーリと『別訳雑阿含』は「天相應」の神と「天子相應」の神を違う言葉でよんでいることになるが、「現れる時刻」は夜であり、「現れ方」は一面を輝かせて現れ、去り方は没したり天宮に還ったりするのであるからその特性は同じと見てよいであろう。また現れる相手も釈尊であり、現れる目的も釈尊に質問したり自内証を釈尊に確認するためだったりするのであるからこれにも相違がない。

違いはただ「天相應」の神には固有名詞がなく、「天子相應」の神には固有名詞があるということである。ただし統計表を見ていただければわかるように、「天相應」の神にも固有名詞があるものがあり、「天子相應」に固有名詞がないものがあるので、これを調査しておく。

[1] まずパーリの「天相應」とその対応漢訳経があるものについて固有名詞のある経とこの固有名詞を掲げると次のようになる。

SN.001-004-001: サトゥッラパカーイカ神たち

* 対応する漢訳経なし。

SN.001-004-002: サトゥッラパカーイカ神たち

* 対応する『雑阿含』1288 (大正 02 p.354 下、国訳 03 p.337) = 『別訳雑阿含』286 (大正 02 p.473 中) には固有名詞なし

SN.001-004-003: サトゥッラパカーイカ神たち

* 対応する漢訳経なし。

SN.001-004-004: サトゥッラパカーイカ神たち

* 対応する漢訳経なし。

SN.001-004-005: ウッジャーナサンニカ神たち

* 対応する『雑阿含』1277 (大正 02 p.351 上、国訳 03 p.325) = 『別訳雑阿含』275 (大正 02 p.469 下) には固有名詞なし。

SN.001-004-006: サトゥッラパカーイカ神たち

* 対応する漢訳経なし。

SN.001-004-008: 700 人のサトゥッラパカーイカ神たち

* 対応する『雑阿含』1289 (大正 02 p.355 上、国訳 03 p.338) は「8 人の山神天子」= 『別訳雑阿含』287 (大正 02 p.473 下) は「8 天子」とするから固有名詞なし。この経は釈尊は怪我

SN.001-004-009: コーカナダーという雨雲の娘 = 『雑阿含』1274: 拘迦那婆天女と朱廬陀天女 = 『別訳雑阿含』272: 波純提天女と拙羅天女

SN.001-004-010: チューラ・コーカナダーという雨雲の娘 = 『雑阿含』1273: 拘迦那婆天女 = 『別訳雑阿含』271 もと波純提の娘であった求迦尼婆天女 = 『雑阿含』1270: 拘迦尼天女 = 『別訳雑阿含』269: 波純提の娘であった求迦尼婆天女

そして漢訳経しかないものには次のものがある。

『雑阿含』1315: 栴檀天子 = 『別訳雑阿含』314: 栴檀天子 これには「阿羅漢を見た」の偈もないのでこの2経は「天子相應」に入れるべきものと考えられる。

*対応する SN.001-008-005 は偈のみの経であって、固有名詞なし。

まずパーリには「サトゥッラパカーイカ神たち」とか「ウツジャーナサンニカ神たち」とかいう固有名詞が見いだされるが、この名は本文中に註記したように註釈では、「よき人々の教えを受けたので、教えを語って、天に生まれた者ども」「咎め立てをする神々」というような意味であり、人間時代の来歴を引きずった厳密な意味での固有名詞とはいえない。しかも多くは対応漢訳がなく、あったとしてもそこでは「1 天子」「1 天」であって固有名詞は示されない。したがって本来これらは固有名詞と扱うべきものではないというべきであろう。

「コーカナダーという雨雲の娘」「チューラ・コーカナダーという雨雲の娘」にしても人間時代の来歴を引きずった名前ではないから、そういう意味では固有名詞とはいえない。これと対応する漢訳も同様である。

そして漢訳の『雑阿含』1315 と『別訳雑阿含』314 はパーリの SN.001-008-005 と偈の内容が相応するので「天相応」に配属させたもので、ここには栴檀天子という立派な固有明がついているから本来は「天子相応」に配属させるべきであったであろう。「天子相応」にはもともと栴檀天子が登場する SN.002-002-005 = 『雑阿含』1316 = 『別訳雑阿含』315 がある。なお偈の内容としてはこれに対応する経として『雑阿含』1269 をあげておいたが、これは「1 天子」であるから「天相応」に移されるべきであろう。

[2] 逆に「天子相応」の経でありながら固有名詞のない経がある。すべて漢訳経であって、このような現象が生じてしまったのは本稿がただ偈の内容の対応関係によって対応経を決めているからである。紹介した後に細かく検討する。

『雑阿含』597 = 『別訳雑阿含』182

*対応する SN.002-002-004 はナンドナ天子。

『雑阿含』1269

『雑阿含』596 = 『別訳雑阿含』181

*対応する SN.002-002-007 はスブラフマー天子。

『雑阿含』585 = 『別訳雑阿含』169

*対応する SN.002-002-008 はカクダ天子

『雑阿含』1276 = 『別訳雑阿含』274

*対応する SN.002-003-002 はケーマ天子

まず『雑阿含』597 = 『別訳雑阿含』182 であるが、これらには「天相応」の神が現れる目的でもあると考えられる「婆羅門を見た」の偈があり⁽¹⁾、これを見ても本来は「天相応」に入れるべきものであると考えられる。『雑阿含』596 = 『別訳雑阿含』181、『雑阿含』1276 = 『別訳雑阿含』274 も同様である。そして『雑阿含』1269 は前項において「天相応」に移すべきであるという結論を得ている。

残るは『雑阿含』585 = 『別訳雑阿含』169 であるが前者の神は「塔辺に住む天神」、後者の神は「聚落中の 1 天神」とするからいかにも「森相応」の神のように見える。しかし前者は後夜に一面を輝かせて現れたとするから、この表現は「森相応」の神にはふさわしくない。ただし後者は現れる時間は朝早くであるから一面を輝かせてもいない。さらにこれら

2 経には「婆羅門を見た」の偈があり、さらにこのパーリ対応経の SN.002-002-008 には全体で 2 経しかないこの偈がこの経にあるのはもっと奇妙である。【9】の [5] に記すように、この偈は「天相應」の神が現れる目的と考えられるから、この偈が「天子相應」に収められている経に現れるのは不自然である。

さらにこれらの経の仏在処はパーリがサーケート (Sāketa) のアンジャンナ林 (Añjanavana)、『雑阿含』が釈氏の優羅提那塔所、『別訳雑阿含』が釈翅鳩羅脾大斯聚落であって、仏在処を祇園精舎としない数少ない経 (仏在処を記載経の中では 11.1%) のなかの 3 つである。そしてさらに漢訳の 2 経は「そのとき釈尊は鬚髪を剃られたばかりのころであった」とする。「鬚髪を剃られたばかり」というこのような釈尊の状態を記すのはたくさんある原始仏教聖典の中でも希有であろう。その他に釈尊の状態を記すのは「そのとき釈尊は怪我をされていた」とする『雑阿含』1289 (神は 8 人の山神天子) = 『別訳雑阿含』287 (天は 8 天子) があるのみである。

このように SN.002-002-008 = 『雑阿含』585 = 『別訳雑阿含』169 はさまざまな面からはなはだ奇妙であって処置に窮するが、パーリが「天子相應」に収めているのであるからこのままにしておくほかあるまい。

(1) 詳細は【9】の [5] 参照

[3] 以上のように「天相應」の神は固有名詞をもたず、「天子相應」の神は固有名詞をもたないというのが原則である。このような意味では「天子相應」の神は過去世の人間時代の固有名詞を引きずっているから比較的最近に神になったいわば**新神**であり、これに対して「天相應」の神はすでに人間時代の履歴を失って神としての普遍性を獲得した**古神**とってよいかもしれない⁽¹⁾。これは「天相應」には婆羅門を見たの偈があるのに、「天子相應」にはないということも傍証となる。この偈は天文学的な昔の過去仏 (迦葉仏) を見たことがあるということを意味するからである。したがって新神は現在仏の釈迦牟尼仏の影響下にある神、古神は過去仏 (迦葉仏) の影響下にある神とってよいかもしれない⁽²⁾。

「天相應」の神と「天子相應」の神にはこういう違いがあるのであるが、とって等しく「天界」に生まれ変わっている神というランクに違いはないと考えられる。したがってパーリと『別訳雑阿含』のように「天相應」の神と「天子相應」の神の呼称を変える必然性はないといえよう。

この「天」と「天子」という用語について中村元氏は岩波文庫の『神々との対話ーサンユッタ・ニカーヤ I』において次のように解説している。

神々ー devatā. 神々のことをインド一般に deva というが、ここでは devatā という語を用いている。deva と devatā とは、実質的には同じである。deva が男性の神であるのに対して、devī は女神である。しかし devatā は文法的には女性名詞であるが、実質的には男性の神を意味することもある。学者の間では、devatā は「低位の神」と解されているが、スリランカの学者の解釈によると、必ずしもそうではない。大きな神を意味することもある⁽³⁾。

神の子ー devaputta. 神々のもとに生まれた男神である (漢訳仏典では「天子」と訳し、読誦の時には「てんじ」と濁って読む)。神々のもとに生まれた女神は〈神の娘〉

という。神の子は、すでに過去世に地上で暮らしていたときに、〈これこれ〉という名をもっていた人である。これに反して〈これこれ〉という固有名詞をもたない神は *devatā* と呼ばれる (4)。

としている。

また片山一良訳『パーリ仏典 第三期 1 相応部 有偈篇①』も注釈書の解説を以下のよう
に紹介している。

devaputta. 諸天（神々）の膝元（*aṅka*）に生まれ変わった男子は天子と呼ばれ、女子は天女（*devadhītā*）と呼ばれる。名前が明らかでないものは「ある神々」と、明らかかなものは「某名の天子」と言われる。それゆえ、これまでのものは《前の「天相応」では》「ある神々」と言い、ここ（「天子相応」）では「天子」と言われている (5)。

と。

このようにパーリと『別訳雑阿含』が「天相応」と「天子相応」の神の呼称を変えても、神としての属性は異りがないということになる。そのような意味では『雑阿含』が両方とも天子とよぶほうに合理性がある。

(1) ひょっとするとこれが「天相応」の神が‘*deva*’ではなく抽象名詞を作る‘*tā*’を付した‘*devatā*’という語が用いられている理由かもしれない。もっとも神格としては低い「森相応」の神も同じく‘*devatā*’が用いられるのは不思議であるが。

(2) *DN.014 Mahāpadāna-s.*、『長阿含』「大本経」などによれば、*Kakusandha* 仏（拘楼孫如来）、*Konāgamana* 仏（拘那含如来）、*Kassapa* 仏（迦葉如来）、*Sakyamuni* 仏（釈迦牟尼如来）は賢劫に現れる仏とされる。釈迦牟尼仏にもっとも近い過去仏は *Kassapa* 仏であるが、何しろ天文学的な年数を表す「劫」の単位で表わされるのであるから、イメージとしては少なくとも *Kassapa* 仏は数万年以上前の仏ということになるであろう。*Buddhavaṃsa* (p.101 南伝 41 p.360) 参照。

ただし過去仏思想はジャイナ教のティールタンカラ (*tīrthāṅkara*) と密接な関係のあることは周知のことで、現在仏に相当するマハーヴィーラ (ニガンタ・ナープッタ) の直前のティールタンカラはパーサ (*Pāsa*, *Skt.Pārśva*) と呼ばれる 200 年から 250 年前のジナであったとされる（『バシャムのインド百科』p.286 では 200 年ほど前とする。また『インド学大事典』第 3 巻、仏教・ジャイナ教編 p.273 では、マハーヴィーラに先立つこと 250 年に 100 歳で死んだとされている）。これを考えれば迦葉仏は数万年前の仏ではなく、仏教でも現実的な仏と考えられていたのかもしれない。

カピラヴァットゥ周辺には過去仏の遺跡が多く、*Niglihawa* からはアソーカ王が釈尊よりも 2 代前の *Konāgamana* 仏の仏塔を 2 倍に増築し、自ら来て崇敬をなしたという法勅が発見されているし、*Gotihawa* の仏塔は *Kakusandha* 仏の仏塔ともされている。また『法顕伝訳注解』（雄山閣 平成 8 年 p.062）のいうところによれば、舍衛城の西 50 里に都維＝タドヴァ (*Tadwa*) というところがあってここは迦葉仏の生まれたところ、東南 12 由旬には那毘伽というところがあってここは拘楼秦仏の生まれたところという（『大唐西域記』にもあり）。

このように過去仏は神話的な仏ではなく現実世界に存在した仏だけであるという証拠もあり、こちらの方を信ずれば、「婆羅門を見た」の偈が迦葉仏を見てから久しぶりに般涅槃したゴータマ仏を見たという意であるとしても現実味を帯びてくることになる。

(3) p.223

(4) p.292

(5) p.217。パーリ原文 p.102

[4] ところが「森相応」に登場する神をパーリは「天相応」の神と同じ‘devatā’という言葉で表わしているが、現れる時刻も昼間であるから一面を輝かせて現れないし、突如没したり天宮に還ったりすることもないから住処は天界ではなく聚落のそばの森であり、神の相手は未だ煩惱を尽していない凡夫比丘が多く、その目的も「天相応」の神や「天子相応」の神とは異り、これら凡夫比丘を警覚するためであることが多い。要するに同じ神であっても特性は全く異なる。もし呼称の仕方を変えるならこの方に別の言葉を用いるべきであり、その故であろう、『雑阿含』や『別訳雑阿含』はこの神のみを「天神」と表わしている。とはいえ「天神」の原語が何であったのかはわからない。パーリの用語法にしたがえばこの神も‘devatā’であったのであろうが、漢訳はその属性を勘案して訳語を変えたのであろう。

【7】 仏教における神のパンテオンと有偈篇の神たちの位置づけ

[1] 本稿は有偈篇の「天相応」「天子相応」「森相応」に登場する神たちを考察しようとするものである。仏教では神には種々があるとされ、ここに登場する神々は仏教の神のパンテオンにおいてどのような地位に位置づけられているのであろうか。そこで具体的な考察に入る前に仏教の神のパンテオンを概説しておく。

Vibhaṅga ⁽¹⁾によれば神には次のような階位がある。下位から上位の順で紹介する。

欲界の神

四大王天 (Cātummahārājika deva)

三十三天 (Tāvatiṃsa deva)

夜摩天 (Yāma deva)

覩史多天 (Tusita deva)

化樂天 (Nimmānarati deva)

他化自在天 (Paranimmitavasavatti deva)

初禪 (初・中・勝) の神

梵衆天 (Brahmapārisajja deva)

梵輔天 (Brahmaprohita deva)

大梵天 (Mahābrahma deva)

第2禪 (初・中・勝) の神

少光天 (Parittābha deva)

無量光天 (Appamāṇābhāna deva)

極光浄天 (Abhassara deva)

第3禪 (初・中・勝) の神

少浄天 (Parittasubha deva)

無量浄天 (Appamāṇasubha deva)

遍浄天 (Subhakiṇha deva)

第4禪の神

無想有情天 (Asaññasatta deva)

広果天 (Vehapphala deva)

無煩天 (Aviha deva)

無熱天 (Atappa deva)

善現天 (Sudassa deva)

善見天 (Sudassin deva)

色究竟天 (阿迦膩吒天 有頂天 Akaniṭṭha deva)

無色界定の神

虚空無辺処に到達する天 (Ākāsañācayatanūpaga deva)

識無辺処に到達する天 (Viññāṇañcayatanūpaga deva)

無所有処に到達する天 (Akiñcaññāyatanūpaga deva)

非想非非想処に到達する天 (Nevasaññānāsaññāyatanūpaga deva)

である。

また『摂阿毘達磨義論』⁽²⁾によれば無煩天、無熱天、善現天、善見天、色究竟天の5種が淨居天 (Suddhāvāsabhūmi devā) とよばれる、とされている。

四大王天が最も下位の神であるが、『俱舍論』などによればその住処は須弥山のちょうど中間の高さのところにあるヴェランダのような張り出しに住んでいるとされる。その頂上を住処とするのが三十三天であり、その支配者が帝釈天で、この2つの神は地居天 (bhummā devā) とよばれる。

そして夜摩天以上は虚空中に住処を持つので空居天宮 (ākāsaṭṭhaka vimāna) に住む天とよばれる。

ここには南方上座部の文献から紹介したが、説一切有部などの他部派も漢訳聖典においても同じである。

(1) p.422、南伝 47 p.188

(2) PTS 版=1989 p.22、南伝 65 p.40

[2] 有偈篇の「天」「天子」「森」相応では、そこに登場する神たちが上記の神のパンテオン中のどの神であるかを明示しないものがほとんどである。しかし若干の経にはその種類が記されている。「統計表2」の天の住処の項に「天」として処理したものである。

その明細を註の(6)で示したが、その紹介の順序にしたがって記すと、三十三天、淨居天、梵天、無煩天である。この他に月天子(月自在天子 Candimā devaputta、Candimasa devaputta)、日天子(Suriya devaputta)があり、そして森に住む神があるわけである。

このうち日天子や月天子は「天子相応」に登場し‘devaputta’とよばれている。しかし上記の神のパンテオンには位置づけられていない。おそらく日天子は太陽、月天子は月を擬神化したもので、太陽と月は仏教の世界観によれば、須弥山のちょうど中間の高さの空中に浮かんでいるとされる。したがって高度からすれば四王天と同位ということになる。しかしラーフと戦い、捕らえられて釈尊に助けを求めるのであるから、ひょっとするともっと下位の天とイメージされていたのかもしれない。

梵天は初禪天であり、無煩天は第4禪天であるから、無煩天の方が梵天より階位が高い。

浄居天には第4禪天の無煩天、無熱天、善現天、善見天、色究竟天の5天が含まれる。

これらの「森相応」に登場する神を除く神たちは、地上からはるかに高いところにある須弥山の間にあるいはその頂上、あるいはそれよりも上にある虚空中の天宮から、われわれ人間が住んでいる地上世界へ、夜にあたり一面を煌々と照らしながら降りてき、また忽然と去っていくわけである。しかし月天子や日天子はこのような登場のし方もしないし去り方もしない。「天子」とは称されているけれども仏教の神のパンテオンに位置づけられていないように、ちょっと異質の神であったといえるであろう。

そして一転して「森相応」に登場する神たちは地上世界の私たちが住んでいる聚落のそばにある森や河などを住処としており、彼らは昼間に、怠けている比丘を警覚するために現れる。

このような神は先述の神のパンテオンからいえばどこにも位置づけられ得ない、おそらく神のパンテオンに位置づけられる神とは次元の違った、もっと人間に近い低位の神なのであろう。パーリでは「天相応」の神と同じ‘devatā’と表わされるが、『雑阿含』と『別訳雑阿含』は「天」でもなく「天子」でもない「天神」と表わされるから、むしろこの語感の方がぴったり来る。

感じとしてはまだ「神」にはなりきれていない、精霊（万物の根源をなすという不思議な気。精気。草木・動物・人・無生物などのここに宿っているとされる超自然的な存在。広辞苑）、妖精（fairy 西洋の伝説・物語に見える自然物の精霊。美しく親切な女性などの姿をとる。広辞苑）のようなものなのではなかろうか。

[3] それでは「天相応」「天子相応」の住処が示されない 94.1%（パーリ：78+25/81+30=92.8%、『雑阿含』：74+23/77+27=93.3%、『別訳雑阿含』：75+24/77+28=94.3%）の神たちはどこを住処とするどんな神だったのであろうか。「第2表」に示したように、彼らは「一面を輝かせて現れ」、そして去る時には「没したり」「天宮に還った」とされているから、明らかにわれわれの世界とは異なる天宮に住んでいたのである。

しかし彼らが神のパンテオンの中のどこに位置づけられる神であるかが記されていないわけであるが、彼らはおそらく三十三天であったと考えてよいのではなかろうか。パーリ聖典には *Vimānavtthu*（天宮事）という経があり、これは天界に生まれた神たちがそこに生まれた善業を語るという内容である。この「天宮事経」には85の経が収められており、85人の天が登場するが、註釈によって彼らがどんな神であったのかを調査するとその内訳は次のようになる（藤本晃『天宮事経 天界往生の物語』サンガ 2017年10月1日発行にお世話になった）。

三十三天：80/85=94.1%

化楽天：3/85=3.5%

四大王天（毘沙門天）：2/85=2.4%

これによればそのほとんどすべてが三十三天であって、他に化楽天と四大王天（毘沙門天）が見いだされるのみである。この%は「天相応」と「天子相応」に現れる神とほとんど同じであって、同じ事情が現れているのではないかと考えられる。とするならば住処の明示され

ない神は三十三天であると推定される。

【8】神に対する統計の分析

今までにすでに先取りして、統計の数字を随所に引いてきたのであるが、統計の数字をここでもう少し詳しく分析しておきたい。

[1] 現れる時刻

[1-1] 「天」「天子」相応の神が現れる時間をパーリは「夜更け (*abhikkantāya rattiyā*)」とし、『雑阿含』は「後夜」とする。『別訳雑阿含』には「中夜」とするものもあるが、これは大正蔵経が註記するように（例えば p.474 中の「中夜」に㊦＝夜中三本としている）、「夜中」の誤植かもしれない。

仏典では夜を「初夜 (*purimayāmaṃ, rattiyā paṭhamaṃ*)」と「中夜 (*majjhimayāmaṃ, rattiyā majjhimaṃ*)」と「後夜 (*pacchimayāmaṃ, rattiyā pacchimaṃ*)」に3分する⁽¹⁾が、パーリの「夜更け (*abhikkantāya rattiyā*)」はこの「後夜」にあたるのであろう。『雑阿含』はずばり「後夜」とする。春分・秋分期の昼・夜の時間が等しい時期の北部インドの場合、「初夜」は夕方6時半ころから夜の10時半ころまで、中夜は夜の10時半ころから午前2時半ころまで、後夜は午前2時半ころから明け方の午前6時半ころまでである⁽²⁾。日本においては「草木も眠る丑三つ時」という慣用句があるが、丑三つ時は今の午前2時から2時半をさすというから（広辞苑）、神が現れる時間はもう少し後ということになるだろう。

統計表[第2表]の註(3)に示したように、「その他」の4例中の3例は「於夜明相出時」「天明未暁」であり、他の1例は「晨朝」であるから、後夜はまさしく明け方に近い夜ということになるだろう。後夜をさらに2分すると、午前2時半から4時半までが前半、4時半から6時半までが後半で、午前5時半くらいにはうっすらと明るくなるから、この夜の明相が出る頃が「天明未暁」に相当するのであろう。これに対する「後夜」はその前半ということになるのではなかろうか。

しかし以前に書いた「モノグラフ」17号(2012年5月)に掲載した【論文23】「原始仏教聖典に見る釈尊と仏弟子たちの一日」(森章司)の調査では、パーリの伝承では釈尊が神々と対話するのは中夜分ということになっている⁽³⁾。また‘*abhikkantāya rattiyā*’という表現中の‘*abhikkanta*’は片山の訳注⁽⁴⁾によると「滅尽」の意である。神は「麗しい容姿 (*abhikkantavaṇṇā*)」で現れ、‘*abhikkanta*’は「夜更け」を表わす語と同じであるから係り結び的な表現かとも思われるが、そうでもなさそうである。そして‘*abhikkantāya rattiyā*’が文字通りの「夜の滅尽」の意味であるとすると、これは「明相が出る」までの「後夜」を意味するであろう。

次項にふれるように天・天子相応の神は仏弟子たちは見えず、見えるのは釈尊だけだったようである。このような状況にふさわしいのはやはり後夜であったかもしれない⁽⁵⁾。これは釈尊が横臥から起き日明までに坐禅をされていた時間帯というイメージなのではなかろう

か。

- (1) 【論文 23】「原始仏教聖典にみる釈尊の仏弟子たちの1日」（「モノグラフ」第17号 2012.5） p.004
- (2) 同 p.009
- (3) 同 p.060
- (4) 片山・相応部1 p.389
- (5) この天相応に類似した形式の経は AN.006-004-032 (vol.III p.330、南伝 20 p.068)、AN.006-007-069 (vol.III p.423、南伝 20 p.190)、AN.007-004-031~034 (vol.IV pp.027~030、南伝 21 pp.268~273) にもあり、ここでも天は 'abhikkantāya rattiya' に現れたとされている。

[1-2] これに対して「森相応」に登場する神が現れる時間はすべて昼間である。それも多くは比丘が食後に園林で昼日住 (divāvihāra) する時に現れたようである。先の論文において釈尊が天との対話を昼日住にするという記述もあるが⁽¹⁾、これはこの森に住する天神との対話かもしれない。

- (1) 「モノグラフ」第17号 p.052

[2] 現れ方と現れる相手

[2-1] 「天相応」「天子相応」の神たちは、

その時ある天が (aññatarā devatā) 夜更けに (abhikkantāya rattiya) 麗しい容姿で (abhikkantavaṇṇā) 祇園の全体を輝かして (kevalakappaṃ Jetavanaṃ obhāsetvā)、世尊の元に至り、至ってから世尊を礼して傍らに立った。傍らに立ってその天神は次のように言った。(パーリ)

有一天子容色絶妙。於後夜時来詣仏所。稽首仏足退坐一面。身諸光明遍照祇樹給孤独園。時彼天子白仏言。(『雑阿含』)

時有一天光色倍常。於其夜中。来詣仏所。威光顯照。遍于祇洹。晃然大明。却坐一面。而問仏言。(『別訳雑阿含』)

のように、「美しい容姿で、自ら光を発しながら、あたり一面を輝かせて」現れる。

神がこのようにして現れるのはほとんどすべてが釈尊の前であって、例外の1つは SN.001-002-010の尊者サミッディ (Samiddhi) であり、この対応漢訳経である『雑阿含』1078と『別訳雑阿含』017は「1比丘」となっている。しかし現れる時間は後夜ではなく夜明けである。

またもう1つは SN.002-003-005であるが、高慢で心を散乱させていた比丘たちの前に現れるのであって、これには釈尊が登場しないから、これはむしろ「森相応」に収められるべき経であろう。

そして『雑阿含』1284=『別訳雑阿含』282は6人の天女が亀牛 (倶菟羅) と名づくる弾琴人の前に現れたとされている。しかしながらこれは釈尊が過去世の話として語ったもので、後夜にあたり一面を輝かせて現れたとするものではないから。「天」「天子」相応の経とは形態が異なる。パーリの対応経もないからこれはデータから削除する。

また SN.001-004-004は天が釈尊に偈でもって語りかけるのを尊者モーガラージャ (āyasmā Mogharāja) がそばにいて聞いていたと理解できなくはないが、もしそうだとす

れば極めて稀な例外になるから、そのように理解しないほうがよいと思われる。そばにいたとしても、尊者は神と釈尊の対話は見ていない聞いていない解するということである。

このように神が夜更けに一面を輝かせて現れるのは釈尊の前であって、他の人物の前には現れない。ひょっとするとこのような神は釈尊以外の阿羅漢果を得た比丘も含めて人間には見えなかったのかもしれない。AN.007-004-034⁽¹⁾も「天相応」と同じ形式の経であり、ここにはサーリプッタが登場するが、サーリプッタは夜更けに神が現れて問答したことを釈尊から聞いて初めて知ったという形になっている。サーリプッタにさえ神の姿は見えなかったようである。このような形の経は「天相応」「天子相応」のなかにも見いだされ、SN.002-001-008、『雑阿含』1270、1272、1273、1274、『別訳雑阿含』187、269がそうである。

余談であり、網羅的にではなく思いつく範囲で調査した範囲であるが、一般的に神は次のような現れ方をしようである。

DN.020 *Mahāsamaya-s.* (大会経)⁽²⁾ = 『長阿含』019『大会経』⁽³⁾ では、釈尊がカピラヴァットゥの大園林に500人の阿羅漢比丘と共に住された時、そのとき無数の神たち (*devatā*) も集まってきたとされている。しかしこのとき500人の阿羅漢比丘たちには神が見えていなかったようで、パーリの註釈書には、「これは大きな神々の集会である。しかし比丘たちはこのことを知らない。さあ、彼らに告げよう」と考えられ、釈尊はこのことを比丘らに告げられたとされている⁽⁴⁾。そして本稿中のSN.001-004-007はこの「大会経」と同じシチュエーションの経であり、まさしくこの経は神と釈尊の対話となっている。

さらに『涅槃経』⁽⁵⁾ では、入滅直前の釈尊に会うために神たち (*devatā*) が集まってきたのにウパヴァーナが邪魔をしているので、釈尊は「私の前に立つな」と注意されたとされている。その理由をアーナンダが尋ねているからアーナンダもウパヴァーナも神たちが見えなかったのである。

梵天勸請の梵天も釈尊がラージャーヤタナ樹下からアジャパーラニグローダ樹下に映られ、1人で禪定されていた時である⁽⁶⁾。

しかしウルヴェーラカッサパを折伏する際に四大天王や帝釈天、そして梵天が釈尊の前に現れた時、ウルヴェーラカッサパは神かどうかはわからなかったようであるが、きわめて美しい姿であたり一面を照らして現れたのを目撃したようである⁽⁷⁾。

筆者は、あるいは釈尊の前に現れる悪魔は釈尊の心中の不安や迷いを神話的・譬喩的に表わしたものではないかと考えているが、神もそうかもしれない。もちろん神は悪魔とは違って釈尊の心中の喜びとか満足とかを表わすということである。ということになれば神は釈尊にしか見えない道理である⁽⁸⁾。

このようなことから推測すると、少なくとも「天」「天子」相応に現れる神は釈尊にしか見えなかったと判断してよさそうである。そうするとSN.001-002-010 = 『雑阿含』1078 = 『別訳雑阿含』017において尊者サミッディ (漢訳は1比丘) の前に現れた神は特異であり、しかもその現れる時間は明け方であるから、この経は本来は「森相応」に収められるべきものであったとしてよいのではなからうか。『雑阿含』1078 = 『別訳雑阿含』017はともかく、SN.001-002-010は聖典自身が「天相応」に配属しているのであるから、異例中の異例であるがそのような処置とする。

なお「森相応」の神は懈怠の比丘など好もしからぬ比丘の前に現れることが多くサミッディは悪比丘ではないが、しかし出家して間もなくの新米比丘とされている。といっても森相応の神はカッサパゴッタ尊者、アーナンダ、尊者アヌルッダ、尊者ナーガダッタの前にも現れているから、必ずしも悪比丘ばかりではないわけである。

- (1) vol.IV p.030、南伝 20 p.271
- (2) vol.II p.253、南伝 07 p.271、片山・相応部 4 p.142
- (3) 大正 01 p.79 中
- (4) 片山・相応部 4 p.144
- (5) vol.II p.138、南伝 07 p.122
- (6) 南伝 03 p.009
- (7) 南伝 03 p.047 以下、『四分律』大正 22 p.794 中、『五分律』大正 22 p.108 上
- (8) 『天宮事経』のほとんどすべてはマハーモッガッラーナと神たちとの対話であり、第 16 話はヴァンギーサ尊者が天女シリマーと問答したとされている。したがって『天宮事経』は漏尽の阿羅漢が神を現前に見、そして対話できることを前提としているわけである。また禅定に入れば天にも会えるというのが禅定の基本的な考えであろう。そうとすれば「天」「天子」相応に収められた経は、特殊な状況にあるのかもしれない。

[2-2] しかしながら森相応の地上に住んでいる天神は光り輝く神々しい姿形をしているわけではなく、また現れる時間も昼間である。この姿を特別の表現によって表わす経はないからどのような姿形をしていたのかわからないが、‘devatā」天神」と表わされるのであるから、われわれ人間とは異なる特性をもっていたのであろうことは間違いがない。SN.009-008 とその対応経は天神が女に化作したとし、『雑阿含』1359 は瘦せ衰えて骨だらけとなった身体を化作したとしているから、すくなくとも化作する力を持っているわけである。ただし「森相応」に収録されてはいるが SN.009-006 = 『雑阿含』1336 = 『別訳雑阿含』356 に登場するジャーリニーという天女 = 閻隣尼天神 = 天上の彼のもとの妻は三十三天に住んでいるとされている。これはむしろ「天子相応」に収録されるべき経である。聖典そのものの編集形態をいじることは許されるべきではないかもしれないが、論理を一貫させるために、以後はこの経を「天子相応」に収録されている経として扱う。

このように「森相応」の神はわれわれと同じ地上世界に住んでおり、したがってその現れ方もきわめて地味であって、パーリでは「比丘に近づいた (yena so bhikkhu ten-upasaṅkami)」(SN.009-001) と表現されるのみであり、『雑阿含』は「我今当往」(第 1333)、『別訳雑阿含』は「即往其所」(第 353 経) とするのみである。そこには特段の神々しさもなければ、異世界の非人であるという印象もない。ただ普通の人間のように扱われているといつてよいであろう。

このような神の相手はカッサパゴッタ尊者 (Kassapagotta)、アーナンダ、尊者アヌルッダ (Anuruddha)、尊者ナーガダッタ (Nāgadatta) などを含む比丘であって、その他の固有名詞をもたない比丘は多くが怠惰で不善法を行う好もしからぬ比丘である。天上に住むあたり一面を輝かせて現れる神たちは釈尊の前に現れるのであるが、地上に住む神たちは比丘の前にしか登場しないということになる。そもそも「森相応」に収録される経には釈尊は登場しない。

[3] 去り方

[3-1] 「天」「天子」相応の神たちは、『雑阿含』では「時彼天子聞仏所説。歡喜隨喜稽首仏足。即没不現」（第1267経）、『別訳雑阿含』では「爾時此天。説此偈已。歡喜還宮」（第180経）というように表わされることが多い。『別訳雑阿含』が「この偈を説き終つて」というのは、後に検討する「久しぶりに婆羅門を見た」という偈である。パーリでは省略されることが多いが、天相応の第1経では、この偈を説いてから「世尊を礼拝し、右邊して即座に消えうせた（Bhagavantam abhivādetvā padakkhiṇaṃ katvā tatth-ev-antaradhāyi）」とされている。

「天」「天子」相応の神たちはわれわれの住む地上世界ではない天界から降りてきて、その天界に還っていくのであるから、おそらくその場でぱっといなくなるというふうには天宮に還るのであろう。

[3-2] しかしながら「森相応」に登場する神の去り方には特段の記述はない。パーリの結部は「その比丘はその神によって気付かされ、気がついた」とするのみであり、『雑阿含』も「時彼天神説是偈已。彼比丘聞其所説。專精思惟斷諸煩惱心。得阿羅漢」（第1333経）とする。『別訳雑阿含』は偈によってぷつんと終るのが普通である。第1表に記したように結文がないタイプが多いのである。後述するように『別訳雑阿含』も本来は「森相応」の経は一括りの経群として編集されていたらしく、その最初の経は第351経だと思われるが、この経にも結文はないから、パーリの多くの経のように本来あったものが省略されたのではなく、もともとからなかったものと考えられる。「森相応」に登場する神は、現れ方と同じように去り方も特記するようなことはなく、「天」「天子」相応の神のように、目の前でぱっと消えうせるのではなく、知らない間にいなくなっていたというイメージなのであろう。

[4] 次に神たちが現れる目的を検討する。換言すれば神たちは何をするために現れるのかということである。

[4-1] [第2表]の現れる目的に示したように、「天相応」の神たちは釈尊に質問するためや自内証を確認するために現れる。これを比率で示すと次のようになる。

	質問	自内証	その他
パーリ	61.7%	34.6%	3.7%
雑阿含	64.9%	32.5%	2.6%
別訳	66.2%	31.2%	2.6%
計	64.3%	32.8%	3.0%

これに対して「天子相応」の神の現れる目的は次のようになる。

	質問	自内証	比丘の警覚	その他
パーリ	26.7%	66.7%	3.3%	3.3%
雑阿含	40.7%	51.9%		7.4%
別訳	35.7%	57.1%		7.1%
計	34.1%	58.8%	1.2%	5.9%

この結果を見れば、「天相応」の神は釈尊に質問しようとして現れることが多く、これに対して「天子相応」の神は自分の自内証を釈尊に確認してもらうために現れることが多いと

いうことになる。「天子相応」の神は前世の因縁を引きずっている「新神」であって釈迦牟尼仏の教えの影響が強く残っている、だから自内証を確認してもらうために現れるということが多いのかもしれない。

「天相応」の「その他」についていえば、パーリには3経あるが、そのうちの2経は神同志の対話であって SN.001-002-001 と SN.001-004-006 である。他の1つは SN.001-002-010 であって尊者サミッディに対する詰問のような内容であり、これは先に「森相応」に収録されるべきものと理解した。『雑阿含』と『別訳雑阿含』の2経のうちの1経はこれに対応する『雑阿含』1078と『別訳雑阿含』017である。『雑阿含』と『別訳雑阿含』の残りの1経は漢訳にしかない『雑阿含』1284と『別訳雑阿含』282であって、釈尊が過去世の逸話を比丘らに語るもので神が一面を輝かせて現れもしないから、先にデータから削除すべきものとした。

「天子相応」の「その他」についていえば、パーリの1経は SN.002-003-006 で、これは神の散文での質問を釈尊が偈で答えられたというもので、ちょっと特殊な形式をもつから「その他」に分類したが、経の内容は「釈尊に質問」である。『雑阿含』と『別訳雑阿含』の「その他」の2経のうち1経はこの SN.002-003-006 の対応経である『雑阿含』1307と『別訳雑阿含』306 でありこれも「釈尊に質問」とすべきであろう。漢訳のそれぞれ残りの1経は『雑阿含』1271と『別訳雑阿含』270 であって、これらは SN.001-004-010 を受けたものであり、阿難が解説した「四句法」をある婆羅門がそれは非人の説ではないかと質問したので、釈尊がそれは拘迦尼天女＝求迦尼娑天女が説いたものであるから非人説であると説かれたものである。パーリにはこの対応経はないし、神と釈尊との偈による対話でない特殊な内容であるからこれもデータから除外する。

[4-2] これに対して「森相応」の神は、ほとんどが例えば怠惰な比丘などを警覚するために現れる。

パーリ：71.4%

『雑阿含』：72.7%

『別訳雑阿含』：78.6%

残りは「その他」である。

「その他」に分類したものは以下のとおりである。

SN.009-004＝『雑阿含』1331＝『別訳雑阿含』351：雨安居を過ごした比丘たちが遊行に出ていなくなったのを悲しんだ。

SN.009-010＝『雑阿含』1337＝『別訳雑阿含』357：離欲した比丘になぜ法を説かないのかとなじった。

SN.009-012：対応する漢訳（『雑阿含』1335＝『別訳雑阿含』355）は比丘の警覚という内容になっているが、パーリは神と比丘の主客が逆になっているため、むしろ神を諫めるという内容になっている。しかし「森相応」としては漢訳の方が正しいように思われるが、今はそのままにしておく。

『雑阿含』1345：見多比丘を讚嘆して没した。

『雑阿含』1349：神の相手は優楼鳥という鳥。

『雑阿含』1350：神の相手は釈尊であり、現れる目的は自内証とでも処理すべきであ

ろうが、「森に住む天神」であるから「その他」として処理したもの。

なお SN.009-006=『雑阿含』1336=『別訳雑阿含』356は「その他」として処理してあるが、今は三十三天の神になっている尊者アヌルッダの元の妻が誘惑したというものであるから、これは「天子相応」に配属すべきものという結論になっている。

このように「森相応」の神は比丘が相手であり、好ましからぬ比丘の目を覚ましめるために現れることが多いが、中には比丘を褒めるために現れることもある、ということになる。

[5] 最後に「婆羅門を見た」の偈を検討する。この偈は詳しくは「実に久しぶりに般涅槃したバラモンを見た。住せず、求めず、世間の執着を超えてわたった者を」という偈文である。

この偈の有・無の比率は次のとおりである。

	パーリ			雑阿含			別訳雑阿含		
	天	天子	森	天	天子	森	天	天子	森
有	1.2%	3.3%	0%	87.0%	18.5%	0%	89.6%	14.3%	0%
無	98.8%	96.7%	100%	13.0%	81.5%	100%	10.4%	85.7%	100%

[5-1] 上記の表の『雑阿含』と『別訳雑阿含』を見る限り、この偈は「天相応」の神が誦するという特徴がある。しかるにパーリの「天相応」にはこの偈はただ1経にしか見いだされない⁽¹⁾。

その1経というのは、「天相応」の最初の経すなわち SN.001-001-001である。そしてここでは神はこの偈を誦すために現れたという形になっている。対応する漢訳の『雑阿含』も『別訳雑阿含』も同じである。しかし続く SN.001-001-002にはこの偈はないが、対応する『雑阿含』1268、『別訳雑阿含』179では001と同じくこの偈が経の主題となっている。『雑阿含』『別訳雑阿含』においてはこの偈はほぼすべての経に現れるし、パーリが冒頭の経にこれを置くのは、この冒頭にこそ「天相応」全体の編集意図が現れており、だからこそ『雑阿含』と『別訳雑阿含』には繰り返し繰り返しして記されているとすれば、パーリの続く経ではこれが省略されているものと考えざるを得ない。パーリでは前文も結文も省略されることが多く、この偈はその結文に含まれるので省略されたのであろう。このように考えれば、この偈のもつ意味はすこぶる重要であるとしなければならない。

(1) パーリではこの句（一部分は異なるが「実に久しぶりに般涅槃したバラモンを見た。……世間の執着を超えてわたった者を」の部分は同じである）は他に SN.002-002-008 にしか現れない。

[5-2] この偈の意味をパーリの注釈書は「過去仏であるカッサパ仏（迦葉仏）の般涅槃を見て以来久しぶりに見た」の意と解説している。

原始仏教聖典によれば釈尊もそして仏弟子たちも数多くのブツダが存在することを認め、過去世にはたくさんのブツダたちが存在したし、また未来世にもたくさんのブツダたちが存在するであろうことを信じていた⁽¹⁾。その過去仏のなかの現在世にもっとも近いのが迦葉仏であるから、この偈は確かに迦葉仏をイメージしていたのであろう。

そして「久しぶりに見た般涅槃をした婆羅門」とは釈迦牟尼仏であることはいままでもない。「神の相手」の項で見たように夜更けにあたり一面を輝かせて現れるのは釈尊に会うためであり、彼らはこの偈を釈迦牟尼仏に捧げるために現れたといっても過言ではないであろう。

「般涅槃」という語は一般的には『涅槃経』に象徴されるように覚者の死を表わす⁽²⁾。昔に見たというのは般涅槃した迦葉仏のことであるとすれば、久しぶりに般涅槃した婆羅門を見たというのは、釈尊の般涅槃であり、これもクシナーラーで般涅槃した釈尊を意味するのかもしれない。

しかしこの言葉は生存中の覚者の悟りを意味することもあるようであり、「天相應」「天子相應」には確かに釈尊は現前されているから、今の場合は般涅槃という語が現存する聖者に対しても使われる例としなければならない。

- (1) 釈尊自身も、そして仏弟子たちも、釈尊の教えの根底には過去には諸々のブッダがあり、そのブッダたちの通ったと同じ道を釈尊も通ったのであり、そのブッダたちと同じ悟りを釈尊も悟り、そのブッダと同じ教えを釈尊も説いたという自覚を持っていた。それは次のような原始聖典の言葉に見ることができる。

[1] 釈尊は過去の仏たちが通った道を通して仏になったという自覚

① 諸々のブッダの追及した古い道・古いまっすぐな径とは何か。それは八支聖道である。これらをたどって過去の**諸々のブッダ**はブッダとなり、自分もブッダになった)。SN.012-065 (vol. II p.106)、『雑阿含』287 (大正2 p.080下)、『増一阿含』038-004 (大正2 p.718下)

② その道によって過去のブッダである**ヴィパッシン**が行き、その道によって同じく**シキン**と**ヴェッサブー**と**カクサンダ**と**コーナーガマナ**と**カッサバ**が行ったところのその直き道によって、あなたゴータマは行かれました。そして七人のブッダたちはこの四諦の真理を説かれました。Therag. vs.490~1

[2] 諸々のブッダが覚った真実を釈尊も覚ってブッダとなったという自覚

① 縁起とはなにか。生に縁って老死ありというのは、**諸々の如来**が世に出ても出なくてもこのことわりは定まり、法として定まり、法として確定した互いに縁となる理法である。これを如来は覚り、教え示す。SN.012-020 (vol. II p.025)、『雑阿含』296、『雑阿含』299、『雑阿含』854

[3] 諸々のブッダが説いた教えを釈尊も説くという自覚

① 四諦は**諸々のブッダ**の説いたもっとも勝れた教え (buddhānaṃ sāmukkaṃsika dhammadesanā) とされる。DN.005 *Kūṭadanta-s.*、DN.014 *Mahāpadāna-s.*、*Udāna* 005-003 (p.049)、『中阿含』133「優波離経」、『中阿含』161「梵摩経」、『中阿含』038「郁伽長者経」、『増一阿含』018-004、『増一阿含』023-001、増一阿含 024-005

② 諸悪莫作 衆善奉行 自浄其意 これは**諸々のブッダ**の教えである (etaṃ buddhāna sāsanaṃ) は「七仏通誡偈」「諸仏通誡偈」と呼ばれる。Dhammapada v.183、『法句経』下、『法集要頌経』3、『根本説一切有部毘奈耶』1、『増一阿含』44、『四分律比丘戒本』、『十誦律比丘戒本』、『善見律毘婆沙』

③ あらゆる過去世の**諸々の等正覚者**・世尊は、ことごとく業論者・行為論者・精進論者であった。現在の私も業論者・行為論者・精進論者である。AN.003-135 (vol.1 p.287、南伝 17 p.473)

- (2) 般涅槃という語の意味をざっと調査してみると次のような用例がある。

死を意味する用法

涅槃経の般涅槃：南伝 07 pp.72,83,123

に関連する用法：南伝 07 p.165 (第善見王経)

覚者の死を意味する：南伝 18 p.138、南伝 21 p.257、南伝 04 p.426 (500 結集) , 439 (700 結集)、南伝 62 p.348 (『清浄道論』)

般涅槃者の塔廟：南伝 59 下 p.158

過去仏：南伝 06 p.368, 427 (大本経)

般涅槃してから久しからず：南伝 06 p.291

生きている悟りを意味する？

南伝 04 p.240

南伝 22 上 p.170

曖昧

南伝 09 p.273、408

南伝 21 p.103

[5-3] ところで「天相応」に配置した『雑阿含』と『別訳雑阿含』の経にこの偈がないものが何故あるのであろうか。このようなケースのものは次の経である。

まず『雑阿含』1078＝『別訳雑阿含』017であるが、これは SN.001-002-010 の対応経であり、パーリは神が尊者サミッディの前に現れるから、これは「森相応」に配属されるべき経であるという結論を得ている。

次に SN.001-003-005 の対応経の『雑阿含』582 であるが、これはこの前経の『雑阿含』581 と同主題の経であり、おそらくこの偈が脱落したものと考えられる。

次に『雑阿含』1315＝『別訳雑阿含』314 であるが、偈の内容が SN.001-008-005 と相似するから「天相応」に配属したのであるが、天は固有名詞を有する梅檀天子であるから、「天子相応」に配置すべきものという結論を得ている。

また『雑阿含』1284＝『別訳雑阿含』282 は断琴人と 6 人の天女の会話であって、これはデータから削除したほうがよいという結論になっている。

その他は以下であって、これらは仏在処といい、経のシチュエーションといい、他の経とは異なる特異な特徴をもつ。

『雑阿含』1192＝『別訳雑阿含』105 (SN.001-004-007 の対応経) : 仏在処はカピラヴァットゥで「大会経」を踏まえたもの

『雑阿含』1289＝『別訳雑阿含』287 (SN.001-004-008 の対応経) : 仏在処は王舎城で、世尊が足をけがしたというシチュエーション (後述するようにデーヴァダッタの破僧が背景にある) 。

『雑阿含』1274＝『別訳雑阿含』272 (SN.001-004-009 の対応経) : 仏在処は重閣講堂で神はコーカナダーという雨雲の娘

『雑阿含』1273＝『別訳雑阿含』271 (SN.001-004-010 の対応経) : 仏在処は重閣講堂で神はチューラ・コーカナダーという雨雲の娘

『雑阿含』1270＝『別訳雑阿含』269 (SN.001-004-010 の対応経) : 仏在処は重閣講堂で神はチューラ・コーカナダーという雨雲の娘

これらはこのような特殊なシチュエーションをもつ経であるから、定型的・形式的に盛り込まれる「婆羅門を見た」の偈がないものと考えられる。詰まる所をいえば、この偈は漢訳

の「天相応」に配置されるべき経のすべてに存するということになる。

[5-4] 逆に「天子相応」でこの偈がある経を調べてみよう。

まず『雑阿含』597＝『別訳雑阿含』182、『雑阿含』596＝『別訳雑阿含』181 (SN.002-002-007の対応経)、『雑阿含』1276＝『別訳雑阿含』274 (SN.002-003-002の対応経)は[3]においてすでに「天相応」に移すべき経であるという結論を得ている。

次に『雑阿含』1269 (SN.002-002-005の対応経)であるが、これも[2]において「天相応」に移すべき経であるという結論を得ている。

またSN.002-002-008＝『雑阿含』585＝『別訳雑阿含』169は[3]においてさまざまな面において非常に特異な経であるということを描き指し示しており、これは例外と見るべきであろう。とするならば詰まるところ、「天子相応」に配置されるべき漢訳経のすべてにはこの偈は存在しないということになる。

[5-5] 以上のように「天相応」の中にはこの偈がないものもあり、一方では「天子相応」のなかにこの偈があるものもあるのであるが、これら例外にはそれぞれの理由があって、上記のような措置を講じてみると、「天相応」の経にはこの偈があり、「天子相応」の経にはこの偈がないのが原則と考えてよいであろう。

[5-6] この他にもう一つ面白い情報があることに気付かされる。それは仏在処との関係である。

「天相応」については仏在処が記載されている経のなかで祇園精舎以外を仏在処とする経は以下のものである。このなかに「婆羅門を見た」の偈があるものはない。

SN.001-002-010：王舎城の温泉精舎

『雑阿含』1078：王舎城迦蘭陀竹園

『別訳雑阿含』017：王舎城迦蘭陀竹林

SN.001-004-007：釈迦族のカピラヴァットウの大林

『雑阿含』1192：迦毘羅衛の迦毘羅衛林

『別訳雑阿含』105：釈翅の迦毘羅衛の林

SN.001-004-008：王舎城のマンダクッチの鹿野苑

『雑阿含』1289：王舎城の金婆羅山の金婆羅鬼神住処の石室

『別訳雑阿含』287：王舎城の毘婆山側の七葉窟

SN.001-004-009：ヴェーサーリーの大林重閣講堂

『雑阿含』1274：毘舍離の彌猴池の側にある重閣講堂

『別訳雑阿含』272：毘舍離の北の彌猴彼岸の精舎

SN.001-004-010：ヴェーサーリーの大林重閣講堂

『雑阿含』1273：王舎城の山谷精舎

『雑阿含』1270：王舎城の山谷精舎

『別訳雑阿含』269：王舎城の耆尼山中

『別訳雑阿含』271：王舎城の耆尼山

「天子相応」にはただ1つだけ見いだされる。それはSN.002-002-008＝『雑阿含』585＝『別訳雑阿含』169であって、これは上述のように何から何まで異例づくめの奇妙な経である。

そうすると、この偈がある経のすべての仏在処は祇園精舎ということになる。先に祇園精舎を舞台とする経は様式化、形式化が進んでいるといったが、この偈もまたその様式化、形式化の1つの要素であるといえるかもしれない。

[5-7] ところでこの偈は以下のことを連想せしめる。

「律蔵」の座臥具韃度には次のようなエピソードが記されている。商用で王舎城にやってきた給孤独長者が明るる日の朝に王舎城の長者がブッダを上首とする比丘サンガを招待するというのを聞いた時、給孤独長者は「あなたは今ブッダといったか」と尋ねた。「その通りである、私はブッダといった」と王舎城の長者が答えた時、給孤独長者は「これはブッダである、ブッダであるというのは、その音さえ聴くのは難しい (ghoso pi kho eso gahapati dullabho lokasmim yad idam buddho buddho 'ti)。私は明日、世尊応供正等覚者にお目にかかることができるであろうか」と確認し、初めて釈尊に会ったというのである⁽¹⁾。その他に螺髻梵志ケーニヤのエピソード⁽²⁾にも同じような状況が記されている。またこの世でブッダに会うことは難しいという意の言葉は常套句であって、原始仏教聖典のそこかしこに見いだされる。

このようにブッダはめったに世に現れない、そのブッダに会えたのはすこぶるの僥倖であるということを、この偈は表わしているのではなかろうか。

(1) *Vinaya Senāsanakkhandhaka* (臥坐具韃度 vol. II p.154、南伝 04 p.237)、『中阿含』028「教化病経」(大正 01 p.459 下、国訳 04 p.122)、*SN.010-008* (vol. I p.210、南伝 12 p.367)、『雑阿含』592 (大正 02 p.157 中、国訳 03 p.301)、『別訳雑阿含』186 (大正 02 p.440 中)、『四分律』「房舎韃度」(大正 22 p.938 中、国訳 04 p.060)、『五分律』「臥具法」(大正 22 p.166 下、国訳 14 p.237)、『十誦律』「臥具法」(大正 23 p.243 下、国訳 06 p.308)、『僧祇律』「雑誦跋渠」(大正 22 p.415 上、国訳 10 p.012)、『根本有部律』「破僧事」(大正 24 p.138 中、国訳 24 p.144)

(2) *Suttanipāta* p.106 (南伝 24 p.207) = *MN. vol. II* p.146

[6] 上記の検討により、データの処理を変更した結果についてまとめておく。

[6-1] データの処理を変更したのは下記データである。

(1) データの削除

天相応の『雑阿含』1284 = 『別訳雑阿含』282

天子相応の『雑阿含』1271 = 『別訳雑阿含』270

(2) 相応間の移動

天相応⇒天子相応

『雑阿含』1315 = 『別訳雑阿含』314 (SN.001-008-005 との対応を外す)

天相応⇒森相応

SN.001-002-010 = 『雑阿含』1078 = 『別訳雑阿含』017

天子相応⇒天相応

『雑阿含』1276 = 『別訳雑阿含』274 (SN.002-003-002 との対応関係を外す)

『雑阿含』1269

『雑阿含』597 = 『別訳雑阿含』182

『雑阿含』596＝『別訳雑阿含』181

天子相應⇒森相應

SN.002-003-005

森相應⇒天子相應

SN.009-006＝『雑阿含』1336＝『別訳雑阿含』356

(3) 固有名詞の「有り」から「無し」への訂正

SN.001-004-001

SN.001-004-002

SN.001-004-003

SN.001-004-004

SN.001-004-005

SN.001-004-006

SN.001-004-008

SN.001-004-009＝『雑阿含』1274＝『別訳雑阿含』272

SN.001-004-010＝『雑阿含』1273＝『別訳雑阿含』271＝『雑阿含』1270＝『別訳雑阿含』269

(4) 現れる目的の「その他」⇒「釈尊への質問」への訂正

SN.002-003-006＝『雑阿含』1307＝『別訳雑阿含』306

[6-2] 基本情報としては変わらないのであるが[第1表]も含めて修正統計表を作成しておく。

[修正第1表] 経に関する基礎的統計

	SN.				雑阿含				別訳雑阿含				総計
	天	天子	森	計	天	天子	森	計	天	天子	森	計	
経数	80	30	15	125	78	24	22	124	77	26	14	117	366
仏在処													
祇園精舎	76	20	0	96	72	22	15	109	72	23	0	95	300
その他	4	9	1	14	6	2	7	15	5	2	1	8	37
不記載	0	1	14	15	0	0	0	0	0	1	13	14	29
釈尊													
登場	77	29	1	107	78	23	1	102	76	25	1	102	311
不登場	3	1	14	18	0	1	21	22	1	1	13	15	55
前文													
有	26	30	15	71	78	24	22	124	77	26	14	117	312
無	54	0	0	54	0	0	0	0	0	0	0	0	54

結文													
有	1	6	10	17	78	24	22	124	77	25	2	104	245
無	79	24	5	108	0	0	0	0	0	1	12	13	121

[修正第2表] 神に関する基礎的統計

	SN.				雑阿含				別訳雑阿含				総計
	天	天子	森	計	天	天子	森	計	天	天子	森	計	
経数	80	30	15	125	78	24	22	124	77	26	14	117	366
神を示す語													
天	78	1	14	93	2	1	0	3	72	5	2	79	175
天子	0	29	1	30	72	21	2	95	2	19	0	21	146
天神	0	0	0	0	0	2	20	22	0	1	11	12	34
その他	2	0	0	2	4	0	0	4	3	1	1	5	11
固有名詞													
有	0	29	1	30	0	22	0	22	1	24	0	25	78
無	80	1	14	95	78	2	22	102	76	2	14	92	288
現れる時刻													
夜	12	7	0	19	76	19	0	95	43	3	0	46	160
昼	0	1	9	10	0	1	8	9	0	1	8	9	28
その他	0	0	1	1	0	0	1	1	0	1	1	2	4
不記載	68	22	5	95	2	4	13	19	34	21	5	60	174
現れ方													
輝かせて	12	7	1	20	76	21	1	98	74	21	1	96	214
不記載	68	23	14	105	2	3	21	26	3	5	13	21	152
神の相手													
釈尊	75	29	0	104	78	23	1	102	77	25	0	102	308
比丘	0	0	10	10	0	0	16	16	0	0	11	11	37
その他	0	1	4	5	0	1	4	5	0	1	2	3	13
不記載	5	0	1	6	0	0	1	1	0	0	1	1	8
去り方													
没した	1	2	0	3	78	23	5	106	32	1	1	34	143
宮に還った	0	0	0	0	0	0	0	0	45	23	0	68	68
その他	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	2
不記載	79	28	15	122	0	1	15	16	0	2	13	15	153

神の住処													
天	3	6	0	9	2	4	0	6	2	4	0	6	21
森	0	0	13	13	0	1	20	21	0	1	12	13	47
不記載	77	24	2	103	76	19	2	97	75	21	2	98	298
現れる目的													
釈尊に質問	50	9	0	59	52	10	0	62	52	10	0	62	183
自内証	28	20	0	48	26	13	0	39	25	15	0	40	127
比丘の警覚	0	0	11	11	0	0	16	16	0	0	11	11	38
その他	2	1	4	7	0	1	6	7	0	1	3	4	18
婆羅門を見た													
有	1	1	0	2	71	1	0	72	72	1	0	73	147
無	79	29	15	123	7	23	22	52	5	25	14	44	219

[7] 上記のような修正を施した上の結論として、「天相応」「天子相応」「森相応」に登場する神について次のようにまとめることができる。

(1) 「天相応」の神と「天子相応」の神は天界に住み、夜に辺り一面を煌々と照らしながら、釈尊に会うために現れ、また忽然と天宮に還って行き、仏弟子などには見えないうなど共通した属性を有する。

(2) 「天相応」の神と「天子相応」の神の違いの1つは、「天相応」の神には固有名詞がなく「天子相応」の神には固有名詞があるということである。これは「天相応」の神がすでに神になってから久しい**古神**であるのに、「天子相応」の神は神になったばかりの人間時代の業を引きずっている**新神**であるということを表わす。

またもう1つの違いは「天相応」の神は「婆羅門を見た」の偈を誦すが、「天子相応」の神はこの偈を頌さないということである。これは前者の神が釈尊とともに過去仏の影響下にもあることを表わし、後者の神は釈尊だけの影響下にあることを表わす。

「天子相応」の神が多くは釈尊に自内証を確認してもらうために現れるのは、このような背景があるためであると考えられる。

このことは「天相応」の神がパーリ語では‘devatā’という言葉で表わされ、「天子相応」の神が‘devaputta’という言葉で表わされることにも関係があるかもしれない。‘devatā’は‘deva’に抽象名詞を作る‘-tā’という語をつけて作られたものに対して、‘devaputta’は‘deva’に「子供」を意味する‘putta’をつけて作られたものだからである。

(3) これに対して「森相応」の神は地上世界に住み、昼間に比丘らの前に現れ、ひっそりといつの間にやら消えているという、人間に近い妖精とでもいべき存在である。それにも拘わらずパーリでは「天相応」の神と同じ‘devatā’という言葉で表わされるのは不可解であり、筆者にはこの理由が理解できない。

【9】 「天相應」 「天子相應」 「森相應」 に収録されている経の説時

[1] 上記によってサンユッタニカーヤ有偈編の「天相應」「天子相應」「森相應」に登場する神々の考察は終了した。しかし本稿制作のそもそもの動機は「はじめに」にも記したように、SN.に収録されている経の説時を推定することであった。その手始めに第1相應である有偈篇の「天相應」から取り掛かったのである。しかしながらこれらの経には説時推定の手がかりになる登場人物が皆無というに等しく、お手上げ状態になっていつの間にやら「有偈篇の神たち」というぼんやりしたテーマになってしまったのである。

しかしながら本稿のそもそもの動機であるから、ここに含まれる経の説時推定を放棄することはできない。最後にこれについて考えてみたい。

しかし次の経はすでに他の論文、研究ノートによって説時が推定されている。

SN.001-002-010=『雑阿含』1078=『別訳雑阿含』017は、「モノグラフ」への掲載順序が後先になっているが、次号に掲載する【研究ノート16】「*Majjhima-nikāya* と対応漢訳経の説示年代の推定」の第【131,132,133,134】節中のマハーカッチャーナがサミッディ比丘に一夜賢者の偈を解説する MN.133 *Mahākaccānabhaddekaratta-s.* (大迦旃延一夜賢者経)

(1) と同じころであろうということから、その説時は釈尊72歳=成道38年の雨安居中としてある。

SN.001-004-007=『雑阿含』1192=『別訳雑阿含』105は、今号に掲載した【研究ノート13】「*Dīgha-nikāya* と対応漢訳経の説示年代の推定」中の【020】節の DN.020 *Mahāsamaya-s.* (大会経) (2) においてこの経の対応経として処理しており、その説時は釈尊75歳=成道41年の雨安居中である。

SN.001-005-008は、【研究ノート16】の第【143】節の MN.143 *Anāthapiṇḍikovāda-s.* (教給孤独経) (3) のなかで釈尊70歳=成道36年の雨安居中として処理してある。

SN.001-005-010は、同じく【研究ノート16】の第【140】 MN.140 *Dhātuvibhaṅga-s.* (界分別経) (4) のなかで、その説時を釈尊61歳=成道27年ごろとしてある。

SN.002-002-005=『雑阿含』1316=『別訳雑阿含』315=『雑阿含』1269は、上記【研究ノート16】の第【131,132,133,134】中で扱ったローマサ・カンギヤ比丘が釈迦国から舎衛城に行き、釈尊から一夜賢者の教えを聞くという内容をもつ MN.134 *Lomasakaṅgiyabhaddekarata-s.* (盧夷強耆一夜賢者経) (5) の同時経として釈尊7歳=成道39年の雨安居後として処理してある。

SN.002-002-010=『雑阿含』593=『別訳雑阿含』187は SN.001-005-008 と同じ偈であるから上記を参照されたい。

SN.002-003-004=『雑阿含』595=『別訳雑阿含』189は SN.001-005-010 と同じ偈である。

SN.009-005と『別訳雑阿含』361は「モノグラフ」第21号(2017年4月)に掲載した【研究ノート12】「阿難が登場し釈尊が登場しない経の説時推定」(森章司)において、釈尊入滅後の経として処理してある。

SN.009-007=『雑阿含』1342=『別訳雑阿含』362は同じ「モノグラフ」に掲載した【研究ノート11】「懲罰羯磨制定年の推定」（森章司）において、同じく釈尊入滅後の経として処理してある。

- (1) vol.Ⅲ p.192、南伝11下、p.255、片山・中部6 p.155
- (2) vol.Ⅱ p.253、南伝07 p.271
- (3) vol.Ⅲ p.258、南伝11下 p.365、片山・中部6 p.303
- (4) vol.Ⅲ p.237、南伝11下 p.332、片山・中部6 p.263
- (5) vol.Ⅲ p.199、南伝11下 p.269、片山・中部6 p.177

[2] ということで本稿に扱った経の説時推定に取りかかりたいと考えるが、大体の目安として次のことが考えられる。

- (1) 「森相応」に含まれる経は修正データを元にする、釈尊はそのすべてに登場しない。もっとも『雑阿含』の場合は釈尊が登場しないに拘わらずすべての経に仏在処が記されるけれども、対応するパーリにも『別訳雑阿含』にも仏在処が記される経はない。したがって「森相応」に収められる経の大元の伝承には仏在処は記されていなかったものと理解してよいであろう⁽¹⁾。

この釈尊が登場しない経は、今までの説時推定作業の前例に倣って釈尊入滅後の経として処理する。森相応に収められる経で釈尊が登場する経は、修正データで「天相応」から「森相応」に移動した経であるが、SN.001-002-010=『雑阿含』1078=『別訳雑阿含』017だけである。この経の仏在処は王舎城の温泉精舎あるいは王舎城迦蘭陀竹園であり、パーリには尊者サミッディ（漢訳は1比丘）が登場するので、その対応経も含めてMN.133 *Mahākaccānabhaddekaratta-s.*（大迦旃延一夜賢者経）を説く⁽²⁾の同時経として処理済みであることは上述したとおりである。

- (1) もっともそれにしては『雑阿含』の記す仏在処は舎衛城の祇樹給孤独園だけでなく、その他の住処も記されるものがあり、形式的にすべてを祇樹給孤独園として処理するならばともかくそうでないのは不可解で、これら他の住処をどのような資料に基づいて記したのであろうか。ともかく今の処理としてはこれらは無視することにする。

- (2) 「天子相応」の神は過去世の人間であった時の業を背負っているいわば「新神」である。業というのはもちろん神に生まれるほどの善業であって、しかも彼らは多くの場合、自分の自内証を釈尊に確認するために釈尊の前に現れる。ということは彼らは前世の人間であった時に釈尊の教えに触れていたと解されるであろう。とするならば大体の傾向として、彼らが死んで神に生まれ変わったのは釈尊の教化活動の前半期ではなく後半期であったと考えてよいのではなかろうか。そして神になって釈尊の前に現れるのであるから、「天子相応」に含まれる経の説時は釈尊の教化活動の後半期ということになる。

釈尊は35歳で成道され、80歳の誕生日（出胎の日を誕生日とした満年齢）までの45年間を教化活動に捧げられた。その後半は計算通りとすれば成道23年以降ということになるが、大きな目処として成道30年以降としてよいのではなかろうか。

もちろんこれは大体の傾向としてのごとくであって、1つ1つの経の説時はそれぞれの経に含まれる情報を勘案しなければならない。

(3) 「天相応」に収録される経には原則として「婆羅門を見た」の偈があり、これは般涅槃した (*parinibbuta*) 釈尊を見たという意味であるから、釈尊の入滅後と解釈できないこともないが、現前に釈尊が登場するのであるからそのように解釈できないことはすでに述べた。

この神が現れる主要な動機は、釈尊というブッダが世界に現れたことを知ってこれを讃嘆するためであるから釈尊成道直後もあり得るであろう。そういう意味ではこれらの経の説時を限定することはできない。

[3] 以上のような総体的な背景を勘案しながら、1つ1つの経の説時を考えてみたい。ただし「森相応」に含まれる経はすべて釈尊滅後の経とする。

[3-1] 説時推定に役立つのは経中に登場する登場人物と仏在処である。

「天相応」と「天子相応」に収録される経中に、固有名詞を有する人名が現れるのは次の経である。

サーリプッタ：SN.001-005-008

尊者モーガラージャ (*āyasmā Mogharāja*) : SN.001-004-004

ガティーカーラ：SN.001-005-010

ガティーカーラ：SN.002-003-004=無煩天子：『雑阿含』595=1天：『別訳雑阿含』189

サーリプッタ、アーナンダ：SN.002-002-010=給孤独長者、舍利弗、阿難：『雑阿含』593=須達長者、舍利弗、阿難：『別訳雑阿含』187

アーナンダ、サーリプッタ：SN.002-003-009=阿難、舍利弗：『雑阿含』1306=阿難、舍利弗：『別訳雑阿含』305

阿難：『雑阿含』1271=阿難：『別訳雑阿含』270

このうち [1] に記したように、SN.001-005-008、SN.001-005-010 および SN.002-003-004 とその対応漢訳、SN.002-002-010 とその対応漢訳経はすでに説時推定がすすんでいる。

残りの SN.001-004-004 は本稿本文中に註記したように、尊者モーガラージャ (*āyasmā Mogharāja*) はパーヴァリンの16人の弟子たちの一人で、彼が具足戒を受けて比丘になったのは釈尊64歳の雨安居前のことであつたからそれ以降の経であり、また SN.002-003-009=『雑阿含』1306=『別訳雑阿含』305 と『雑阿含』1271=『別訳雑阿含』270 には阿難が登場するから、阿難が秘書室長に就任した釈尊54歳の雨安居後以降の経ということになる。

[3-2] 説時推定にはもう1つ仏在処が大きな手がかりになる。

ただし舎衛城や王舎城は釈尊が生涯中に何度も何度もそこに滞在され、雨安居も過ごされているから、その経に特別の事績が記されていない限り説時の特定には役立たない。固有名詞を有する人物が登場したり、特別の事績が記されているものはすでに説時が推定されているから、その他の舎衛城の祇園精舎や王舎城の竹林園を仏在処とする経はすべて原則として「釈尊48歳=成道14年の雨安居前の祇園精舎が釈尊教団に寄進される」もしくは「釈尊46歳=成道12年の雨安居後の竹林園に僧院が建設される」の以後経ということになる。

[3-2-1] ただし「天子相応」に含まれる経は釈尊の教化活動の後半期の成道 30 年以降が説時であると考えらるならば、これらはある程度限定されることになる。

われわれは釈尊が舎衛城と王舎城で雨安居を過ごされたのは次の年であると考えている。

舎衛城

釈尊 48 歳＝成道 14 年

53 歳＝ 19 年

61 歳＝ 27 年

65 歳＝ 31 年

68 歳＝ 34 年

70 歳＝ 36 年

73 歳＝ 39 年

77 歳＝ 43 年

王舎城

釈尊 44 歳＝成道 10 年

45 歳＝ 11 年

46 歳＝ 12 年

47 歳＝ 13 年

50 歳＝ 16 年

54 歳＝ 20 年

62 歳＝ 28 年

64 歳＝ 30 年

72 歳＝ 38 年

74 歳＝ 40 年

78 歳＝ 44 年

とするならば「天子相応」に記載されている経のうち舎衛城を仏在処とする経の説時は釈尊 65 歳＝成道 31 年の以後経、王舎城を仏在処とするものは釈尊 64 歳＝成道 30 年の以後経ということになる。もちろん大体の見当ということであり、仏在処以外に説時を推定する情報が含まれている経を除く。

[3-2-2] 説時を特定する情報が含まれている経の 1 つは王舎城のマッタクッチの鹿野苑を仏在処とする SN.001-004-008＝『雑阿含』1289＝『別訳雑阿含』287 である。この経は本文中の註に記したごとく、デーヴァダッタが釈尊を亡きものにしようとして靈鷲山上から岩を投げ落として釈尊が足を怪我された時を背景としているようであるから、釈尊 72 歳＝成道 38 年の雨安居中ということになる。上記註の中に記した本稿には扱っていない SN.004-002-003＝別訳雑阿含 029 ⁽¹⁾ もこれと同じ状況にあるのであるから同様である。

(1) 大正 02 p.382 中

[3-2-3] 『雑阿含』には王舎城の山谷精舎を仏在処とする経がいくつか見いだされる。対応経も併せて紹介すると次の経である。

SN.001-004-010：ヴェーサーリーの大林重閣講堂

『雑阿含』1273：王舎城の山谷精舎

『雑阿含』1270：王舎城の山谷精舎

『雑阿含』1272：王舎城の山谷精舎

『別訳雑阿含』271：王舎城の耆尼山

『別訳雑阿含』269：王舎城の耆尼山中

このように王舎城の山谷精舎とするのは『雑阿含』のみである。後述するように『雑阿含』には他にも王舎城の山谷精舎を仏在処とする経があるが、パーリにも『別訳雑阿含』にもこの地名はでないから、これは『雑阿含』のみに現れる地名であって、パーリではどこに相応するのかわからない。

ところで『雑阿含』1273、1270、1272の対応経であるSN.001-004-010は仏在処をヴェーサーリーの大林重閣講堂とする。SN.001-004-010が仏在処を大林重閣講堂とするのは、この経に登場する神がチューラ・コーカナダーという雨雲の娘（Cūḷa-kokanadā Pajjunnassa dhītā）であって、その前経のSN.001-004-009の登場神がコーカナダーという雨雲の娘（Kokanadā Pajjunnassa dhītā）であるからこの2人の神は関連があり、前経が仏在処を大林重閣講堂とするからであろう。

このSN.001-004-009の漢訳対応経は『雑阿含』1274＝『別訳雑阿含』272であり、その仏在処は毘舍離の獼猴池の側にある重閣講堂＝毘舍離の北の獼猴彼岸の精舎であってパーリと同じい。しかもこれらの経に登場する神は拘迦那婆天女と朱盧陀天女＝波純提天女と拙羅天女であって、今の山谷精舎を仏在処とする経は拘迦那婆天女＝波純提の娘であった求迦尼婆天女＝拘迦尼天女であるから、登場する神も共通するわけである。とするならば仏在処も共通すると考えたほうが合理的であって、ここでは漢訳の王舎城・山谷精舎を捨ててパーリの大林重閣講堂の方を採用したい。もっともこれによってその説時が特定できるわけではなく、釈尊が最初にヴェーサーリーで雨安居を過ごされた釈尊51歳＝成道17年以降の経とする外はない。もちろん「天子相応」に含まれる経があれば、これも成道30年以降とすべきであるが、以上には「天子相応」に含まれる経はない。

これらの外には山谷精舎を仏在処とする経は『雑阿含』1271である。『別訳雑阿含』270がこの対応経であるがパーリには対応経がない。『別訳雑阿含』の仏在処は舎衛国祇樹給孤獨園である。この経は、阿難がSN.001-004-010とその対応経の内容である四句法経＝四句の法を説いたので、一人の婆羅門がそれは非人の教えではないかと質問するので世尊に確認し、世尊がそれは「あるとき（かつて）拘迦尼天女＝求迦尼婆天女が説いたのであるから非人説である」と説かれたというものである。したがって天女がこれを説いた時点と阿難が世尊に確認した時点は違うのであるから、必ずしも山谷精舎にはこだわらなくともよい。むしろこの経には阿難が登場するので、こちらの方を注目すべきであろう。ということですので [2-1] において、阿難が秘書室長に就任した釈尊54歳の雨安居後以降の経として処理してある。

そして本稿の対象経ではないが、山谷精舎を仏在処とする経にはもう2経あり、それが『雑阿含』768と726である。この2つの経は阿難が善知識は梵行の半分だとの発言に釈尊が善知識の意義を説いたというもので同一内容である。これらのパーリの対応経はSN.045-002⁽¹⁾であり、『増一阿含』44-010⁽²⁾にも対応する。パーリは仏在処を釈迦国のサッカラと名づける釈迦族の町（Sakkara Sakyānaṃ nigama）とし、『増一阿含』は舎

衛国祇樹給孤独園とする。サッカラという町はここにしか見いだされない。したがってこれらの経にも説時を特定する格別の情報は含まれておらず、阿難が登場することによってこれらの経は釈尊 54 歳＝成道成道 20 年の雨安居後の「阿難が釈尊のサンガの侍者（秘書室長）に選任される」の以後の経とする他ないであろう。

以上の外の舎衛城と王舎城を仏在処とする経は、[1] に記したような目処を基準にして処理する。すべて「天子相応」に配属される経であるから成道 30 年以降ということになる。ただしパーリとその漢訳の対応経の仏在処が異なる場合があるから、それはわれわれの基本的な聖典観に則ってパーリの仏在処を採用する。とするならばすべて王舎城ということになるから、これらの説時は釈尊 64 歳＝成道 30 年の以後経ということになる。

SN.002-002-003 (vol. I p.052、南伝 12 p.088) : 王舎城迦蘭陀竹園

対応経の『雑阿含』1301 (大正 02 p.358 上、国訳 03 p.349) と『別訳雑阿含』300 (大正 02 p.476 下) は舎衛国祇樹給孤独園

SN.002-002-004 (vol. I p.052、南伝 12 p.089) : (王舎城の迦蘭陀竹園)

対応経の『雑阿含』597 (大正 02 p.160 上、国訳 03 p.309) と『別訳雑阿含』182 (大正 02 p.439 上) は舎衛国祇樹給孤独園

SN.002-002-006 (vol. I p.053、南伝 12 p.090) : (王舎城の迦蘭陀竹園)

対応経の『雑阿含』586 (大正 02 p.155 下、国訳 03 p.296) は舎衛国祇樹給孤独園

SN.002-002-007 (vol. I p.053、南伝 12 p.090) : (王舎城の迦蘭陀竹園)

対応経の『雑阿含』596 (大正 02 p.159 下、国訳 03 p.308) と『別訳雑阿含』181 (大正 02 p.439 上) は舎衛国祇樹給孤独園

(1) (vol.V p.002、南伝 16 上 p.140)

(2) (大正 02 p.768 下、国訳 09 p.312)

[3-2-4] 舎衛城と王舎城以外が仏在処とされている注目すべき場所はサーケータである。

該当する経は SN.002-002-008 であって、この経はサーケータのアンジャナ林を仏在処とする。ただしこの対応漢訳である『雑阿含』585 の仏在処は釈氏の優羅提那塔所であり、『別訳雑阿含』169 は釈翅鳩羅脾大斯聚落である。優羅提那塔所や鳩羅脾大斯聚落を仏在処とする経は他には見いだせない。そこでここでもパーリ資料を尊重して、この経の仏在処はサーケータとしてその説時を検討する。なおこの経は「天子相応」に属するから、おおまかな目処としては釈尊成道 30 年以降ということになる。

サーケータは舎衛城から南に約 80km のところにある現在のアヨーディヤーに比定してよいであろう⁽¹⁾。サーケータは釈尊時代の北の舎衛城と南のコーサンビーを結ぶ幹線道路の途中にある都市であり、また東のヴェーサーリー、西のタッカシラーを結ぶ幹線道路の中継点でもあって、いわば南北と東西を結ぶ十字路にあった。しかし釈尊の遊行ということを考えれば、舎衛城とコーサンビーを往来する中間地点としてよいであろう。ただしこのサーケータで釈尊が雨安居を過ごされたという記録はない⁽²⁾。

このような地理的要件と釈尊成道 30 年以後という 2 つの条件を満たすのは、釈尊 68 歳＝成道 34 年の雨安居の後（舎衛城からコーサンビーへの途中）か、釈尊 69 歳＝成道 35 年の後（コーサンビーから舎衛城への途中）か、釈尊 75 歳＝成道 41 年の雨安居の後（釈迦国か

らヴァヅガ国スンスマーラギラへの途中)か、あるいは釈尊76歳=成道42年の雨安居の後(コーサンビーから舎衛城への途中)かである。

なお念のためにサーケータ(アヨッジャーを含む)を仏在処とする経(仏弟子の在処は含めない)を調べてみると次のものがある。

アンジャナ林

『中阿含』077「娑鷄帝三族姓子経」(大正01 p.544中、国訳04 p.376) 場所：青林⁽³⁾ 登場人物：年少であった**阿那律**と**難提**と**金毘羅**

SN.046-006~013 (vol.V p.073、南伝16上 p.258) 場所：アンジャナ鹿苑(Añjanavane Migadāya) 登場人物：**クンダリヤ遊行者**(Kuṇḍaliya paribbājaka)

SN.048-043 (vol.V p.219、南伝16下 p.042) 場所：アンジャナ鹿苑 登場人物：比丘たち

Therīgāthā vs.145~150 (p.137、南伝25 p.360) 場所：アンジャナ林 登場人物：**スジャーター**(Sujātā)長老尼が出家する。

カンタキー林(Kaṇṭhakivana)あるいはティカンダキ林(Tikaṇḍakivana)

SN.047-026~028 (vol.V p.174、南伝16上 p.404) 場所：カンタキー林 登場人物：[釈尊は登場しない] **アヌルツダ**、**サーリプッタ**、**マハーモツガッラーナ**

SN.052-004~006 (vol.V p.299、南伝16下 p.163) 場所：カンタキー林 登場人物：[釈尊は登場しない] **アヌルツダ**、**サーリプッタ**、**マハーモツガッラーナ**

AN.005-015-144~150 (vol.III p.169、南伝19 p.236) 場所：ティカンダキ林(Tikaṇḍakivana) 登場人物：比丘たち

AN.005-016-151~158 (vol.III p.174、南伝19 p.244) 場所：ティカンダキ園 登場人物：比丘たち

その他

『雑阿含』556(大正02 p.145下、国訳02 p.143) 場所：娑祇城安禪林 登場人物：多くの比丘尼、**阿難**

AN.004-003-024~029 (vol.II p.024、南伝18 p.045) 場所：カーラカ園(Kāḷakārāma) 登場人物：比丘たち

アヨッジャー(Ayojjhā)

SN.022-095 (vol.III p.140、南伝14 p.219) 場所：ガンガーの側 登場人物：比丘たち

『雑阿含』265(大正02 p.068中、国訳01 p.036) 場所：恒河の側 登場人物：比丘たち

『雑阿含』1174(大正02 p.314下、国訳01 p.271) 場所：恒河の側 登場人物：**牛牧者の難屠**、**舍利弗**

『増一阿含』040-007(大正02 p.741中、国訳09 p.224) 場所：江水の側 登場人物：**摩訶周那**

婆祇陀国⁽⁴⁾

『四分律』「(比丘尼)単提090」(大正22 p.744上、国訳02 p.238) 場所：

登場人物：六群比丘尼、跋提迦毘羅比丘尼

『四分律』 「(比丘尼) 単提 091」 (大正 22 p.744 下、国訳 02 p.239) 場所：

登場人物：六群比丘尼

婆祇提国

『四分律』 「雑毘度」 (大正 22 p.954 中、国訳 04 p.110) 場所： 登場人物：六群比丘

『四分律』 「雑毘度」 (大正 22 p.961 上、国訳 04 p.132) 場所： 登場人物：波闍子比丘

婆伽提国

『四分律』 「雑毘度」 (大正 22 p.952 上、国訳 04 p.102) 場所： 登場人物：毘舍離跋闍子比丘

上記のうち『中阿含』077「娑鷄帝三族姓子経」の対応経は *MN.068 Naḷakapāna-s.* (那羅伽波寧村経) ⁽⁵⁾ であるが、これは仏在処を「コーサラ国のナラカパーナ (Naḷakapāna) にあるパラサ林 (Palāsavana)」とする。いずれにしてもここに登場する阿那律と難提と金毘羅 (パーリはこの3人の外にバグ、クンダダーナ、レーヴァタ、アーナンダもあげる) は出家してからまだ日の浅い年少の比丘であったとされている。アヌルッダたちが釈尊から具足戒を受けたのは釈尊 47 歳 = 成道 13 年の雨安居後のことであるから、少なくともこの経の説時は釈尊の後半生のことではないであろう。したがってこの経と今問題としている *SN.002-002-008* の説時は異るとみなしなければならない。ちなみに『中阿含』077 = *MN.068* はすでに 48.5 釈尊が初めてコーサラ国に足を踏み入れられた釈尊 48 歳 = 成道 14 年ころとして処理済みである。

その他のサーケータ (アヨッジャーを含む) を仏在処とする経には何人かの登場人物があるが説時を特定するための有効な情報は含まれていない。ということで *SN.002-002-008* の説時は上述した2つの条件を満たす一番早い釈尊 68 歳 = 成道 34 年の雨安居後の以後経とする他ないであろう。

ついでに上に紹介したサーケータを仏在処とする経についていえば、その説時は釈尊がサーケータに足を運ばれた最初の機会の以後経とせざるを得ないであろう。それは釈尊 60 歳 = 成道 26 年にコーサンビーで雨安居を過ごされてから次の釈尊 61 歳 = 成道 27 年の雨安居地である舎衛城に到着する間ということになる。サーケータは *MN.024 Rathavinīta-s.* (伝車経) ⁽⁶⁾ = 中阿含 009 「七車経」 ⁽⁷⁾ が物語るように馱馬を使えば舎衛城から1日の日程のところであってコーサンビーよりはるかに舎衛城の方に近い。このような地理的状況にあるサーケータに釈尊が足を運ばれた可能性のあるのは、釈尊 61 歳、70 歳、77 歳の雨安居前 (釈尊 60 歳、69 歳、76 歳雨安居後) の3回であるが、まことに恣意的な判断であるが釈尊 70 歳の雨安居前としておく。

- (1) モノグラフ第 20 号 (2015 年 11 月) に掲載した【論文 26】「原始仏教時代の通商・遊行ルート」(森章司、金子芳夫) p.042 を参照されたい。
- (2) 「モノグラフ」第 6 号 (2002 年 10 月) に掲載した【論文 5】「原始仏教聖典資料に記された釈尊の雨安居地と後世の雨安居地伝承」(岩井昌悟) を参照されたい。
- (3) ‘añjana’ は「青黒色」を意味するからこれはアンジャナ林に相当するであろう。
- (4) これも含めて以下の婆祇提と婆伽提も含めて「婆」を「娑」と読み変えたものである。根

拠はないが赤沼『固有名詞辞典』p.558が「婆は娑の誤写」と解釈しているのにしたがった。

『国訳一切経』にはこれらについての註記はない。

(5) vol. I p.462、南伝 10 p.277

(6) vol. I p.145、南伝 09 p.266

(7) 大正 01 p.429 下、国訳 04 p.036

[2-2-5] ヴェーサーリーを仏在処とする経も存する。次の経である。

SN.001-004-009 (vol. I p.029、南伝 12 p.041) : ヴェーサーリーの大林重閣講堂

『雑阿含』1274 (大正 02 p.350 上、国訳 03 p.322) : 毘舍離の獼猴池の側にある重閣講堂

『別訳雑阿含』272 (大正 02 p.469 上) : 毘舍離の北の獼猴彼岸の精舎

ヴェーサーリーを仏在処とする経については王舎城の山谷精舎の関連事項として [4-2-3] においてふれたように、釈尊 51 歳＝成道 17 年の釈尊が最初にヴェーサーリーで雨安居を過ごされた以降の経とする外はない。

[3-3] 「天相応」で上にふれた以外の、舎衛城ないしは舎衛城の祇樹給孤独園を仏在処とする経の説時は祇樹給孤独園が釈尊教団に寄進された釈尊 48 歳＝成道 14 年の雨安居前の以後経とするほかない。

【10】サンユッタニカーヤと『雑阿含経』『別訳雑阿含経』の形成について

最後にパーリのサンユッタニカーヤと漢訳の『雑阿含経』『別訳雑阿含経』の形成について気付いたところを一瞥しておきたい。

[1] まず現在の大正新脩大藏経の『雑阿含』『別訳雑阿含』の編集形態である。これらはパーリの SN. のように主題別（相応別）に編集されているのではなく、『雑阿含』は 1362 経、『雑阿含』は 364 経のすべてが 1 つの『雑阿含経』『別訳雑阿含経』として列挙されているに過ぎない。

しかしながら『雑阿含』については国訳一切経の和訳者である椎尾弁匡は、姉崎正治の“The Four Buddhist Agamas in Chinese”に準じて、編集の仕方を大正新脩大藏経とは違う形に編集し直している。これは『雑阿含』自体に残されている痕跡や、『瑜伽論』『根本有部律・雑事』などの記す『雑阿含』の組織についての記述を手がかりにし、また SN. の相応部の編集に倣ったものである。

このように編集しかえられた「国訳一切経」の『雑阿含』は、パーリの「天相応」「天子相応」「森相応」に相当する大正新脩大藏経の『雑阿含』に収録されている経を、以下のよう
に 3 つの相応と 14 の品に分けている。それを示すと次のようになる（「国訳一切経」阿含部 1 p.387 以下による）。各品の数字は大正に付せられた経番である。

第 9 諸天相応

第 1 品 995～1003

第 2 品 1004～1012

- 第3品 1013~1022
- 第4品 576~585
- 第5品 586~595
- 第6品 596~603、1267~1269
- 第7品 1270~1279
- 第8品 1280~1289
- 第9品 1290~1299
- 第10 天子相応
 - 第1品 1300~1308
 - 第2品 1309~1318
- 第12 林相応
 - 第1品 1331~1339
 - 第2品 1340~1350
 - 第3品 1351~1362

これによれば、大正新脩大藏經の576~603と995~1022と1267~1299が「天相応」の塊、1300~1318が「天子相応」の塊、1331~1362が「森相応」の塊ということになる。とするならば今は部別に編集されていない『雑阿含』も、かつては「天相応」「天子相応」「森相応」というような部別に編集されていたのであろうと推測される。

筆者は本稿において、この「国訳一切經」や赤沼智善『漢巴四部四阿含互照録』を参照にして、偈の内容を詳しく検討しながらパーリの「天相応」「天子相応」「森相応」を中心として、これと内容的に対応する漢訳經を調査し、本文中にこれを対照させて紹介した。

その上で「天相応」「天子相応」「森相応」のそれぞれの神の性格やら偈の内容やらを勘案して、もともとは「天子相応」に含まれていたSN.002-003-005を「森相応」に移し替えるなどの修正をしたので、この修正データを用いるのは不適當かもしれないが、それを用いると「天相応」「天子相応」「森相応」に収めた『雑阿含經』は次のような結果となる。「大正藏經」の經番を掲げ欠番は1字空けとする。1字空けにはこの間に数十經、数百經の場合もあるので注意されたい。

「天相応」に収めた『雑阿含』の經

576~582 584 586~589 596~603 995~998 1000~1022 1192 1267~1270 1273~1277 1279~1283 1285~1299

「天子相応」に収めた『雑阿含』の經

583 585 593 595 999 1272 1301~1318 1336

「森相応」に収めた『雑阿含』の經

1078 1331~1335 1337~1346 1349~1352 1359 1362

このうち「天子相応」の583、585、593、595を「天相応」に移し替え、1336を「森相応」に移し替えると、おおまかにいうと

「天相応」は576~589、595~603、995~1022、1267~1299の4つのグループ

「天子相応」は1301~1318のグループ

「森相応」は1331~1352のグループ

からなっているということが出来る。当然ながら「国訳一切経」の整理と大体において一致する。

なお「国訳一切経」や“The Four Buddhist Agamas in Chinese”では『別訳雑阿含』は扱われていないが、筆者の調査に基づき上記のような処理をしてみると次のようになる。

「天相応」に収めた『別訳雑阿含』の経

105 132~135 137~142 161~166 168 170~183 231~249 269 271~
275 277~281 283~297

「天子相応」に収めた『別訳雑阿含』の経

136 167 169 187 189 298~317 0356

「森相応」に収めた『別訳雑阿含』の経

017 351~355 357~364

これも「天子相応」の0167、0169を「天相応」に移し替えてみると、おおまかにいうと

「天相応」は132~142、161~183、231~249、269~297の4グループ

「天子相応」は298~317のグループ

「森相応」は351~364のグループ

からなっているということが出来る。

このように見ると、『雑阿含』と同様に『別訳雑阿含』ももともとは相応別に編集されていたものと考えられる。

とするならば今の『雑阿含』と『別訳雑阿含』の編集形態は全く異っているけれども、おそらくこれは「大正新脩大蔵経」の元版となった高麗版、あるいはその元の宋版大蔵経でこのような形に変形したのであって、さらにその元に遡ると姉崎や椎尾が考えたように、SN.の相応別のように部類分けされていたという可能性が高い。そのもともとの部類分けが残滓として残されているから、姉崎や椎尾のように復元が可能となるのである。そうだとすれば、パーリのサンユッタニカーヤと『雑阿含』と『別訳雑阿含』三者はもともとは同じように編集されていたことになる。もっともこれはここに扱った「天相応」「天子相応」「森相応」だけの議論であるが、「国訳一切経」は『雑阿含』全体について同じような作業を行っており、その蓋然性は本稿によって証明されたといつてよいであろう。

[2] 現状のパーリのサンユッタニカーヤと『雑阿含』『別訳雑阿含』の間には、組織のみならず1つ1つの経の形態にも顕著な差異がある。

[第1表]の数字をもとに【5】の【3】に記したように、パーリでは経の前文と結文ともに90%以上が省略されているに対し、『雑阿含』と『別訳雑阿含』はほぼ100%の経が前文と結文を有する。さらに『雑阿含』では釈尊が登場しないからパーリや『別訳雑阿含』では仏在処が記されない「森相応」にまで仏在処が記される。もしこの3者のもとになった**古伝承**があったと想像すれば、パーリは著しく簡略化が進められているし、『雑阿含』は著しく形式化が進んでおり、『別訳雑阿含』はその中間であるということが出来る。

また今は相応というまとまりを考えているのであるが、あるいはこのようにまとめられる前の段階では1つ1つの経が独立して伝承されていたとすれば、**古伝承**の前の**古古伝承**があったということになる。

しかしながら経の成立を第1結集をもって最初の段階であるとするれば、結集伝承においては相応部（雑阿含）は根・力・覚・道などと編集されていた⁽¹⁾とするから、釈尊生前中はどうであったかわからないが、少なくとも釈尊の言行録が聖典として編集された時には、あるまとまりがあったと考えなければならないであろう。とするならば前述した**古伝承**なるものを考える必要がないということになる。

とするならば**古伝承**の時代の1つ1つの経の形態はパーリのように簡略であって、それが『別訳雑阿含』（秦代=350~431=失訳）や『雑阿含』のように形式化されていたのか、それとも初めは『雑阿含』のように形式化されていたものが、徐々に贅肉を切り落として『別訳雑阿含』になり、そしてついにパーリのようになったのであろうか。

すべては推測の範囲であるが、例えば「天相応」の全経にあったはずの「婆羅門を見た」の偈がパーリにおいては第1経（SN.001-001-001）を除いて他のすべての経に存在しない。この偈は「天相応」に含まれる経全部のモチーフとも考えられるにかかわらず、『雑阿含』と『別訳雑阿含』とを対照させることによって初めて知りうることで、パーリだけを単独に提示されてもわかりようがない。これでは経本来が伝えようとする意図を無ならしめることになる。また大部分の経で仏在処が省略されている。本稿では直近前経の仏在処が略されていると解釈して補った（本文中には括弧の中に示した）ので統計表では仏在処が記されているように表示されているが実際はそうではない。対応する漢訳を勘案してもこの措置は正しいと思われる。

まさかPTSの編集者が写本を無視してその編集の際に省略したのではないであろうが、しかし現実には製本された書冊の数ページ前まで遡らないと直近前経には行き着かないから、1つ1つの経の仏在処はわからないといってよい。このようにパーリの1つ1つの経はその独立性を失い、「相応」全体としてとらえなければ経が完全なものとはならない。そもそもパーリのように神と釈尊の偈による問答だけがポンと提示されてもそれが何を表わすか理解できない。ここには誰と誰との対話かということが示されていないのである。これは【資料集8】「パーリ『経蔵』の六事と仏在処一覧」（森章司、金子芳夫）⁽²⁾でも見たところであって、パーリのサンユッタニカーヤは明らかに省略化が進んでおりこれが**古伝承**でないことは明らかである。

といって『雑阿含』には釈尊が登場しない「森相応」に収録されている経にも仏在処が記されている。これも前記資料集でも見たように、『雑阿含』は著しく形式化が進んでいると評しなければならず、これもこのままが**古伝承**でないことは明らかである。

このような意味では、これは翻訳年代などの客観的な考察を抜きにしていうことであるが、『別訳雑阿含』がもっとも本来の形を残しているように感じられる。ひょっとするとこれが**古伝承**に近いものであったかもしれない。

(1) 塚本啓祥『初期仏教教団史の研究』山喜房仏書林 1966年3月 p.182

(2) 「モノグラフ第21号」（2017年4月）所収

[3] しかし経の形式的な部分を除いて内容のみについていえば、サンユッタニカーヤと『雑阿含』と『別訳雑阿含』の3者は実によく対応する⁽¹⁾。明らかに3者は共通した**古伝承**に基づいたものということが出来る。形式は付随的なこととすれば、われわれが現在もつ

パーリと漢訳の原始仏教聖典には信頼性の高い情報が盛り込まれているということをきちんと認識しておく必要があるであろう。

ただし極めて幼稚な疑問で恐縮であるが、「天相應」と「天子相應」に登場する神は仏弟子には見えなかったもののごとくである。したがって神と釈尊の対話も目撃者はいなかったということになる。いくつかの経にはその神と釈尊の対話を翌朝に釈尊がアーナンダらに知らせたとされているから、あるいはそうであったかもしれないが、しかし第3者たる目撃者がいないのに、何故これほど大量の神と釈尊の対話が後世にまで残されたのかという疑問は残る。しかもその問答が偈の形であったということも不自然であり、ここには後世の神話的処理がなされていると推測することも可能である。

- (1) パーリの4部と漢訳の4阿含（『別訳雑阿含』も含む）の六事と歡喜文を調査した【資料集8】「パーリ『経藏』の六事と仏在処一覧」p.316にも、「経の本文たる内容（正宗分）はパーリ・ニカーヤと漢訳阿含とはよく一致するが、形式上は著しい相違がある」と記した。

おわりに

以上本稿では、サンユッタニカーヤ・有偈篇に登場する神をその対応漢訳を対応させながらさまざまな視点から考察してきた。そしてその基本的姿勢は、今までわれわれが原始仏教聖典が釈尊の言行録であり、すべては歴史的事実が記されているという聖典観に基づいてである。

しかしながらこのような姿勢は、現代人の目からすると極めて滑稽に映るかもしれない。ここに登場する神は科学的にその存在を証明できないであろうから、神が主人公のこれらの経を歴史的真相が描かれたものとして見ることは科学的ではないと思われるであろうからである。

ところで「天相應」や「天子相應」の神たちはあたり一面を煌々と照らしながら現れる。これは月や星の光もない、足元さえ見えない真っ暗闇の夜がある世界を前提としているといわなければならない。現代の星さえ十分に見ることができない、真夜中でも明るい世界に生活しているわれわれには神は現れないのである。神もそうなら、原始仏教聖典にしょっちゅう現れる悪魔や夜叉や羅刹などの非人もそうである。「天相應」や「天子相應」の神たちはサーリプッタやアーナンダなど仏弟子などにも見えなかったようであるから、釈尊時代の人々にもその存在は実際には見ることはできなかったのかもしれないが、しかしながらその時代の人々はその存在を信じていたであろう。

原始仏教聖典はそのような人々に対して説かれた教えであり、そのような人々によって語り継がれたのであるから、神が登場するこれらの経の世界はまさしく現実に存在する世界であった。科学的に実証された歴史的事実（史実）とはいえないにしても、現実的には実証され得る世界であった。

現代の科学では地球は太陽の周りを回っているとされる。しかし著者には太陽こそわれわ

れの住む地球の周りを回っているとしか思われたい。だから太陽は海の向こうから現れ、山の向こうに沈んでいくと表現するのである。人工衛星にでも乗って地球と太陽の関係を目の当たりにすることができるのが日常となる時代となればともかく、今のわれわれには太陽が地球の周りを回っているのが現実である。これと同じように、神が煌々とあたり一面を輝かせて現れるのも現実であった。

原始仏教聖典がこのような現実を世界観としている以上、われわれもそのような世界観を共有しながら原始仏教聖典と接するべきであろう。本稿もそのような世界観を共有しているので、ここに説かれていることは現実であるという姿勢で取り組んだものとご理解いただきたい。

ただし森相応の神はそのような神ではなく、人間に近いところに住んでいる人間に近い神であった。これは仏弟子はもちろん一般の人々にも見える神であった。これも現代のわれわれからするとその存在が信じにくいだが、釈尊時代の人々には現実そのものであったのであろう。いわば神よりも地位の低い精霊のようなものであったのであろう。